
調 査 年 報 17

平 成 16 年 度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

調査年報 17

平成 16 年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



上磯町 館野遺跡 縄文時代後期初頭の配石遺構



P 439



P 483



恵庭市 西島松 5 遺跡 縄文時代後期後葉の土坑墓

P 445

目 次

平成16年度の調査

1	調査の概要	1
2	調査遺跡	4
	チブニー 2 遺跡	4
	オルイカ 2 遺跡	6
	キウス 5 遺跡	11
	対雁 2 遺跡	12
	館野遺跡	16
	矢不來 7 遺跡	23
	リヤムナイ 3 遺跡	24
	大町 2 遺跡	26
	穂香川右岸遺跡	30
	白滝遺跡群	34
	三次郎川左岸遺跡	36
	三次郎川右岸遺跡	38
	石倉 5 遺跡	42
	石倉 4 遺跡	44
	石倉 1 遺跡	46
	濁川左岸遺跡	48
	上台 2 遺跡	52
	森川 3 遺跡	54
	柏木川 4 遺跡	58
	柏木川13遺跡	61
	西島松 3・西島松 5 遺跡	62
	生淵 2 遺跡	66
	栄野 1 遺跡・新野上 2 遺跡	68
3	現地研修会の記録	72
4	設立25周年記念事業の記録	73
	設立25周年記念講演会・シンポジウム資料	74～106
5	協力活動及び研修	107
6	平成16年度刊行予定報告書	111
7	組織・機構	112
8	職員	113

北海道史略年表

本州の時代区分	年代（西暦）	北海道の時代区分	平成16年度調査遺跡の主な時期	
明治～平成	A. D. 1900	(近代、現代)		
江戸時代	A. D. 1200	近世 アイヌ文化期	穂香川右岸 上台 2、森川 3、オルイカ 2 大町 2	
室町時代		中世		
鎌倉時代				
平安時代		撥文時代		
奈良時代	A. D. 800	オホーツク文化期	柏木川13	
古墳時代	A. D. 400	縄縄文時代	三次郎川右岸、大町 2	
弥生時代	B. C. 300	縄 文 時 代	栄野 1、新野上 2	
晩期			晩期	森川 3
			後期	対雁 2、大町 2、生渾 2
後期			中期	西島松 5
			前期	館野、石倉 1、濁川左岸、三次郎川右岸 穂香川右岸
中期			前期	三次郎川右岸、オルイカ 2、キウス 5 森川 3、リヤムナイ 3
			早期	オルイカ 2 西島松 5
前期			草創期	
	草創期	オルイカ 2		
縄 文 時 代	B. C. 2000			
	B. C. 3000			
	B. C. 4000			
縄 文 時 代	B. C. 4000			
	B. C. 7000			
	B. C. 12000	旧石器時代		
縄 文 時 代	B. C. 20000			
	B. C. 30000			
	B. C. 30000			
旧石器時代	B. C. 20000			
	B. C. 30000			
	B. C. 30000			

平成16年度の調査

1 調査の概要

今年度は道内10市町に所在する24遺跡で発掘調査を実施した。このうち15遺跡は前年度などからの継続調査である。継続で整理作業を行ったのは5市町村の6遺跡である。

発掘調査を工事原因別に見ると、国土交通省北海道開発局の各開発建設部が実施する河川改修、あるいは国道の建設や改良に伴う調査が9遺跡、日本道路公団の高速道路建設に関わるものが8遺跡、土木現業所が行う河川改修、道路改良に伴うものが7遺跡である。

以下、調査の成果を時代、時期順に略述する。縄文時代の遺跡では複数の時期の遺物が出土することが多いが、ここでは顕著なものを重点的に述べる。なお、遺構などの()数字は貝数である。

旧石器時代 オルイカ2遺跡から細石刃石器群が出土している。札滑型細石刃核、細石刃、彫刻刀形石器、搔器などの石器、石核、剥片等で2,000点余の数量である。平成14年度に調査したものを含めて石器集中(ブロック)4ヵ所を検出したことになり、合計11点の細石刃核はすべて白滝産の黒曜石とみなせる。白滝産黒曜石を用いた「消費地遺跡」なのであろう。

縄文時代 早期 西島松5遺跡ではアルトリ式土器に並行するとみなされる貝殻文平底土器が、良好な出土状態で20個体ほど検出されている。オルイカ2遺跡では熱り糸文土器の東銅路Ⅲ式土器が出土している。

前期 リヤムナイ3遺跡では縄文尖底土器の春日町式、平底土器の円筒下層式の最古とみなされるものが出土している。ここは剥片剥離・石器製作の場所であったもので、頁岩、玄武岩、黒曜石を素材とする多数の石核・剥片・砕片がまとまりを持って検出されている。

森川3遺跡では円筒下層d式土器の時期の大型住居(3)が検出されている。最大のものは長軸13m、短軸11mで、その周囲には幅5m、最大厚み80cmの掘り上げ土がめぐっている。覆土の堆積状況から判断すると、屋根は土葺きだったのであろう。支柱穴、壁際の杭列などの配列を見ると、建て替えがなされたことが推定できる。

中期 三次郎川右岸遺跡の住居跡(5)には、大型で4本の支柱穴が明瞭なもの、焼失家屋と考えられるもの、小型でベンチ構造をなすものなどがある。オルイカ2遺跡の住居跡(6)、土坑(23)、焼土群などは、炭ヶ岡3式土器の時期のものである。キウス5遺跡の土坑(6)は、天神山式土器の時期である。

後期 館野遺跡では後期初頭のものとして推定できる配石遺構、盛土遺構が検出された。配石遺構は長さ30mの石列が18mの間隔で二列認められるものである。石列の東端部分は耕作による破壊を受け、西端部分は調査範囲外へ延びており、この配石が一連のものかどうかは確定できなかった。盛土遺構はこの配石遺構よりも外側に作られており、幅7~13m、最大厚み70cmで、多量の土器、石器等を含んでいる。

このほか住居跡(14)、土坑(179)、石囲い炉(37)、焼土(207)、Tピット(4)などの遺構がある。フラスコ状土坑(74)は配石遺構の内外から見つかっている。前年度調査分を合わせて58を検出した住居跡は、中期中業から後期前業までのものであり、配石遺構よりも古い時期のものである。住居跡に関係する土器には、サイベ沢Ⅰ式、大安在B式、ノダツⅡ式、涌元式、トリサキ式、十腰内Ⅰ式などである。このように多くの土器型式にわたる多種多様な遺構群をもつ集落の調査により、90万点を上回る遺物が得られている。

石倉1遺跡の住居跡(4)は前業のものである。土坑のひとつは、フラスコ状土坑を転用した墓である。濁川左岸遺跡の住居跡(8)、土坑(95)、石組み炉(5)の大多数は、前業のものである。三次郎川

右岸遺跡では礫が弧状に並ぶ配石の一部を検出しており、時期は前業と推定している。さらに前業の遺構には、浅い掘り込みで、石組み炉を持つ住居跡(2)、倒立した埋甕のある土坑、大型の土器破片を埋納した土坑などもある。

穂香川右岸遺跡では、北筒Ⅲ式土器の時期の住居跡(2)、土坑(18)、盛土(4)、焼土(9)が検出されている。ここの遺物では黒曜石の石槍が顕著である。

晩期 西島松3遺跡・西島松5遺跡では、昨年に引き続いて後期後業～晩期前業の時期の土坑墓・土坑(200)、焼土(28)などを検出した。土坑の多くは、その上半部分を消失しているが、多種多様な出土物が得られている。墓の副葬品とみなされるのは、小型の鉢と注口土器の組み合わせ、石棒、石斧、玉、垂飾類、サメの歯、漆製品などである。漆製品には櫛、腕輪、腰紐などがある。堂林式土器を副葬した土坑墓群から推定すると、周堤墓が存在したが、近年の削平により消失したものであろう。

生洞2遺跡には良好な遺物包含層が2枚検出されており、上位のものは中業、下位のものは前業(上ノ国式土器に相当するもの)である。中業の資料では、10m×20mほどの範囲に多量の土器、石器、炭化材、炭化クルミ、骨片が集積したものが注目される。後半～縄縄文時代後業の時期である対厩2遺跡では、土坑(14)、焼土(179)、集石(5)などの遺構が、重複する多数の生活面毎に検出されている。チブニー2遺跡ではタンネトウシ式土器の時期の土坑、焼土などが検出されている。

大町2遺跡ではタンネトウシ式土器の時期の遺物集積が検出されている。

縄縄文時代 森川3遺跡の恵山式土器の時期の焼土には、多量の獣骨片・魚骨片を含み、周囲に柱穴を

平成16年度の発掘調査など

事業委託者	原因工事	遺跡名	所在地	調査面積 (㎡)	区分、備考
札幌開発建設部	一般国道337号千歳市新千歳空港開通工事	オルイカ2	千歳市	5,500	平成14年にも調査
		チブニー2	千歳市	13,400	平成15年から継続
		キウス5	千歳市	1,056	平成15年から継続
石狩川開発建設部	石狩川改修工事の内対策基礎工事	対厩2	江別市	3,550	平成11年度から継続
		対厩2	江別市		整理作業
函館開発建設部	函館江差自動車道建設工事	館野	上磯町	2,815	平成15年から継続
		館野	上磯町		整理作業
		矢不素7	上磯町	2,141	新規
小樽開発建設部	一般国道276号岩内共和道建設工事	リヤムナイ3	共和町	3,500	新規
室蘭開発建設部	一般国道234号早来道路改良工事	大町2	早来町	3,640	新規
網走開発建設部	一般国道44号根室市根室道路工事	穂香川右岸	根室市	5,000	新規
網走開発建設部	一般国道450号白滝道路改良工事	湿部台2ほか	白滝村		整理作業
日本道路公団北海道支社	北海道縦貫自動車道建設工事	三次郎川左岸	森町	65	平成15年から継続
		三次郎川右岸	森町	1,850	平成15年から継続
		石倉5	森町	1,070	平成15年から継続
		石倉4	森町	1,852	新規
		石倉1	森町	700	平成14年から継続
		濁川左岸	森町	3,650	平成13年から継続
		上台2	森町	4,140	平成15年から継続
		森川3	森町	2,780	平成13年から継続
		上台1ほか	森町		整理作業
		石狩支庁 (札幌土木現業所)	柏木川改修工事	西島松3	恵庭市
西島松5	恵庭市			3,892	平成12年から継続
柏木川4	恵庭市			8,470	新規
柏木川13	恵庭市			132	平成15年から継続
西島松5	恵庭市				整理作業
渡島支庁 (函館土木現業所)	太櫛川広域基幹改修工事	生洞2	北檜山町	1,800	新規
網走支庁 (網走土木現業所)	社名濁川戸瀬(仲)線路改工事	栄野1	遠軽町	600	新規
		新野上2	遠軽町	2,140	新規
合計				74,728	

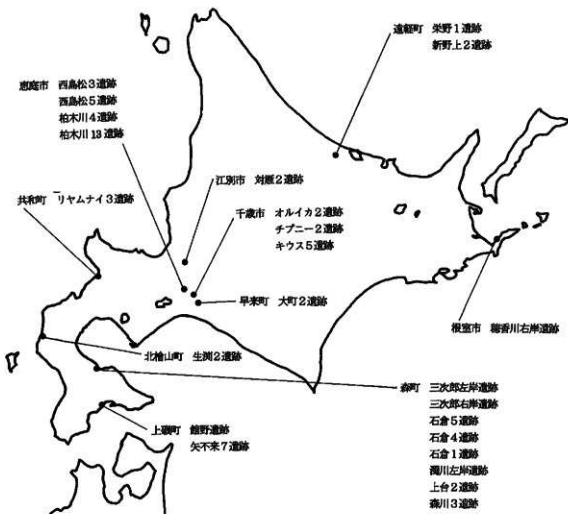
伴うものがある。柴野1遺跡、新野上2遺跡は、黒曜石の剥片剥離・石器製作の場所を示す多量の石核、剥片、破片が出土している。新野上2遺跡からは、墓とみなされる石器集中の土坑も検出されている。三次郎川右岸遺跡では20m×30mほどの狭い範囲に後北式土器が出土している。大町2遺跡では、後北C1式土器の時期の遺構、遺物が検出されている。粘板岩の石核・剥片はこの時期に顕著な石鏃の製作に関わるものである。

縄文文化期 柏木川13遺跡の住居跡(1)はカリンバ型と呼ばれるものである。三次郎川右岸遺跡では縄文土器1個体が出土している。

アイヌ文化期 大町2遺跡では、内耳鉄鍋、刀子が出土している。上台2遺跡では、前年に引き続き畑跡が検出されて、17世紀前半の時期が推定されている。この畑面から鉄製刀子(2)が出土している。森川3遺跡でも上台2遺跡例に前後する時期の畑跡が検出され、煙管の雁首(1)、鉄製品などの金属製品も出土している。生洩2遺跡では近世アイヌ期と推定される鉄刀(1)が出土している。オリカ2遺跡では、平成14年度に調査したものを含めて、平地住居(チセ)跡(9)、建物跡(5)、杭列(4)、焼土・灰集中(47)などが検出されており、集落(コタン)の様相が判明しつつある。

穂香川右岸遺跡では、近世末期と思われる陶磁器、金属製品、骨角器、ガラス玉、古銭などが出土している。このなかにはコンプラ瓶も認められる。

継続整理・報告書作成 上台1遺跡、森川4遺跡、館野遺跡は前年度の発掘資料の整理作業である。白滝遺跡群、対雁2遺跡、西島松5遺跡については、それぞれ膨大な資料群の整理が継続されている。



2 調査遺跡

チブニー2遺跡 (A-03-278)

事業名：一般国道337号新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局札幌開発建設部

所在地：千歳市中央962-11・12・13、1064-11、1068-19、1196-47

発掘面積：13,400㎡

発掘期間：平成16年5月6日～9月5日

調査員：皆川洋一、菊池慈人、佐藤 剛

遺跡の概要

チブニー2遺跡は、馬追丘陵西側緩斜面に流れるチブニー川右岸の河岸段丘に立地する。本河川流域に関しては、過去、平成13年度に左岸のチブニー1遺跡が、平成13・14年度の2ヵ年度に右岸のチブニー2遺跡が調査報告されている。3次調査となる本年度は、昨年度調査区の北側に隣接する範囲13,400㎡の調査を実施したが、試掘の結果をもとに、この内の北側から3,924㎡をⅢ層遺構確認調査、4,429㎡をⅢ層調査に絞っている。調査区の地形はチブニー川に面した標高約20～22mの段丘面で、主な調査成果は遺跡の大半を占める平坦面南側を中心に検出されている。包含層は、主に上位のⅢ層（「第Ⅰ黒色土層」相当：縄文時代晩期～アイヌ文化期）と下位のⅤ層（「第Ⅱ黒色土層」相当：縄文時代早期～晩期）である。火山灰は、Ⅳ層が樽前c降下軽石（Ta-c：BC2300頃降下）で、これ以外にはⅢ層中から量的に少ないものの白頭山-苦小牧火山灰（B-Tm：10世紀頃降下）も検出されている。

遺構と遺物

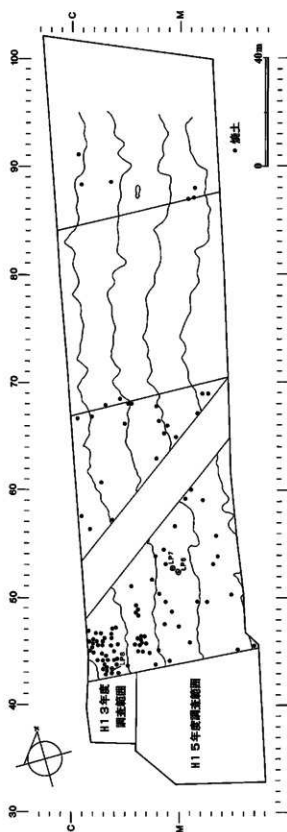
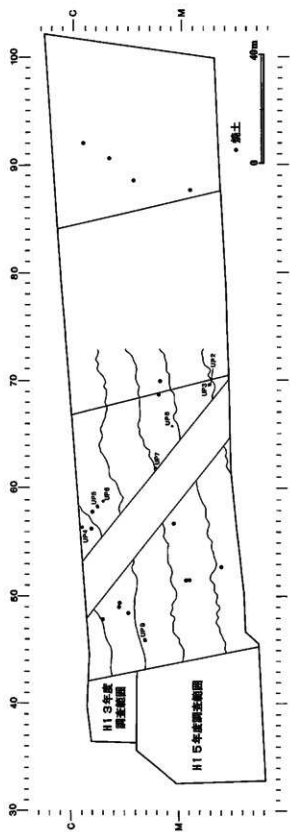
遺構は、Ⅲ層から上層8基（UP-2～9）、焼土9ヵ所（UF-38～46）、フレイク・チップ集中5ヵ所（UFC-1～5）、などが見つかった。大半は縄文時代晩期のものと考えられるが、UP-5については擦文文化期の墓と考えられる。Ⅴ・Ⅵ層からは土壘3基（LP-6～8）、焼土106ヵ所（LF-59～164）、が見つかった。遺物は、約11,000点が出土した。土器の主体はⅢ～Ⅴ層から出土する縄文時代晩期末のタンネットウシ式土器で、後期初頭の余市式土器がこれに次ぐ。他には、縄文早、前、中期、続縄文、擦文の土器なども出土している。石器は石槍、石鏃、つまみ付ナイフ、石斧、たたき石、すり石、砥石、台石、石皿、石核などが出土している。チブニー2遺跡は今回調査から外された道路下の範囲を残すのみで、これに関しては来年度以降調査実施の予定である。また、今回の調査に関してもそれに合わせて報告を行う予定である。



調査状況



LP-6・7完掘



遺構位置図 (上段：Ⅱ層、下段：Ⅴ～Ⅵ層)

オリカ2遺跡 (A-03-280)

事業名：一般国道337号新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局札幌開発建設部

所在地：千歳市中央1196、2535、2536

調査面積：5,500㎡

発掘期間：平成16年5月6日～10月31日

調査員：三浦正人、阿部明義、広田良成

遺跡の概要

遺跡は千歳市街地から北東に約6km、チブニー2遺跡の南西約1km、馬追丘陵裾部にある。調査区のほとんどは標高11～15mほどの河岸段丘上にあるが、南西部はオリカ川の旧河道に向かう緩斜面となっている。当遺跡は平成14年度に3,230㎡調査しており(B地区)、今回の調査区はその両側となる(A・C地区)。B地区では、アイヌ文化期の平地式住居や建物跡等、縄文時代中期の竪穴住居跡や土坑、縄文時代のTピットや焼土、旧石器時代の札滑型細石刃核を含む石器集中等が検出されている。

遺構と遺物

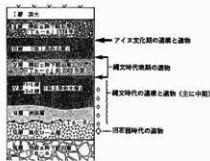
遺構は、Ⅲ層では、アイヌ文化期の平地式住居跡3軒、建物跡2棟、単独の柱穴14基、焼土・灰集中34ヵ所、貝集中4ヵ所、縄文時代晩期の土器集中2ヵ所、時期不明の溝状遺構1条が検出されている。焼土・灰集中は平地式住居の近くでまとまって検出されたものがある(焼土群2～4)。V層では縄文時代の竪穴住居跡6軒、土坑23基、Tピット3基、焼土134ヵ所、土器集中4ヵ所、集石1ヵ所、フレイク集中7ヵ所が検出されている。また、列状に並んだ焼土が2ヵ所検出された(焼土列1・2)。

遺物は土器等約25,000点、石器等約60,000点、金属製品等が約70点、合計約85,000点出土した。Ⅲ層の上層は縄文時代晩期後葉のタンネットウシ式が主体で、続縄文時代の土器も少量出土している。石器等はⅢ層のアイヌ文化期のものとしては火打石や錘石と考えられる小礫が、縄文時代晩期では石鏃、スクレイパー、磨製石斧、フレイク、礫等が少量出土している。金属製品等は全てアイヌ文化期のもので、鉄製品は刀子、釘、鉄鏃等が出土し、銅製品も少量ある。またガラス玉が3点出土している。アイヌ文化期の平地式住居の炉や焼土・灰集中等から魚骨・獣骨・カワシンジュ貝等が検出された。V層の土器は縄文時代中期中葉の天神山式(萩ヶ岡3式)が最も多く、次いで晩期後葉のタンネットウシ式、早期後半の土器が出土している。他に縄文時代前期、後期の土器も少量出土している。V層の石器等はフレイクが主体で、石鏃、つまみ付きナイフ、磨製石斧、礫等も少量出土している。

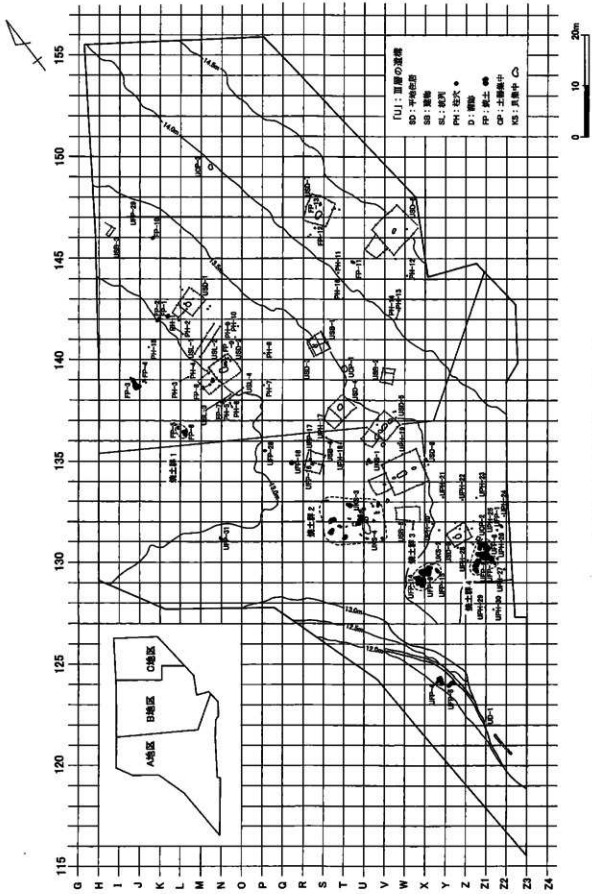
旧石器時代の遺物はV～Ⅶ層にかけて約2,400点出土し、3ヵ所の石器集中(ブロック)が検出された。後期旧石器時代の細石刃石器群で、札滑型細石刃核8点、細石刃約380点が出土し、他に影器、削器、搔器、フレイク等がある。



遺跡位置図



基本土層模式図



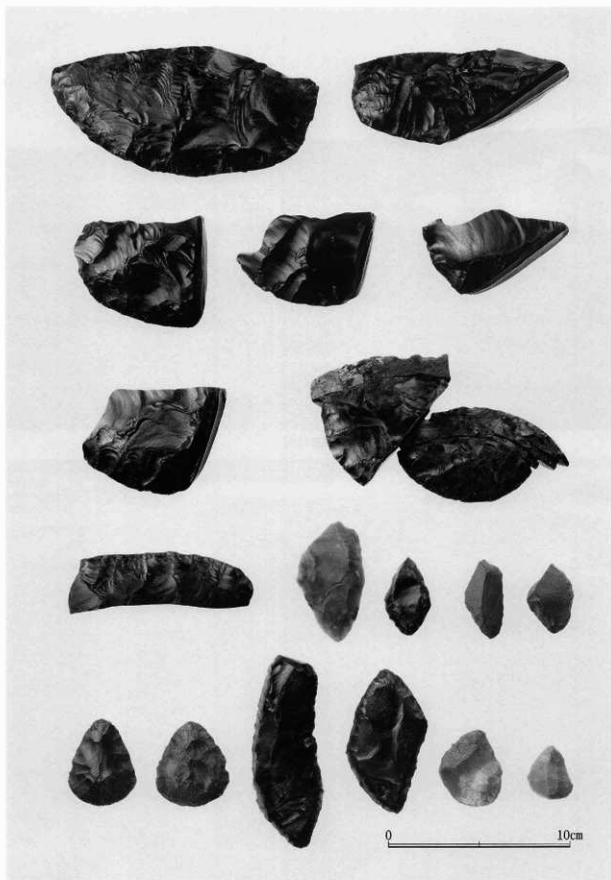
Iwano 遺構位置図 (等高線はIwano上面)



調査状況



USD-8 検出状況



旧石器時代の遺物

キウス5遺跡 (A-03-93)

事業名：一般国道337号新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局札幌開発建設部

所在地：千歳市中央1286、1287、1319

調査面積：1,056㎡

発掘期間：平成16年9月6日～10月31日

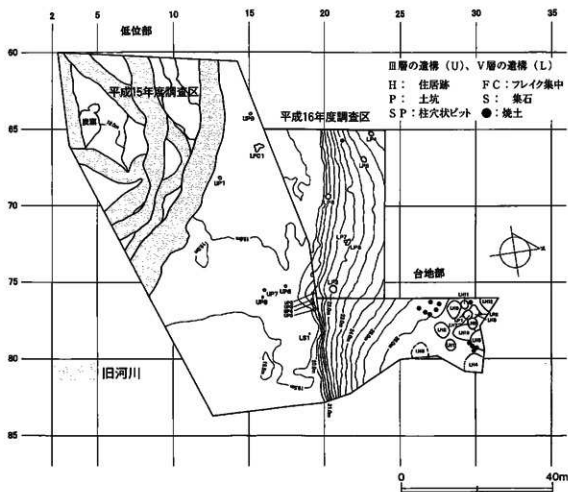
調査員：菅川洋一、菊池慈人

遺跡の概要

千歳市街から北東へ約8km、馬追丘陵の西麓から旧馬追沼に注ぐキウス川右岸の段丘上から低位部にかけて広がる遺跡である。平成6～10年度に北海道横断自動車道建設に伴い、当センターと千歳市教育委員会により調査されているが、本調査は国道337号の新ルート建設に伴うものである。今年度は昨年度の5,000㎡に続き、台地上から旧河川に続く斜面部1,056㎡を調査した。遺物包含層は樽前c降下軽石層(Ta-c)より上位のⅢ層(第Ⅰ黒色土層)と下位のV層(第Ⅱ黒色土層)である。

遺構と遺物

遺構はⅢ層から焼土1ヵ所(UF-1)、V層からは主に縄文時代中期の土坑6基(LP-3～8)が検出された。遺物の総点数は約15,000点である。Ⅲ層では縄文時代晩期の遺物が主体であるが、縄文文化期の遺物も少量出土した。V層では縄文時代早期～晩期が出土しているが、主体は中期後半である。



遺構位置図

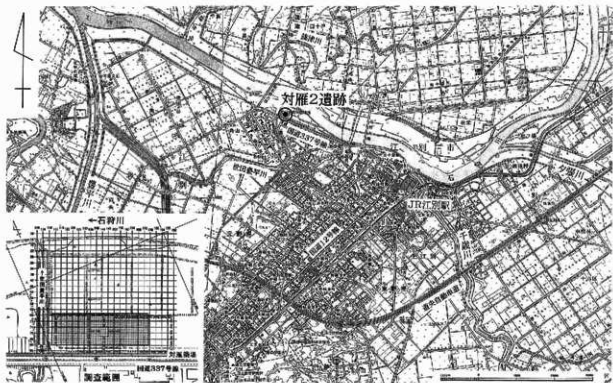
対雁 2 遺跡 (A-02-110)

事業名：石狩川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査
委託者：国土交通省北海道開発局石狩川開発建設部
所在地：江別市工栄町28番地（石狩川河川敷緑地内）
調査面積：3,550㎡（うち1,850㎡は継続調査）
発掘期間：平成16年5月6日～10月29日
調査員：鈴木 信、笠原 興、芝田直人、酒井秀治

遺跡の概要

対雁 2 遺跡は JR 江別駅の北西約 4 km の石狩川左岸に位置する。世田豊平川（旧豊平川）との合流地点よりも上流側の石狩川河川敷緑地内であり、標高約 6～8 m の自然堤防上の微高地に立地する。調査以前に運動公園の造成に伴う均平化を受けている。石狩川の河川改修が本格化する 1970 年代以前は対雁番屋、樺太アイヌ強制移住地、対雁小学校、榎本牧場などが所在した旧対雁村の中心部がこの付近であり、江別の歴史を語る上で欠かせない重要な地域である。

遺跡調査の 6 ヶ年目にあたる。これまでの調査から、遺跡は縄文晩期後半～統縄文後葉にかけて形成されたと考えられる。今年度は 110～127 線 85m×67～71 線 20m の西側調査区 1,700㎡、および 127～164 線 185m×71～73 線 10m 東側調査区 1,850㎡、計 3,550㎡ の調査を行った。なお、東側調査区については次年度に継続調査を行う。遺跡の地層は自然堤防の形成に伴い、世田豊平川へ向かって落ち込んでいる。ほぼ同一時期の遺構・遺物が検出する生活面は、季節的・周期的な水位上昇と考えられる水成堆積により数 cm～数十 cm の土砂で覆われている。平成 13・14 年度調査範囲では 245 面、平成 15 年度調査範囲では 104 面の生活面が確認されている。同一の生活面は現地表面の標高 8.4 m 付近から標高 6 m 付近まで、標高差約 2.4 m にわたって検出されている。遺物や放射性炭素年代測定結果から、生活面はごく短いサイクルで形成されたと考えられる。



遺跡位置図

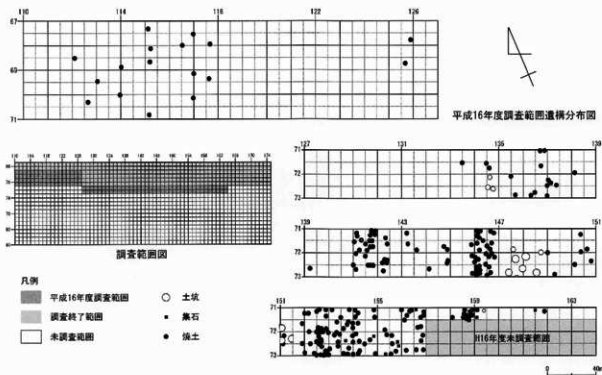
遺構と遺物

今年度の発掘調査範囲では、土坑が134・147～148・151ラインの3ヵ所から14基、焼土は118～133線間ではほとんど見られないなどの分布の濃淡が見られるが調査範囲の全域から179ヵ所が検出されている。この他集石5ヵ所やフレイク・チップや炭化物の範囲が見られる。土坑は円形や楕円形、規模は長径1.1～1.7mほどの大型のものが多い。構築面の確認が困難であったため深さは未確定であるが、これまで確認できたものからの推定では0.3～0.5mと考えられる。自然埋没したものと考えられ、墓坑と判断されるものはなかった。土坑が埋没する途中の窪みを利用したフレイク・チップ集中や炭化物・焼土・焼けた礫片の集中が検出されている。焼土は現地で形成されたもののほかに、クルミなどの炭化物や骨片を伴うもの、廃棄されたようなもの、焼土の周囲に土器を据えるためと考えられる浅い小ピットを伴うものが検出された。

今年度と平成11年度のトレンチ調査で出土した遺物は平成16年末現在で土器等9,650点、石器等21,238点、合計30,888点である。遺物のほとんどは138線以东の発掘区から出土した。時期は縄文晩期後葉～統縄文前葉に属するものである。石器は石鏃・スクレイパー・たつき石が多く出土している。石材としては、剥片石器が黒曜石、礫石器では安山岩・砂岩・珪岩が多い。

土器集中1の整理作業

土器集中1は平成11・12年度に調査を行い、土器片68,075点、石器等5,954点のほか、多量の炭化物・焼獣魚骨片が出土している。出土した土器は縄文晩期後葉の後半、大洞A'式と並行する時期のもので、統縄文初葉の砂沢式と並行する可能性もある。整理作業は昨年引き続き土器の破片接合・石膏復元・実測（一部日立エンジニアリング株式会社に委託してのレーザー三次元計測）・写真撮影等を行っている。





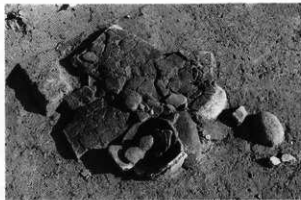
調査状況（南から）



110～112線東西メインセクション（北東から）



焼礫検出状況（南西から）



土器出土状況（北から）



遺物出土状況（南から）



小ピットのある焼土（西から）



土坑群検出状況（南から）

館野遺跡 (B-06-15)

事業名：高規格幹線道路函館江差自動車道建設工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局函館開発建設部

所在地：上磯郡上磯町字館野3-3ほか

調査面積：2,815㎡

発掘期間：平成16年5月6日～平成16年11月16日

調査員：佐川俊一、中田裕香、中山昭大、富永勝也、福井淳一、山中文雄

遺跡の概要

館野遺跡は函館湾西岸、上磯町の市街地から南西約5km、下町沢川の右岸海岸段丘上に位置し、東側に函館湾を隔てて函館山を臨む。

標高は約50～60mで、海岸線の切り立った崖からの距離は100～200mである。館野の地名にまつわる由来として、江戸時代末期の松浦武四郎の旅行記に、「下国氏（安藤氏）の築いた館跡があり、ゆえに館野（通り）と称す」というものがある（松浦1864）。

昨年から今年度にかけての調査区の地形は、南西から北東に向かって緩く傾斜する尾根状の平地部分で、傾斜とはほぼ直して北西から南東方向に延びる断層の高低い地形にかかる部分があり、断層の東側には縄文中期、西側には縄文後期の遺構が分布している。

土層は、まずⅠ層に現代の耕作土、Ⅱ層が火山灰層、Ⅲ層が縄文時代の黒色土、Ⅳ層が漸移層、Ⅴ層が黄褐色ローム層である。

調査区内は縄文時代の遺物包含層の上半部が17世紀と推定される畑、さらに近代、現代の耕作により均平化、深度に攪乱がおよんでいた。配石遺構が検出された地域では、耕作により石が引き抜かれ、石組みの形状を残さない状態だった。

遺構と遺物

縄文時代中期末から後期にかけての遺構・遺物が主として検出された。遺構は昨年度分を合わせると竪穴住居跡58軒（その内、今年度検出は14軒）、土坑228基（179基）、石囲い炉47基（37基）、焼土263基（207基）、Tピット11基（4基）、小ピット約2900基、そして後期初頭の配石・盛土遺構とそれに関わる地形の造成跡である。

造成跡は配石の内側に整地遺構（中央広場）、外側に貼土遺構（内帯）、盛土遺構（外帯）にわけることができる。全体の配置は楕円形状を呈すると推定される。今年度出土の遺物は土器石器等概数で60万点である。

配石遺構は平坦に整地した広場を区画して北西から南東方向に並び、長さ約30～80cmの砂岩を主とする円礫を配置したものである。原位置を保つものが70個、動いているが元は配石の一部と推定されるもの48個があり、以上の118個を中心に大小の礫約300個で構成される。

調査区内で検出された南・北の配石列は長さ約30mで、両列の間隔は約18mである。東端は攪乱がひどく、西端は調査区外に延びており、南北の石列が連続して結ばれ、閉じているものか、確定できなかった。

中央の広場では、平坦面を造成するために整地作業がおこなわれており、Ⅴ層に近い土質の土を選別した整地層が分布している。

配石の外側には（仮称）貼土が施され、広場に対し中段のテラスを形成する。貼土遺構の貼土層はⅢ+Ⅳ+Ⅴ+炭化材の混合土の単層から成るが、特につき固められたものではない。

内帯の外側には外帯（盛土遺構）が形成され、配石列と平行して分布している。盛土遺構の幅は7～

13mほどあり、層厚は厚いところで70cmに及ぶ。盛土層の北西端は調査区外にあり、盛土遺構に関しては地表の観察から推定すると約20m外側で南北の盛土遺構が連結し閉じているものであろう。

南東端は昨年度の調査区域内にあるが、近代以降の畑の耕作によって上部が削平され、詳細は不明である。

盛土層は内帯の外側に形成され、整地の為の削平が途切れた縄文時代の自然堆積層の上に、掘り上げ土と考えられるV層土と、焼土（炭化材・焼骨片を含む）や遺物（土器を主とする）を多く含んだ土層が交互に堆積している。

貼土・盛土遺構（内帯・外帯）には区画を意識して配置されたとみられる礫が一部検出されたが、南北の区域のいずれも原位置を保つ状態のものは少ない。

配石遺構と一体をなす盛土遺構に伴い出土する遺物は、涌元式の手から新手、トリサキ式にかけてのものが時間幅がみられる。今後、盛土遺構での層位的な上下関係から土器の型式的変遷も検討していきたい。石器は特徴的なものとして石刀や、秋田県の伊勢堂岱遺跡でみられた円盤状石製品が多く出土している。組成はフレイクや礫石器が特に少ない。

竪穴住居跡は縄文中期から後期初頭にかけたもので、昨年度調査区では北東側の台地上に、サイベ沢Ⅷ式、大安在B式からノダップⅡ式にかけての中期の竪穴式住居跡が分布していた。今年度調査の竪穴住居跡の多くは貼土・盛土の下位から検出され、配石遺構以前のものである。南西側には後期初頭の天祐寺式期の住居群がみられ、昨年度調査された中期の集落からの変遷が考えられる。

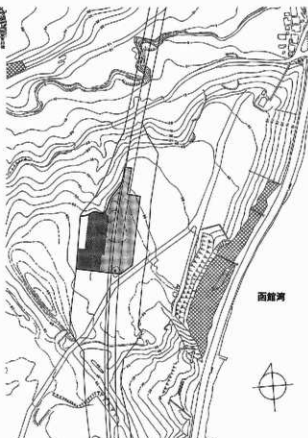
土坑のうちフラスコ状のものは広場と、南北の配石遺構を挟んで内帯に多く分布する。フラスコ状土坑は時期幅が広く、覆土の堆積状況から整地層・貼土層・盛土層構築前後のものがあり、今後の整理作業で詳細に検討し、更に前後関係の推定につとめたい。

石囲い炉（屋外炉）は広場の外側の区域に多く検出される。焼土も同様の傾向を示している。

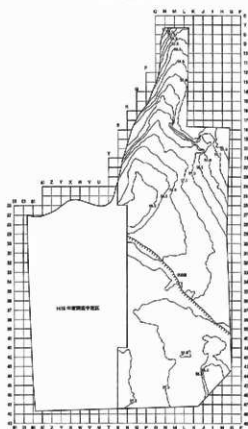
小ピットは広場内には約460基、配石の下位に約420基、内帯を主に、一部外帯下位に約2000基、合計約2880基が検出されている。広場内の分布は、南東端に北東から南西方向に列状に見られ、貼土層・盛土層に類する覆土の列があり、覆土のパターンから何期かにわけて列が造りかえられたと推定される。また、石列に沿う柱穴もみられた。配石の下位には石設置の為の掘り方と、長軸約50～100cm、深さ約30cmのピットがみられた。内帯に分布するものについては、掘立柱建物跡の可能性のあるもの、または柱穴や杭穴とは趣を異にするものがある。これらも配石遺構と一体をなす遺構と考えられ、今後その詳細について検討をしていきたい。



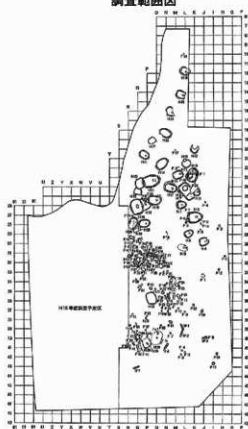
遺跡位置図



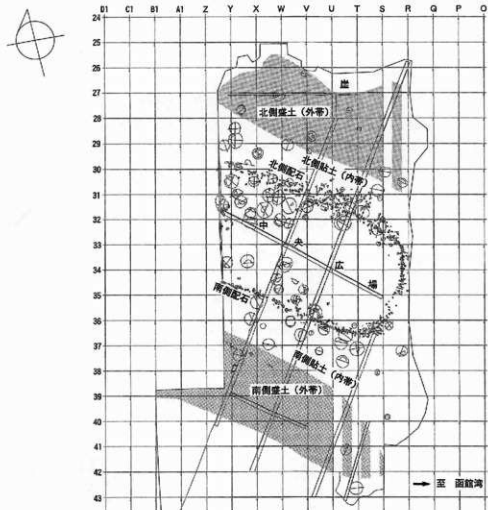
調査範囲図



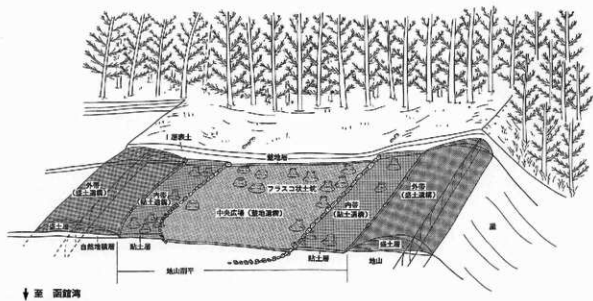
平成15年度地形図



平成15年度遺構配置図



配石・盛土遺構概念図



館野遺跡配石・盛土遺構イメージ図



遺跡遠景



配石遺構全景



配石



配石 抜け痕



北側盛土 遺物出土状況



南側盛土 遺物出土状況（盛土上面）



南側盛土 配石、小礫出土状況

矢不來7遺跡 (B-06-62)

事業名：高規格幹線道路函館江差自動車道建設工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局函館開発建設部

所在地：上磯郡上磯町字矢不來437-6ほか

調査面積：2,141㎡

調査期間：平成16年10月4日～平成16年10月29日

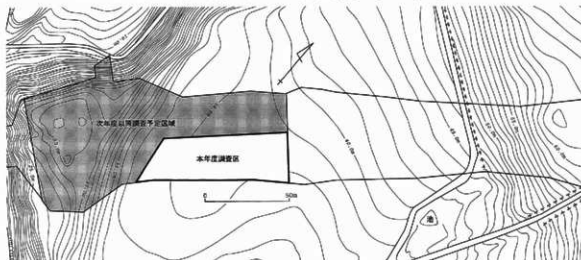
調査員：佐川俊一、中山昭大

遺跡の概要

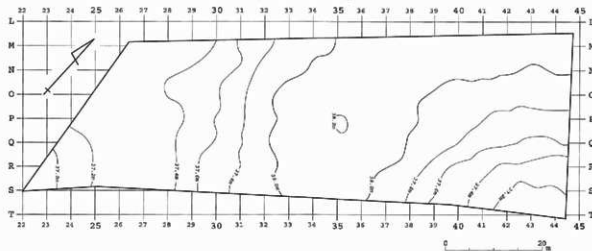
上磯市街地から約10km木古内よりの、茂辺地川左岸に位置する。海岸線からは1kmほど内陸に入り、標高約30mと約38mの二段の河岸段丘上に立地する。本年度はそのうち標高約38m前後のほぼ平坦な場所の遺構確認調査を行った。遺跡の全体面積は約8,400㎡で、低位段丘上には径5～10mの堅穴状のくぼみが10ヵ所認められる。

遺構と遺物

遺物包含層は近年の耕作で完全に失われており、遺構は検出されず、遺物は土器1点、石器等3点の僅か4点にとどまった。土器は縄文時代のもので、時期は特定できていない。



遺跡と周辺の地形



調査区の地形

リヤムナイ3遺跡 (D-12-29)

事業名：一般国道276号岩内共和道路工事
 委託者：国土交通省北海道開発局小樽開発建設部
 所在地：岩内郡共和町梨野舞納19-2ほか
 調査面積：3,500㎡
 発掘期間：平成16年7月8日～10月29日
 調査員：遠藤香澄、笠原 興

遺跡の概要

遺跡は岩内町の市街地から北東方向に約4km、日本海に面した海岸砂丘地帯の標高約7mに立地する。この付近は3～4列の砂丘列が発達しており、遺跡はこのうちの最も内陸よりであり、東側は標高約30mの海岸段丘の北端部とも接している。

リヤムナイ地区は南側は岩内町、北側は泊村にはほぼ隣接し、遺跡の南方には岩内岳を大きく望むことができる。遺跡と隣接する段丘部には「石冠街道」で知られる梨野舞納段丘1遺跡や北海道指定史跡である岩内町の東山遺跡等、縄文時代前・中期の円筒土器文化期の大遺跡群が控えている。また、調査区内には並走していた旧国鉄岩内線と旧茅沼炭坑専用鉄道が分岐する地点にあたり、調査区を横断するように2列の道床と路盤土が残っていた。この旧鉄道に関連する側溝や、路線に沿って等間隔で並ぶ多くの杭跡等も検出されている。

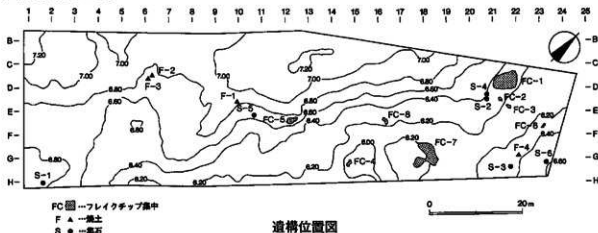
遺構と遺物

遺構は石器製作に関連するフレイク・チップ集中域が8カ所、集石6カ所、焼土4カ所である。いずれも周辺から出土した土器から縄文時代前期前半のものと考えられる。フレイク・チップ集中域は頁岩が約8割を占め、残りは玄武岩と黒曜石である。この他、石核も多く出土し、周囲には集石（たつき石等）や台石等が多く出土している。

IV層下位から出土した集石（S-1）は石斧が5点、スクレイパーが1点重なった状態で出土した。また、焼土F-4の周囲からは炭化したクルミ片や獣骨片が検出された。

遺物は土器が2,300点、石器600点、フレイク等が28,700点、合計31,600点出土した。土器はその多くが遺構の集中する15ラインより北側から出土している。

主体は大津2・3群に類する円筒下層a式期直前あるいは下層a式の古い段階に相当するとみられる平底の土器群で、尖底のものも認められる。押し引き沈線文の施された春日町式に相当するものもわずかに出土している。

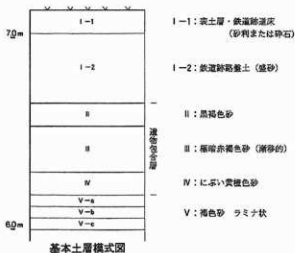


このほか円筒下層d式、中期後半のサイベ沢Ⅷ式の資料が13ライン以南より出土している。石器は石鏃、スクレイパー、石核、たたき石、台石が多く、石鏃は無茎で基部の抉りの深いものと浅いものが目立ち、有茎のものは数点しか出土していない。たたき石は最も多く約200点を数える。この他には4カ所を打ち欠いたやや大型の石鏃も特徴的である。

調査は次年度も行われる予定である。



遺跡位置図



調査状況



遺物出土状況



倒立した状態で出土した前期前半の土器



前期前半の土器

大町2遺跡（J-11-7）

事業名：一般国道234号早来バイパス建設工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部

所在地：早来町大町137ほか

調査面積：3640㎡

発掘期間：平成16年8月2日～10月29日

調査員：千葉英一、西田茂、佐藤 剛、藤原秀樹・宗像公司（文化課）

遺跡の概要

J R早来駅から北東0.8kmの大町地区市街地の北東端に位置する。馬追丘陵の南側を流れる安平川の支流であるニタッポロ川左岸の河岸段丘上にあり、標高20m付近に立地する。本河川流域では昭和49・50年度に支安平川の左岸に位置する安平A遺跡が調査され、統縄文時代前半期の後北C期の土坑墓などが見ついている。また、早来町史によれば本遺跡からは縄文時代晩期末の壺が採集されている。

基本層序は、I層（表土、耕作土）、II層（樽前b降下軽石）、III層（「第I黒色土層」相当：縄文時代晩期～アノス文化期）、IV層（樽前c降下軽石）、V層（「第II黒色土層」相当：縄文時代前期～晩期）、VI層（漸移層：縄文時代早期）、VII層（樽前d降下軽石）である。I層とII層の間には、遺跡の東端部で部分的に降下樽前a降下軽石とその下に「第0黒色土層」相当がみられる。またIII層中では、風倒木の落ち込みなどに部分的に白頭山一苦小牧火山灰（B-Tm）を検出した。

遺構と遺物

遺構は、III層から土坑4基、焼土7ヵ所、遺物集中地点38ヵ所（土器・石器、フリイク・チップ、礫、炭化物）、柱穴7ヵ所が見つかった。大半は統縄文時代前半期末の後北C式期のものと考えられ、次いで縄文時代晩期末のものがある。V層からは堅穴住居跡2軒、土坑18基、Tピット4基、焼土57ヵ所、遺物集中地点24ヵ所（土器・石器、フリイク・チップ、礫）が見つかった。縄文時代前期～晩期が主体である。

III層の内耳鉄鍋を伴う礫集中は、本遺跡内の他の時期と比較すると小さめ（4～9cm程度）の川原石を平面的に並べたもので、その上に内耳鉄鍋が乗った状態で見つかった。また刀子がその周囲から見つかった。後北C式期の遺物集中地点は、土器がまとまって出土している地点、黒曜石のフリイク・チップが主体の地点、粘板岩のフリイク・チップが主体の地点などがあり、各々に特徴がみられる。また周囲には焼土や柱穴が確認できたものがある。各遺物集中地点や焼土、柱穴がどのような関係をもつのかは今後の検討による。

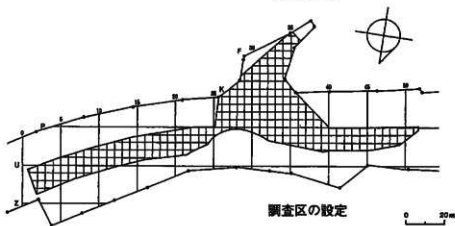
V層の堅穴住居は縄文時代中期後半頃のもので、集落の一部を成している可能性が高い。土坑では、墓の可能性の高いものがある。また、晩期後葉の遺物集中地点は土器の廃棄ブロック、晩期初頭の遺物集中地点は、周囲に樽前d降下軽石が混じる黒色土が見られることから盛土遺構の可能性もある。

遺物は、概算でコンテナ（59×39×15cm）80箱である。III層からは後北C式や縄文時代晩期末のタンネットウシ式土器、黒曜石や粘板岩製の石鏃などの石器、U字鋸先などの鉄製品が出土している。V層からは縄文時代早期中葉、中期後半、後期、晩期などの土器が出土しており、主体は中期後半の北筒式と晩期後半のタンネットウシ式である。石器は石鏃、つまみ付ナイフ、スクレイパー、石斧、たたき石、すり石などが出土している。

大町2遺跡は西側がすでに消失しているが、遺跡の範囲は今年度調査区外にも広がっている。その一部は道路建設用地になっており、今後調査が行われる予定である。III層の遺物集中地点や焼土は今年度調査区より南西・南東側、V層の遺物集中地点や堅穴住居跡、焼土は南東側に広がりが予想される。



遺跡位置図



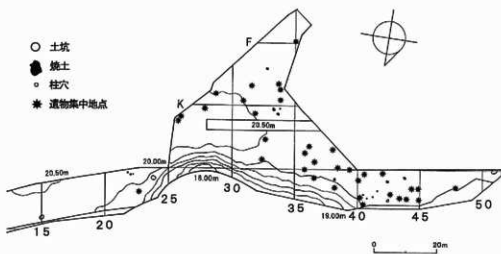
調査区の設定



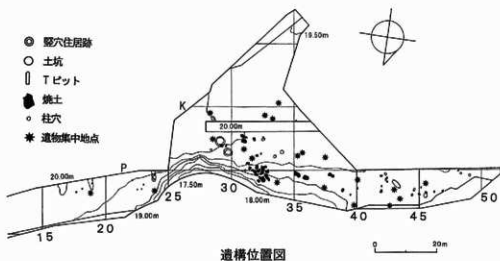
I 層(黄土、礫層土)
II 層(河川下層土層: T ₁ -a)
III 層(河川中層土層: T ₁ -b)
IV 層(第I 基色土層(埋砂))
IV ₁ 層(赤土層(埋砂))
IV ₂ 層(河川下層土層: T ₁ -c)
V 層(第II 基色土層(埋砂))
VI 層(埋砂層)
VII 層(河川下層土層: T ₁ -d)

土層模式図

Ⅲ層(樽前c降下軽石層上位)の遺構



V層(樽前c降下軽石層下位)の遺構



遺構位置図



調査状況 (西から)



内耳鉄錆と礫集中 (西から)



後北C式土器片フレイクチップ集中 (北から)



LH-2 (北から)



晩期後葉の土器集中 (R-42 II層) (東から)

穂香川右岸遺跡 (N-01-296)

事業名：一般国道44号根室道路建設工事に伴う穂香川右岸遺跡発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局釧路開発建設部

所在地：根室市穂香150番地ほか

調査面積：5,000㎡

調査期間：平成16年5月6日～平成16年10月20日

調査員：越田雅司、委場和人

遺跡の概要

穂香川右岸遺跡は根室半島西部の標高5～12mの段丘南西部に位置し、北側約500mには根室湾が広がる。遺跡西側には穂香川河口の沖積低地があり、その対岸の段丘には平成13～15年度に調査を行った穂香竪穴群がある。

遺跡の現況は北西側が干場、資材置き場でⅣ層もしくはⅤ層まで重機で削平されている。その他は原野であるが、以前は牧草地などに利用されており、斜面部以外広く耕作されていた。

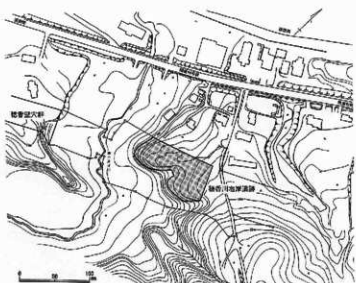
基本土層はⅠ層：表土、耕作土、Ⅱ層：黒色土、Ⅲ層：黒褐色土（主に縄文時代後期前葉の遺物包含層）、Ⅳ層：摩周火山起源の黄褐色火山灰Mg～Mk（約7,000年前降下）、Ⅴ層：黒色土（縄文時代早期以前の遺物包含層、今回遺物出土なし）、Ⅵ層：黄褐色ローム層である。縄文時代の竪穴住居跡、土坑覆土には樽前c火山灰の二次堆積がみられる。

遺構と遺物

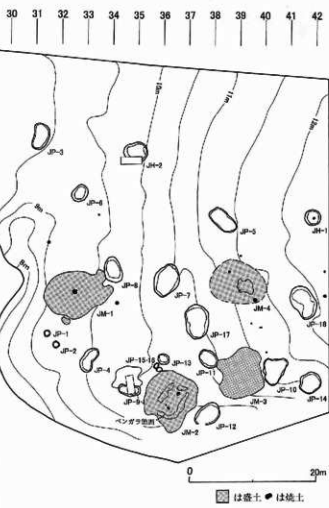
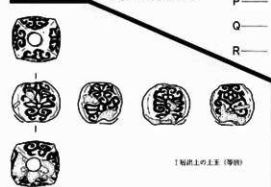
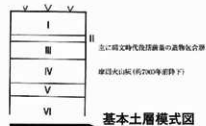
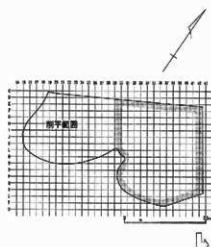
遺構は台地南側を中心に竪穴住居跡2軒、土坑18基、盛土4ヵ所、焼土9ヵ所が検出された。いずれも縄文時代後期前葉の北筒Ⅲ式土器期と考えられる。土坑のうち、長径3～5m程の不整の楕円形のものについては、炉、柱穴はないものの規模からして竪穴住居の可能性もある。竪穴住居跡、土坑とも遺物はごく少量である。盛土は2ヵ所で上面が削平されていたが、2ヵ所（JM-1・2）においては黄褐色土（Ⅵ層）を主体とした盛土が環状に検出された。平面形は径8m程の環状もしくは不整の円形で、Ⅲ層をやや整地した部分に形成されている。深さは厚い部分で30～40cmである。盛土中や盛土直下にはフレイク、土器、礫石など遺物が多く、盛土下には焼土や多数の小柱穴が特徴的にみられる。JM-2では盛土下整地面から炭化材がまとめて検出され、その周囲には広くベンガラが散布されていた。

遺物は耕作層からは近世末期と思われる陶磁器、金属製品、骨角器、ガラス玉、古銭などが12,000点以上出土した。陶磁器類は徳利、甕、皿類、漕鉢があり、酒や醤油の輸出用容器であるコンブラ瓶もみられる。金属製品は鉄製品、銅製品などがあり、多量の和釘のほか、マレク、銚、マキリ、鎌、鉄鍋、火打ちがね、指貫、キセル、刀の銚など多様である。骨角器はキテが1点出土している。また文様が4面に施された径1cmほどの土玉も出土した（図参照）。これら近世遺物は遺跡北東部に集中しており、調査区外北東側に主体部があると考えられる。

Ⅲ層からは縄文時代後期前葉の北筒Ⅲ式土器、黒曜石製の石鏃、石槍、スクレイパー、つまみ付きナイフが出土し、特に石槍が多くみられる。



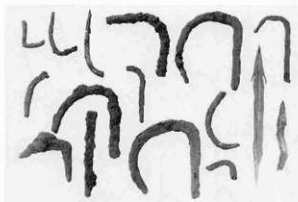
遺跡位置図と周辺の遺跡



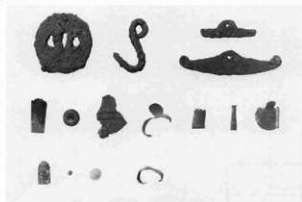
遺構位置図 (等高線はI層除去後)



調査状況



金属製品（漁労具等）



金属製品（刀の鉦、火打ち金等）



キセル（約1/3）



土玉（約3/2）



JH-1 遺物出土状況



JP-7 全景



JM-2 検出状況



JM-2 炭化材出土状況



JM-2 小柱穴群

白滝遺跡群

事業名：一般国道450号白滝丸瀬布道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
 委託者：国土交通省北海道開発局網走開発建設部
 整理期間：平成16年4月1日～平成17年3月31日
 調査員：高橋和樹、鈴木宏行、直江康雄

継続整理遺跡一覧

遺跡名	所在地	遺物点数(点)
服部台2遺跡 (I-20-13)	紋別郡白滝村字奥白滝18-3	798,030
奥白滝1遺跡 (I-20-50) ※	紋別郡白滝村字上白滝183-2、183-5	182,921
上白滝8遺跡 (I-20-91) ※※	紋別郡白滝村字上白滝181-4、182-2、182-3	647,130
白滝8遺跡 (I-20-58)	紋別郡白滝村字白滝146-1、146-2	4,036
白滝18遺跡 (I-20-92)	紋別郡白滝村字白滝145、139-1	47,825
白滝3遺跡 (I-20-36)	紋別郡白滝村字白滝106他	41,281
旧白滝9遺跡 (I-20-32)	紋別郡白滝村字旧白滝442	28,320
旧白滝8遺跡 (I-20-31)	紋別郡白滝村字旧白滝419、429、442、443	529,157
旧白滝5遺跡 (I-20-28)	紋別郡白滝村字旧白滝417	261,600
下白滝遺跡 (I-20-23)	紋別郡白滝村字下白滝99-1	156,700
中島遺跡 (I-19-34)	紋別郡丸瀬布町南丸48、52	1,686
合計		2,698,686

※ 平成12年度調査分 ※※ 西地区分

遺跡群の概要

白滝村は、北海道の黒根といわれる大雪山系の東北山麓にあり、市街地の北西約6kmには国内有数の黒曜石産出地として知られる赤石山がある。村内を東西に流れる湧別川とその支流の支湧別川の河岸段丘上には、旧石器時代を中心とした遺跡が多数所在し、それらは「白滝遺跡群」と総称されている。特に赤石山に通じる八号沢川、十勝石沢川、幌加湧別川と湧別川との3ヵ所の合流点付近には、大規模な遺跡が集中している。いずれも白滝産の黒曜石を背景とし、多量の石器製作を行う原産地遺跡として位置付けられるが、遺跡の立地や石器群によってそれぞれ特徴を異にする。当センターでは平成7年度から17遺跡、約99,000㎡の調査を行い、約460万点、約9tの遺物が出土している。

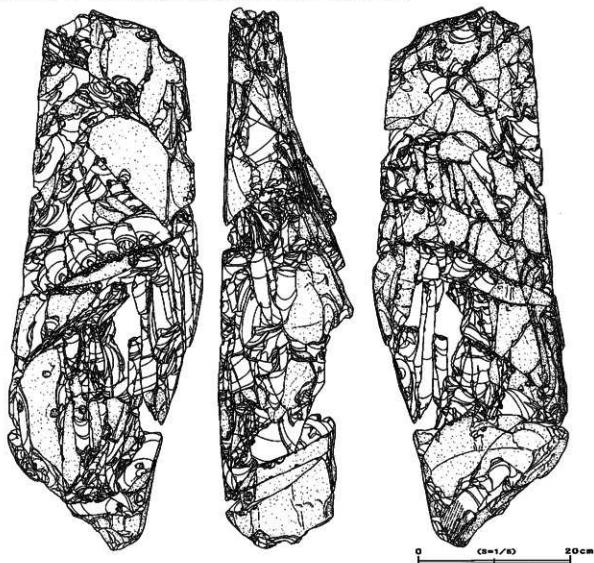
整理の概要

今年度は11遺跡の二次整理を行った。それぞれ報告書刊行順に作業が異なる。旧白滝8・9、下白滝、中島遺跡は報告書(白滝遺跡群V)を刊行し、上白滝8遺跡の西地区(白滝遺跡群VI)については図版作成作業を行った。服部台2、奥白滝1、白滝3・8・18遺跡(白滝遺跡群VII)は図化・データ整理作業を中心とし、旧白滝5遺跡の高部位については接合作業を行った。

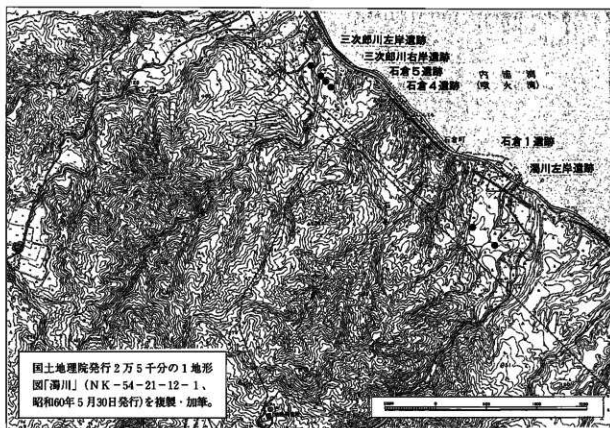
今年度主に作業を行った服部台2遺跡は、学史的に有名な服部台遺跡の東側に小さな沢を挟んで隣接し、1982年に行われた村教委による調査区の南側にあたる。段丘の縁から180m程奥に入った地点にもかかわらず約80万点の石器類が出土した。遺物は尖頭器、有舌尖頭器、幹下・白滝・幌加・紅葉山型細石刃核、大型石刃、大小の舟底形石器、台形石器などが出土し、複数の石器群が確認されている。特に紅葉山型細石刃核を含む石器群は、東隣の奥白滝1遺跡との遺跡間接合が4母岩で確認された。国内でも数例しか類例がなく、遺跡間にまたがる石材消費活動を具体的に検討する貴重な基礎データとして位置付けることができる(2母岩は奥白滝1遺跡の報告書に掲載「白滝遺跡群III」)。ここでは、服部台2遺跡から出土した石刃技法による大型の接合資料とその石器群の概要を説明する。

本接合資料は、先端部が薄くなる長さ72cm、重さ約18.5kgの板状の角礫を素材としている。これほど長大にもかかわらず、石材は分割されずに全体が一連の作業工程の中で消費されている。剥離作業は、上部から斜めに断ち切るように開始され、最初の厚手の剥片が舟底形石器に加工されている。その後、石刃剥離に移行するが、まず大きく短軸方向に剥離が行われ、平坦な打面部が確保される。石刃は素材の小口面側で長軸方向に剥離され、途中、作業面側からの打面再生が3回行われている。この内、先の打面作出剥片も含めて大きな盤状の剥片3個体が舟底形石器に加工されている。石刃は頭部調整のみ施された平坦打面から剥離されるため比較的幅広である。石核下部では石刃剥離に伴い、端部を尖らせるように交互剥離が行われ、石核形状が整えられる。最終的に作業面長が約20cmまで消費され、遺跡内に石刃核が遺棄されている。また、終盤の石刃部分が大きく欠落していることから、舟底形石器4個体中の3個体とともに多量の石刃が遺跡外に搬出された可能性が高い。

このような角礫を素材とし大型の石刃を剥離する接合資料は、遺跡内で数多く確認されており、本遺跡の主要な石器群のひとつである。また、伴出する舟底形石器は厚手の剥片を素材とする大型のもので、明らかに精巧な小型の舟底形石器の一群とは異なる。さらに一部が細石刃核として利用されている例があることから、本石器群は幌加型細石刃核と関連をもつ可能性が高い。



服部台2遺跡出土大型石刃接合資料



▲三次郎川左岸・三次郎川右岸・石倉5・石倉4・石倉1・濁川左岸遺跡位置図

三次郎川左岸遺跡 (B-15-38)

事業名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）埋蔵文化財発掘調査

委託者：日本道路公団北海道支社

所在地：茅部郡森町字石倉610-24ほか

調査面積：65㎡

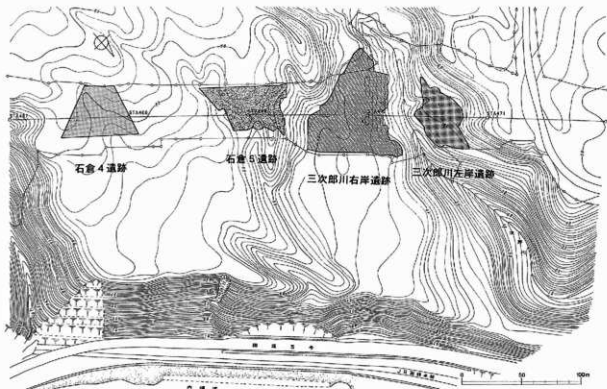
発掘期間：平成16年10月13日～10月27日

調査員：工藤研治、鎌田 望、新家水奈

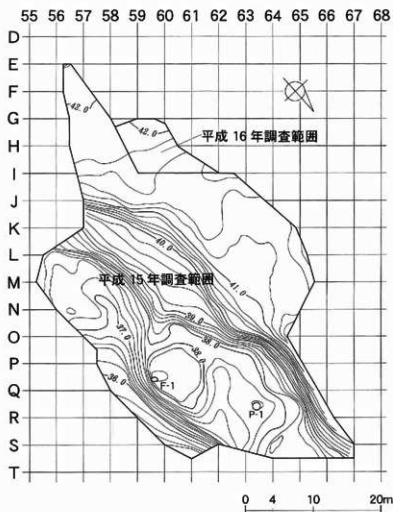
遺跡の概要

平成15年度から継続して調査を行っている縄文時代後期初頭を主体とする遺跡である。森市街地から11.5km北西、八雲町との町境より1kmほど南側の三次郎川沿いにある。遺跡はその両側にあり、「左岸遺跡」「右岸遺跡」と三次郎川で区分けしている。今年度の調査地点は三次郎川の河口より直線距離で400m遡った地点の標高42～43mにある。工事用道路切り替えのため平成15年度は海側の1,420㎡の調査を行い、平成16年度は山側の280㎡の調査を行う予定であった。今年度その一部を調査した結果、遺構は検出されず遺物も僅かな出土であり、さらに山側には遺物の分布が広がらなかったため65㎡の調査で終了した。基本層序は後述する石倉5遺跡と同じである。

平成15・16年度の調査で、縄文時代後期初頭の土坑1基、焼土1ヵ所を検出した。遺物は縄文時代前期後半の円筒土器下層式、縄文時代後期初頭の天祐寺式、続縄文時代の恵山式、後北C2-D式土器、石鎌、スクレイパー、Uフレイク、フレイク、石斧、たたき石、扁平打製石器、石皿、メノウ原石、礫など2,028点が出土した。



遺跡の位置と周辺の地形



三次郎川左岸遺跡 遺構位置図

三次郎川右岸遺跡 (B-15-37)

事業名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）埋蔵文化財発掘調査

委託者：日本道路公団北海道支社

所在地：茅部郡森町字石倉町610-80ほか

調査面積：1,850㎡

発掘期間：平成16年5月6日～7月28日

調査員：熊谷仁志、末光正卓、大泰司 統

遺跡の概要

遺跡は森市街地の北西方向11kmに位置する。三次郎川の右岸、河口から直線距離で約0.4km遡った地点、標高38～45mの河岸段丘上に立地する。対岸には三次郎川左岸遺跡がある。平成15年度から引き続きの調査である。

基本土層は、昨年と同様である。Ⅰ層：表土、Ⅱ層：駒ヶ岳火山灰d層(Ko-d)、Ⅲ層：黒褐色土、Ⅳ層：白頭山-苫小牧火山灰(B-Tm)、Ⅴ層：黒色土層、Ⅵ層：新移層、Ⅶ層：駒ヶ岳火山灰g層(Ko-g)、Ⅷ層：濁川火砕流堆積物の水成二次堆積層である。Ⅳ層のB-Tmは部分的である。Ⅶ・Ⅷ層間には僅かながら明褐色の腐植土がみられたが、遺物包含層は基本的にⅤ層およびⅥ層である。Ⅴ層からの遺物出土量が多い。

遺構と遺物

遺跡は縄文時代中期から後期を主体とする集落跡である。今回確認された遺構は竪穴住居7軒、大型の配石遺構が1基、土坑22基、焼土1ヵ所などである。

特徴的な遺構は大型の配石S-2である。調査区内においては、扇形の「弧」の形状の並びが検出された。線の列は調査区外北東側へ続くものとみられる。昨年度の調査区においては検出されなかった。時期は構築面と推定される層位から出土した土器群から縄文時代後期前葉と推測する。

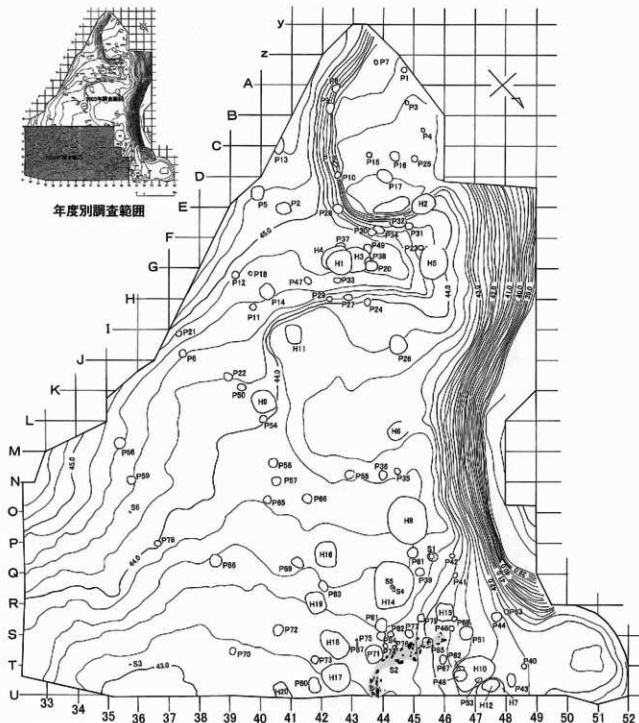
竪穴住居は中期のもの(H-14・15・16・19・20)と、後期前葉の掘り込みが浅く石組炉を持つもの(H-17・18)がある。中期のものには、中期前半の大型で4本の主柱穴を持つもの(H-14)、中期中葉の焼失家屋(H-19)、小型でベンチ構造を持つもの(H-20)が特徴的である。昨年度、H-14の南西脇から、同形態のH-8が検出された。2軒一組の可能性もある。また、H-14の覆土中位からは石組炉が2基(S-4・5)検出された。大型住居が埋没する途中の凹みを利用したものと考えられる。

土坑はフラスコ状土坑が特徴的である。P-67・72・73・77・79・81・84・85がそれに相当する。ただしそのうちには、昨年度検出されたS-1の様に上部に配石を伴うものはなかった。他に特徴的な土坑として倒立した埋甕を持つP-75、大型の土器破片を埋納したP-76がある。これらはS-2の南側に位置し、出土した土器から後期前葉のものと考えられる。これらの縄文時代の遺構は段丘縁に沿って分布しており、そのまま調査区外北東側にも延びるものとみられる。また、Ⅴ層の上位から掘り込まれている土坑(P-65・66・69)がある。深さは浅いが、B-Tmが落ち込んでいる。後述する、統縄文土器の出土場所と遺構の立地が符合するので、統縄文時代の遺構の可能性もある。

遺物は包含層から約25,000点、遺構から約5,000点、合わせて30,000点強の遺物が出土した。そのうち土器が25,000点を占める。そして、その9割近くが縄文時代後期前葉の土器破片である。遺物の平面的な分布は段丘の縁辺に近づくにつれて濃くなる。ただし、統縄文時代の土器は台地の平坦部、N-R-36～43付近に集中する。これは昨年度の統縄文土器の分布傾向と合致する。他に、擦文土器が1個体まとまって出土した。石器は石鏃と台石が多い。石製品では凝灰岩でできた三脚石器の出土がある。秋田県鷹巣町伊勢堂岱遺跡などに特徴的な縄文時代後期前葉の石製品である。

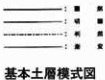


年度別調査範圍



遺構位置圖

I 層	地盤土 火山灰層	※地盤土層 (遺構層上?) K = 中層下(?)火山灰層
II 層	上位	※遺構層 (遺構層上?)
	中位	※遺構層 (遺構層上?)
	下位	※遺構層 (遺構層上?)
III 層	※地盤土層	
IV 2 層		※遺構層 (遺構層上?)
	IV 1 層	※遺構層 (遺構層上?)
V 層	Va層	※地盤土層 (遺構層上?)
	Vb層	※遺構層
VI 層	VIa層	※遺構層
	VIb層	※遺構層
VII 層	※地盤土層	
VIII 層	※遺構層	



基本土層模式圖



調査状況（南から）



配石遺構S-2（南から）



H-17石組炉 (南から)



P-76遺物出土状況 (北から)



P-75埋甕 (東から)



H-19炭化材出土状況 (南から)

石倉5遺跡 (B-15-36)

事業名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）埋蔵文化財発掘調査

委託者：日本道路公団北海道支社

所在地：茅部郡森町字石倉512ほか

調査面積：1,070㎡

発掘期間：平成16年5月6日～6月30日

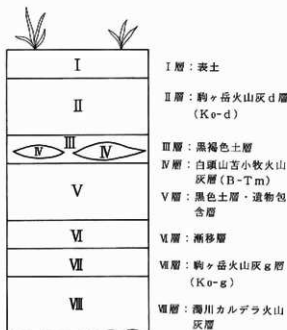
調査員：工藤研治、鎌田 望、新家水奈

遺跡の概要

平成15年度から継続調査している遺跡である。縄文時代前期後半を主体とする。森市街地より11km北西、八雲町との町境より1.5km南側の三次郎川右岸の山地から海岸に迫る標高40～60mの高位段丘上に位置する。工事用道路の工事のため平成15年度は山側部分962㎡を調査した。平成16年度は海側部分1,070㎡の調査を行った。調査範囲は沢地形を横断しており、沢の最深部では比高差4m、幅20m以上となる。遺跡の北西側は三次郎川に向かって傾斜しており、この下の段丘には三次郎川右岸遺跡がある。また、南東側の同じ高位段丘上には石倉4遺跡がある。

基本層序は表土をⅠ層、駒ヶ岳火山灰d層 (Ko-d) をⅡ層、黒褐色土層をⅢ層、Ⅲ層中に挟まる白頭山-苫小牧火山灰層 (B-Tm) をⅣ層、黒色土層をⅤ層 (Ⅴa層とⅤb層に分層)、漸移層をⅥ層、駒ヶ岳火山灰g層 (Ko-g) をⅦ層、濁川カルデラ (Ng) 起源降下火山灰の風化再堆積層をⅧ層とした。

遺構はⅤ層から掘り込まれた土坑2基を検出した。尾根部分で検出したP-1の坑底部からは扁平に打ち割った安山岩の礫 (55cm×46cm×12cm) が出土した。遺物は、縄文時代前期後半の円筒土器下層式、後期前葉の鳥崎式、続縄文時代の恵山式土器、スクレイパー、Rフレイク、石核、フレイク、石斧、北海道式石冠、たたき石、扁平打製石器、石鋸、台石、有孔礫、礫など744点が出土した。



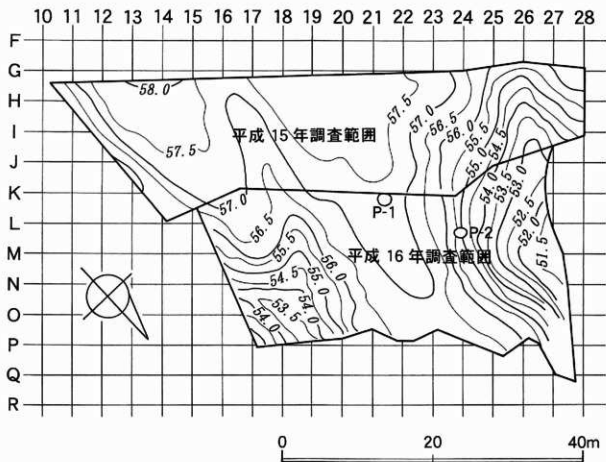
基本土層模式図



包含層調査



P-1



石倉5遺跡 遺構位置図

出土層位別遺物一覧

層位	分類	土器				土器計	石器			計
		Ⅱ b	Ⅳ a	Ⅴ b	Ⅵ		剥片石器	礫石器	石器計	
遺構								26	26	26
包含層		274	6	1	34	315	108	272	380	695
風倒木・攪乱 表採・排土・不明		4				4	10	3	13	6
合計		278	6	1	34	319	118	301	419	6



P-2



調査区完掘

石倉4遺跡 (B-15-34)

事業名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）埋蔵文化財発掘調査

委託者：日本道路公団北海道支社

所在地：茅部郡森町字石倉511ほか

調査面積：1,852㎡

発掘期間：平成16年5月6日～6月30日

調査員：工藤研治、鎌田 望、新家水奈

遺跡の概要

森市街地から八雲町に向かって約10km、山地から海岸に迫る標高40～60mの高位段丘上に位置する縄文時代中期を主体とする遺跡である。調査範囲は工事用道路により分断されており、まず道路の海側部分から調査に着手した。道路切り替えの後、道路より山側部分の調査を行った。

基本層序は表土をⅠ層、駒ヶ岳火山灰d層（Ko-d）をⅡ層、黒褐色土層をⅢ層、Ⅲ層中に挟まる白頭山-苦小牧火山灰層（B-Tm）をⅣ層、黒色土層をⅤ層（Ⅴa層とⅤb層に分層）、漸移層をⅥ層、駒ヶ岳火山灰g層（Ko-g）をⅦ層、濁川カルデラ（Ng）起源降下火山灰の風化再堆積（ローム）層をⅧ層とした。

遺構はⅤ層で焼土1ヵ所を検出した。遺物は縄文時代前期後半の円筒土器下層式、中期前半の円筒土器上層式、中期後半の大安B式土器、石鏃、つまみ付きナイフ、スクレイパー、Rフレイク、フレイク、石斧、たたき石、扁平打製石器、石鏃、メノウ原石、礫など1,830点が出土した。

包含層出土層位別遺物一覧

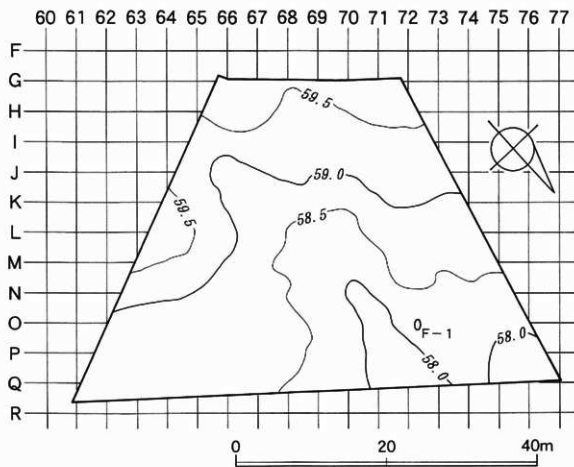
分類 層位	土器			土器計	石器										石器計	合計		
	Ⅱb	Ⅲa	Ⅲb-2		石鏃	つまみ付きナイフ	スクレイパー	Rフレイク	フレイク	石斧	たたき石	扁平打製石器	石鏃	原石			礫	
Ⅲ					1											25	26	26
Ⅴa	29	1	117	147			1		1							144	146	293
Ⅴb	7	33	12	52	3	1	2	1	19	3		2	1	2	1348	1382	1434	
Ⅵ	3	1		4	1				2						15	18	22	
Ⅶ						1									2	3	3	
風倒木 攪乱 表探 不明								1	1		1				33	36	36	
B調査			2	2											14	14	16	
合計	39	35	131	205	5	2	3	2	23	3	1	2	1	2	1581	1625	1830	



調査区遠景



石鏃出土状況



石倉4遺跡 遺構位置図



包含層調査



調査区完掘

石倉1遺跡 (B-15-29)

事業名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）埋蔵文化財発掘調査

委託者：日本道路公団北海道支社

所在地：茅部郡森町字石倉395ほか

調査面積：700㎡

発掘期間：平成16年7月5日～10月27日

調査員：工藤研治、鎌田 望、新家水奈

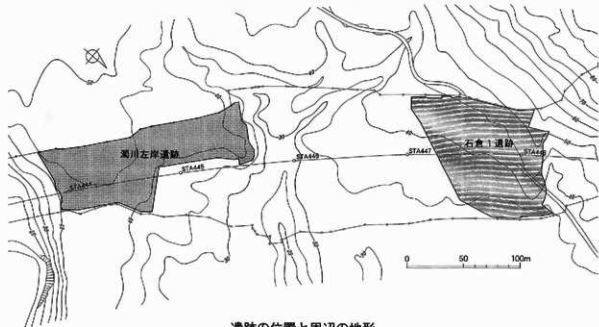
遺跡の概要

平成14年度から継続調査している縄文時代後期初頭～前葉を主体とする遺跡である。森市街地から北西に約9km、海岸から約700m内陸の濁川河岸段丘上に立地する。今年度の調査地点は過年度の調査範囲より山側の高位段丘上、標高37～42mである。約200m南東の濁川側には、無名沢を挟んで濁川左岸遺跡がある。

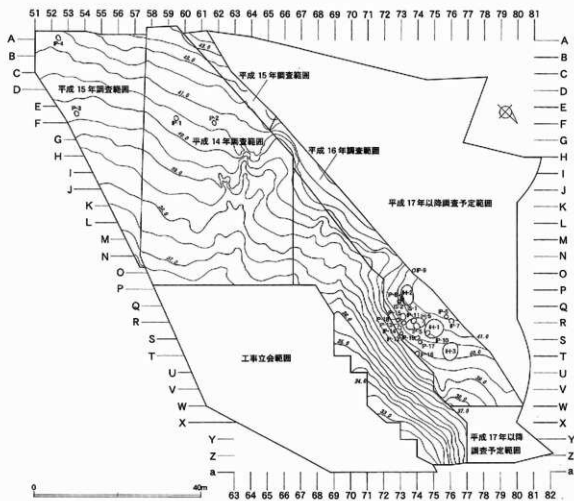
基本土層は表土がⅠ層、駒ヶ岳火山灰d層（Ko-d）がⅡ層、黒褐色土層がⅢ層、黒色土層がⅣ層、その下に駒ヶ岳火山灰g層（Ko-g）を挟み、漸移層である黄褐色土層がⅤ層、濁川火砕流堆積物の水成二次堆積物層である黄褐色ローム層がⅥ層となっている。Ⅲ層とⅣ層の間には部分的に白頭山～苦小牧火山灰（B-Tm）が見られる。Ⅴ層上面には駒ヶ岳火山灰（Ko-g）層に由来する橙褐色砂質土を含む。遺物包含層はⅢ・Ⅳ・Ⅴ層である。

平成16年度の調査では、住居跡4軒、土坑15基、焼土1カ所、集石3カ所を検出した。住居跡は縄文時代後期初頭～前葉のものである。15基の土坑のうち1基はフラスコ状ピットを転用した縄文時代後期前葉の墓である。遺物は縄文時代中期後半の円筒土器上層式、後期初頭～前葉の天祐寺式、涌元式、鳥崎式土器、石鏃、石錐、石槍、つまみ付きナイフ、スクレイパー、Uフレイク、Rフレイク、石核、フレイク、石斧、北海道式石冠、すり石、たたき石、扁平打製石器、砥石、台石、石皿、メノウ原石、礫、石製品など36,847点が出土した。

なお、平成15年度に表土を除去し、Ⅲ層が露出した状態で計画変更により調査未了となっていた部分は、ブルーシートで覆い、調査終了部分との段差を土嚢で補強した後、土を被せて養生した。



遺跡の位置と周辺の地形



遺構位置図



調査区完掘



集石検出状況



IH-1



IP-5

濁川左岸遺跡 (B-15-22)

事業名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）埋蔵文化財発掘調査

委託者：日本道路公団北海道支社

所在地：茅部郡森町字石倉401ほか

調査面積：3,660㎡

発掘期間：平成16年7月1日～10月27日

調査員：工藤研治 村田 大・柳瀬由佳・影浦 覚（C地区担当）

鎌田 望・新家水奈（D・E地区担当）

遺跡の概要

遺跡は、森町市街地から北西へ約9km、濁川カルデラより流れ出る濁川の河岸段丘上にある。海岸から約700m内陸に位置し、調査区南東側に濁川が、北西側に無名の沢が流れている。濁川に面する段丘をC地区、中央付近の沢地形をD地区、無名の沢に面する段丘をE地区と呼称した。C地区は標高42～45m、E地区は標高36～41mである。なお、D地区は過年度の調査結果から、遺構確認調査区とした。

今年度調査区に隣接する北東側は、平成13・14年度の2ヵ年で4,930㎡が調査され、住居跡や土壌墓など多くの遺構と約198,000点の遺物が出土した。調査報告書『森町 濁川左岸遺跡-B地区-』（北理調報190）、『森町 濁川左岸遺跡-A地区-』（北理調報208）が刊行されている。

基本土層は、I層：表土、II層：駒ヶ岳火山灰d層（Ko-d、1640年降灰）、III層：黒褐色土、IV層：黒色土、V層：黄褐色土（駒ヶ岳火山灰g層：Ko-g、約6,000年前降灰含む）、VI層である。III層とIV層の間に白頭山～苫小牧火山灰（B-Tm、10世紀前半降灰）が部分的に確認できる。VI層は中央付近の沢地形をはさみ段丘の成因が異なる。C地区は人頭大の円礫を多数含む水成の二次堆積層で黄褐色砂礫層、E地区は濁川火砕流堆積物層で黄褐色ローム層である。遺物包含層はIII層～V層で、遺物の大半はIV層から出土した。

遺構と遺物

遺跡の主な時期は縄文時代後期前葉で、C地区では中期前半の遺構も確認されている。

C地区からは住居跡、土壌、石組炉、焼土、柱穴様の小土壌、配石遺構、剥片集中が検出された。住居跡は石組の炉を持つ後期初頭のものが3軒ある。土壌は濁川に面する斜面部から多く検出された。埋め戻しの覆土で、平面形が円形で人頭大の礫が多く出土するものや、楕円形を呈し土器や礫石器を出土するものがあり、土壌墓の可能性もある。南西側の平坦面では、続縄文時代の後北B式土器が焼土を伴い、まとまって出土した。

E地区からは住居跡、土壌、石組炉、焼土、柱穴様の小土壌が検出された。住居跡は石組炉を伴う後期初頭のものが2軒ある。土壌はフラスコ状ピットや土壌墓と見られるものがある。

出土した遺物は、約113,000点で、土器等約101,000点、石器等12,000点である。土器は縄文時代後期前葉の涌元式・鳥崎式・白坂3式等が大半を占め、C地区では中期前半の円筒上層式がE地区では前期後半の円筒下層式が多く見られる。石器は扁平打製石器や北海道式石冠などの礫石器が多い。

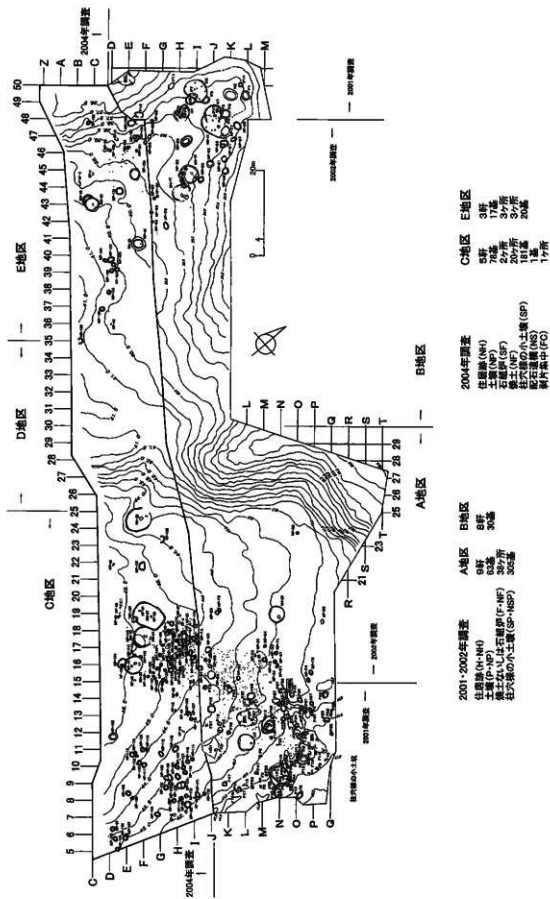
遺構数一覧

記号	遺構種別	C地区	E地区	計
NH	壁穴住居跡	5	3	8
NP	土 壌	78	17	95
SF	石 組 炉	2	3	5
NF	焼 土	20	30	50
SP	柱穴様の小土壌	181	20	201
NS	配石遺構	1		1
FC	剥片集中	1		1

遺物集計（仮）

*不明・表探等を除く

	検出層	C地区	D地区	E地区	合計
土器等	縄文前期	689	364	5477	4511
	縄文中期	6154	39	699	5892
	縄文後期	68664	1648	29477	100789
	土 壌 墓	89			89
	土 壌 品	24			24
石器等	計	68756	2048	38053	101457
	石 器	956	18	283	1257
	フリート等	4588	170	2705	7463
	石 器 品	4	8	9	16
	石 器 墓	2741	20	332	2699
	計	7898	214	3330	11442
	合 計	78664	2267	10683	112894



遺構位置図



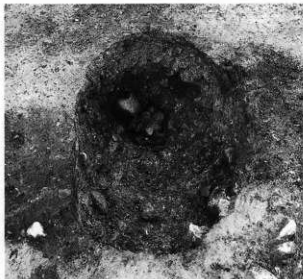
NH-27 (縄文時代中期中葉)



NH-22 (縄文時代後期前葉)



NP-106 (縄文時代中期中葉)



NP-138 (縄文時代中期中葉)



NP-112 (縄文時代後期前葉)



NP-170 (縄文時代後期前葉)



NP-127 (縄文時代後期前葉)



続縄文時代後北B式土器出土状況

うおひ

上台2遺跡 (B-15-31)

事業名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）埋蔵文化財発掘調査

委託者：日本道路公団北海道支社

所在地：茅部郡森町字上台町326-1、326-5

調査面積：4,140㎡

発掘期間：平成16年5月6日～9月10日

調査員：熊谷仁志、袖岡淳子、坂本尚史

遺跡の概要

上台2遺跡は、森町市街地から南側に約2km、尾根状地形東側の緩斜面に立地する。現在の海岸線からは直線で約2.5kmの距離がある。標高は95～105m程である。

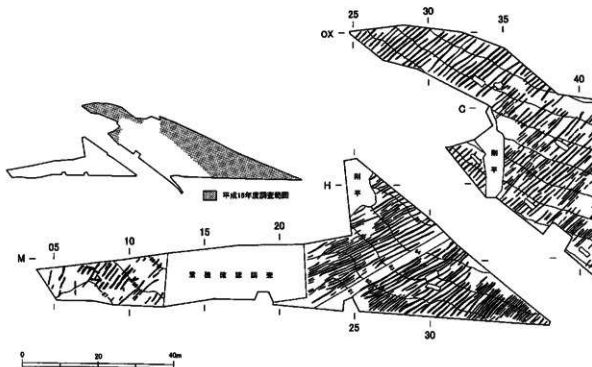
基本層序はⅠ層：表土、Ⅱ層：駒ヶ岳火山灰d層 (Ko-d、1640年降灰)、Ⅲ層：黒色土、Ⅳ層：白頭山-苫小牧火山灰 (B-Tm、10世紀後半降灰)、Ⅴa層：黒色土、Ⅴb層：黒褐色土、Ⅴc層：暗褐色土、Ⅴ層：駒ヶ岳火山灰g層 (Ko-g、約6000年前降灰)、Ⅵ層：灰褐色土、Ⅶ層：暗灰黄褐色土、Ⅷ層：濁川火砕流である。

遺構と遺物

遺構は、17世紀前半に構築されたとみられる畑跡を検出した。畑跡の範囲は昨年度調査部分も含め、延べ9,000㎡以上に及ぶ。

畑跡は、Ko-d直下の厚さ1～2cmの黒色土を除去した段階で確認された。地形の傾斜方向に沿った溝状の耕作部が、およそ1m間隔で連続していた。明瞭な畝立ての痕跡は認められないが、溝状耕作部が浅く窪み帯状の凹凸を形成していた。溝状耕作部の覆土は主に、上部が炭化物を多量に含む黒色土、下部がB-Tmのブロックが混じる黒褐色土であった。

遺物はⅤ層から縄文時代前期～後期の土器・石器・礫545点が出土したほか、畑跡構築面より鉄製の刀子が1点出土した。

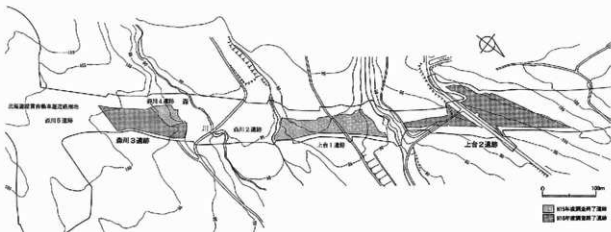




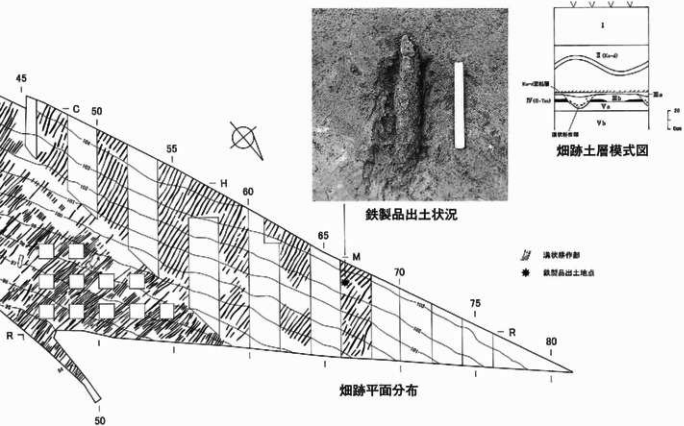
遺跡位置図



燧跡検出状況



周辺の地形と遺跡



燧跡平面分布

森川3遺跡 (B-16-26)

事業名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）埋蔵文化財発掘調査

委託者：日本道路公団北海道支社

所在地：茅部郡森町字森川317-1ほか

調査面積：2,780㎡

発掘期間：平成16年5月6日～平成16年10月29日

調査員：熊谷仁志、谷島由貴、袖岡洋子、末光正卓、坂本尚史

遺跡の概要

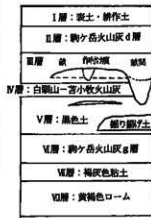
遺跡は森町市街地南側、海岸線から約2.5km内陸の標高95～98mに位置し、内浦湾に注ぎ込む森川の右岸の河岸段丘上に立地する。調査は北海道縦貫自動車道建設工事に伴い平成14年から継続され、これまで2,260㎡の調査を実施している。

基本層序は、I層：表土・耕作土、II層：駒ヶ岳火山灰d層 (Ko-d)、III層：黒褐色土、IV層：白頭山-苫小牧火山灰 (B-Tm)、V層：黒色土、VI層：駒ヶ岳火山灰g層 (Ko-g)、VII層：褐灰色粘土 (漸移層)、VIII層：黄褐色ローム、その下位は濁川火砕流堆積物である。V層上位に灰褐色の起源不明の火山灰が部分的に確認されている。これまでの調査で住居跡5軒、土坑43基、縄文・統縄文時代の焼土8ヵ所・小ピット等を検出した。遺物は約4万点出土し、前期末葉～後期・統縄文時代・近世のもので、土器の主体は、縄文時代前期の円筒土器下層d式・統縄文時代の恵山式である。近世の畑跡はIII層中から、統縄文はV層上部から、縄文時代の遺構・遺物はV層中から検出・出土した。

遺構と遺物

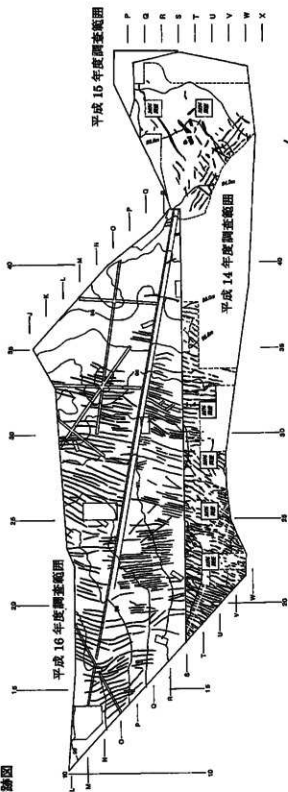
遺構は、近世の畑跡、住居跡11軒、土坑43基、Tピット：1基、焼土：10ヵ所、小ピット等が検出された。畑跡は調査区ほぼ全面から検出され、III層中からIV層のB-Tm層を切って、幅1m程の畝立てが行われ、畝間は幅20～30cm、畝の中央部には作付け痕が認められる。住居跡は長軸8～13m、短軸6～11mと大形で、周辺に幅5～8m、厚さ30～80cmの掘り揚げ土をもつもの (H-6・7・10) や長軸3～4mほどの小形のものがある。大形住居跡は4～8本の主柱穴をもち、壁際には土留めの杭列がめぐり、覆土には厚いローム質土の堆積が認められ、その堆積状況から土葺きの屋根を持つと考えられるものもある。H-10の覆土から円筒土器上層式の遺物が多量に出土している。小形の住居跡は前期末葉～中期前葉で、掘り揚げ土の下位からも確認されている。壁際に溝がめぐり、出入口が想定できるものもある。土坑にはフラスコ状、皿状等がある。焼土は統縄文時代の恵山式に伴うものが多く、多量の獣骨・魚骨を含み、柱穴を伴うものもある。

遺物は、縄文時代前期～晩期・統縄文時代・近世のものがコンテナ350箱出土した。主体は前期末葉の円筒土器下層d式と統縄文時代の恵山式で、円筒土器下層d式は遺構が集中した段丘縁辺部から、恵山式はH-7・10の窪み及びその周辺のV層上面から出土した。円筒土器下層d式は掘り揚げ土の上下から出土し、このほか円筒土器下層a式、円筒土器上層a式・榎林式・煉瓦台式、後期の大津式・手稲式等もある。石器は円筒式土器に特徴的な北海道石冠・すり石が多く、恵山式の無蓋石鏝・靴型石器等も出土、石製品には青龍刀形石器・玉等がある。また、畑跡との関連が窺える畑管等の鉄製品も出土している。

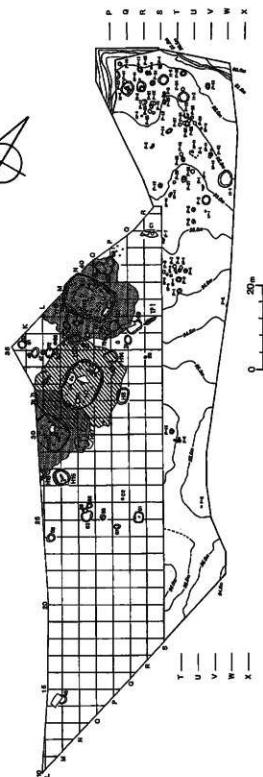


基本層序模式図

Ⅲ層 畑跡図



遺構位置図



畑跡及びV層遺構位置図



Ⅱ層 (Kc-d層) 除去および畑跡の検出 (南から)



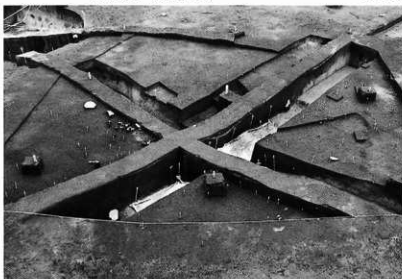
畑跡断面 (南西から)



畑跡断面 (南西から)



V層上面の遺物 (恵山式) (南から)



F-16柱穴確認調査着手前の状況 (南西から)



F-16・柱穴P-1 (北西から)



H-6・H-10掘り上げ土の検出(北から)



H-6床面の調査(西から)



H-7完掘



H-6掘り上げ土断面(南から)



H-15完掘(西から)



H-7土層断面(北から)

柏木川4遺跡 (A-04-21)

事業名：柏木川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

委託者：北海道札幌土木現業所

所在地：恵庭市柏木町610、612ほか

調査面積：8,128㎡

発掘期間：平成16年5月8日～9月3日

整理期間：平成16年8月2日～平成17年3月31日

調査員：立田 理、吉田裕史洋、立川トマス

遺跡の概要

遺跡は、恵庭市街地から北西に約2km、柏木川右岸、標高約40mの河岸段丘上に位置している。柏木川を挟んで対岸には縄文文化期、縄文時代晩期の土壌墓が検出され、柏木川式土器の標識資料が出土した柏木川1遺跡が位置している。柏木川4遺跡は今年度が初めての調査となる。

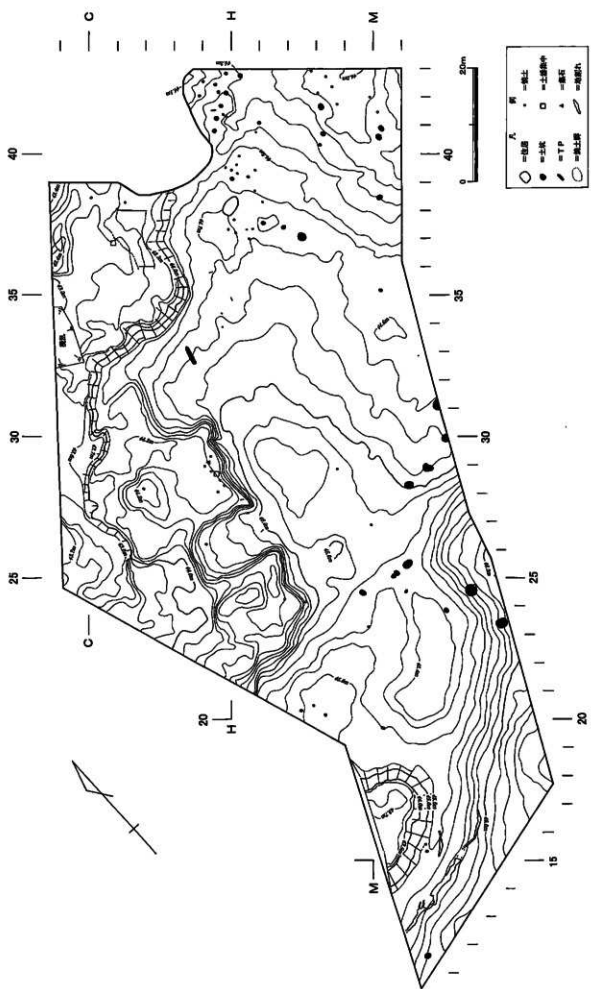
調査区は柏木川に向かう緩斜面および旧河道、河岸段丘の平坦面からなっており、緩斜面は包含層が良好に残存しているが、平坦面はほぼV層としたローム層まで耕作による攪乱を受けている。そのほか柏木川に向かって張り出す舌状の微高地が1ヶ所あり、その頂部には縄文文化期の住居と見られる明瞭なくほみが2ヶ所確認できる。この微高地は来年度以降の調査区域である。

遺構と遺物

遺構は住居跡1軒、土坑78基、焼土19ヶ所である。遺物の総点数は7,180点である。土器は縄文時代晩期のものが多く、縄文時代中期、前期、後期のものが若干出土している。石器は石鏃、スクレイパー、北海道式石冠などが出土している。



調査区遠景



遺構位置図



土器集中1 (北から)



土坑群確認作業 (南西から)



KP-24遺物出土状況



集石1検出状況



KP-19完掘

柏木川13遺跡 (A-04-107)

事業名：柏木川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

委託者：北海道札幌土木現業所

所在地：恵庭市北柏木町1丁目256

調査面積：132㎡

発掘期間：平成16年5月18日～6月10日

整理期間：平成16年8月2日～17年3月31日

調査員：立田 理

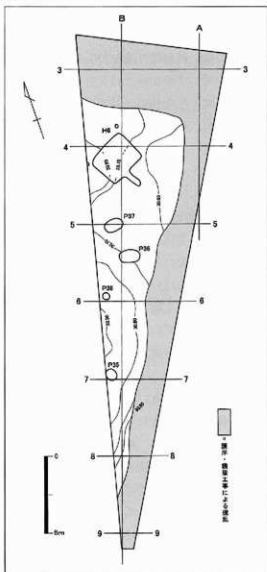
遺跡の概要

遺跡は、JR千歳線恵み野駅の西方1.5km、柏木川左岸、標高約30mの低位河岸段丘上に位置する。柏木川13遺跡は1987年、2002年度から今年度にかけて恵庭市教育委員会によって4次にわたって調査が行われ、当財団の調査は昨年度から始まり今回で2度目になる。今年度の調査区は昨年度の南側、1987年に調査が行われた北柏橋の南側隣接地に当たる。

調査区は護岸工事と耕作による攪乱をうけ、包含層の残存状況は極めて悪い。だが遺構は狭い面積にもかかわらず濃い密度で検出されており、付近一帯は隣接する恵庭市教育委員会の調査区に続く柏木川13遺跡の中心の一角をなしているものと考えられる。

遺構と遺物

遺構は擦文文化期の住居跡が1軒、縄文時代の土坑4基である。遺物の総点数は228点、土器は148点出土し、縄文時代晩期、中期のものが多い。石器等は80点出土し、内容は定形的なたたき石や黒曜石製のスクレイパーなどのほか、フレイク49点、礫15点がある。



遺構位置図



調査状況 (北から)



H6 炭化材検出状況

西島松3遺跡 (A-04-36)・西島松5遺跡 (A-04-38)

事業名：柏木川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

委託者：北海道札幌土木現業所

所在地：恵庭市西島松537-6~12、531-12、544-3ほか

調査面積：西島松3遺跡975㎡、西島松5遺跡3,892㎡

発掘期間：平成16年5月8日~10月31日

整理期間：平成16年4月1日~平成17年3月31日

調査員：佐藤和雄、土肥研晶、吉田裕史洋、立川トマス

遺跡の概要

西島松3・5遺跡は、恵庭市の西方、JR恵み野駅から北西約800mに位置する。遺跡は、東を柏木川、西を柏木川の支流であるキトウシユメンナイ川に挟まれた標高約25mの沖積低地上に立地する。今年度は遺跡調査の5ヵ年目にあたる。3遺跡と5遺跡の境は遺構の内容から東西方向の50ラインで分けるものとし、遺構番号もその北側は平成11年度からの連番、南側は新たに1番から付した。

調査区は全般に削平をうけるが、もともとの土地の境界線である38ラインより南側は平らに造成され、堅穴住居などの浅い遺構はほとんど無くなっている。

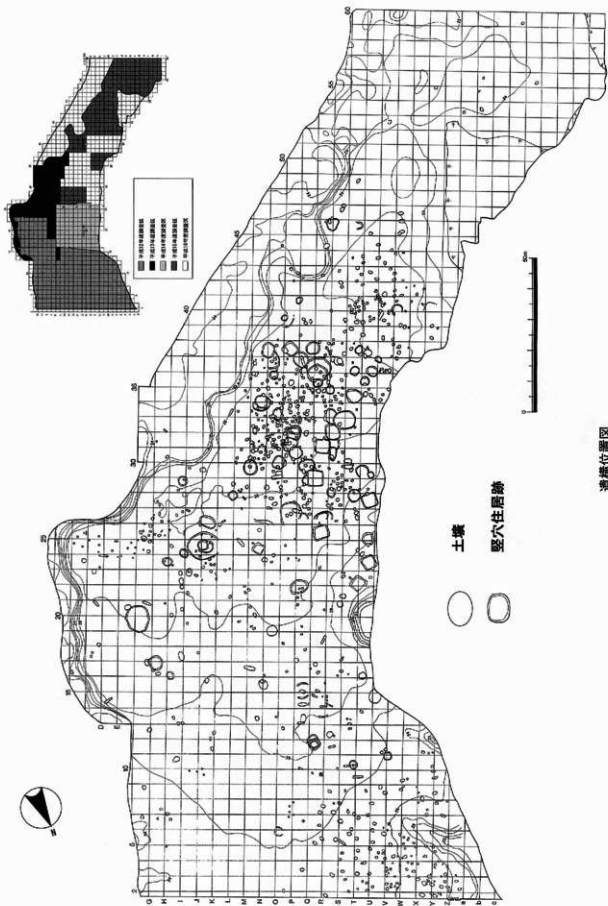
基本土層は、Ⅰ層：表土・耕作土、Ⅱ層：黒色土、Ⅲ層：漸移層、Ⅳ層：黄褐色土（支笏軽石流の2次堆積）となっている。調査区内には部分的に榊前a降下軽石層がⅡ層上に残存していた。また遺物包含層であるⅡ層は縄文後期~晩期初頭の盛土遺構を境にⅡA層、ⅡB層に分けた。

遺構と遺物

今年度は、昨年度に調査未了のまま残した、縄文時代後期後葉から晩期前葉のものと考えられる土坑墓と、新たに検出された土坑、あわせて200基、Tピット1基、焼土28ヵ所、柱穴284基を調査した。また、過年度から続く、縄文時代後期後葉の盛土遺構の続きも確認、これを調査した。なお、平成13年度までに調査した盛土遺構については『西島松5遺跡(3)北埋調報209』で今年度報告する。土抗の調査では、昨年の調査で周堤墓内部の墓塚の可能性がある墓を検出したが、今年度は、堂林式土器を副葬する墓群が見つかり、周堤墓の存在をあらためて確信するに至った。後期後葉の墓は、標高の高い場所にある周堤墓から低い西側に分布していくようである。副葬品では、小型の一括セットの土器、焼成前から底部に穿孔を施した小型の鉢、石棒、石斧、玉、垂飾類、サメの歯、などが出土し、漆製品では筒、腕輪、玉類のほか、腰紐が初めて検出された。段丘縁の包含層からは、アルトリ式並行の縄文時代早期や縄文時代晩期後葉の捨て場が検出された。



遺跡位地図



土坑
竖穴土坑

遗址位置图



遺跡遠景（北東から）



P 439遺物出土状況（東から）



P 443遺物出土状況（北東から）



包含層調査状況（縄文時代早期）

生測2遺跡 (C-09-25)

事業名：太櫓川広域基幹改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

委託者：北海道函館土木現業所

所在地：瀬棚郡北檜山町字共和554、555

調査面積：1,800㎡

発掘期間：平成16年5月6日～平成16年7月9日

調査員：遠藤香澄、芝田直人

遺跡の概要

生測2遺跡は、北檜山市街地から南南西へ約4km離れた共和地区にあり、太櫓川の河口より約600m 遡った左岸に位置する。標高2～3mほどの沖積低地上に立地する。地形は、北から南へ緩やかに傾斜している。地盤はほとんどが河川堆積による砂利または砂層で、一部に粘土層も見られる。

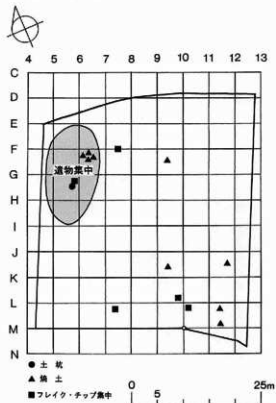
遺構と遺物

遺構は、遺物集中1ヵ所、土坑1基、焼土9ヵ所、フレイク・チップ集中5ヵ所が検出された。遺物集中は10m×20mほどの範囲に多量の土器、石器、炭化クルミ、骨片などが集積したものである。

土器は約6,500点が出土した。下層出土のものは、口縁部に爪形文を多段に施しており、縄文時代晩期前葉の上ノ国式に相当する。上層出土のものは、大きさ、器形ともに変化に富み、深鉢、鉢、浅鉢、台付き鉢、壺などがある。口縁部や頸部に数条の平行沈線を巡らせ、その間に連続する刺突文を施している。赤彩された精製土器の破片も出土し、その雲形文の特徴から同晩期中葉の大洞C1式に並行すると思われる。石器等は約3,500点が出土し、スクレイパーや石筥に玄武岩を素材とするものが多い。また、アイヌ文化期の刀が、駒ヶ岳d火山灰（1640年降下）直下より出土した。



遺跡位置図



遺構位置図



遺跡遠景（南西から）



遺物集中（H-5調査区）

柴野1遺跡(1-18-29)・新野上2遺跡(1-18-10)

事業名:社名瀬瀬戸瀬(停)線(B7-10)局改工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者:北海道網走土木現業所

所在地:柴野1遺跡-紋別郡遠軽町柴野402

新柴野2遺跡-紋別郡遠軽町柴野169-3

調査面積:柴野1遺跡600㎡、新野上2遺跡2,140㎡

発掘期間:平成16年7月2日～9月30日

調査員:高橋和樹、鈴木宏行、直江康雄

遺跡の概要

遺跡のある遠軽町は北海道の北東部、オホーツク海沿岸に広がる比較的平坦な地形の内奥部に位置している。町の中央には南西から北東に湧別川が流れ、上湧別・湧別町を経て約20kmでオホーツク海に到達する。黒曜石の原産地である白滝村から流れる湧別川には黒曜石が多量に含まれている。町内には旧石器～縄文時代までの遺跡が確認され、また、松浦武四郎の『由宇辺津日誌』には、柴野のエウケチャシツの記載があり、湧別川の中流域に所在するチャシ跡として重視される。

柴野1遺跡は遠軽市街の南西7km、瀬戸瀬地区の北東に位置し、湧別川と佐藤川の合流点付近、湧別川の左岸段丘上に立地する。標高は128m前後で湧別川との比高は約15mである。調査区は段丘の先端縁部にあたる。基本土層はI層:表土・耕作土、II層:黒色粘質土(遺物包含層)、III層:黒色土、IV層:黄褐色粘質土、V層:明黄褐色粘質土、VI層:礫層である。遺物包含層であるII層は大部分が耕作により攪乱を受け、ほとんど残存していなかった。なお、昭和53年に分布調査が行われており、縄文時代初頭とみられる土器片1点と石鏃などを含む大量の石器類が出土している。

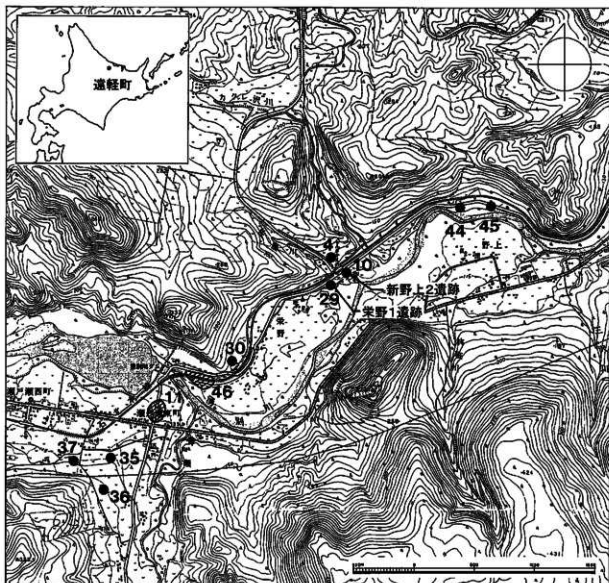
新野上2遺跡は柴野1遺跡の佐藤川を挟んだ東側の河岸段丘上に立地し、標高は127～130mである。調査区は段丘の縁から20m程内側で、段丘面を横断する約200mの細長い形状である。基本土層は柴野1遺跡とはほぼ同様である。中央部以西・東端部の畑地部分は耕作による攪乱を受け、遺物包含層は残存せず、中央から東側には厚い現代の盛土の下に部分的に遺物包含層(II層)が残存していたが、柴野会館などの建物や井戸、隣接する発電所の送水管など現代の様々な攪乱が認められた。

遺構と遺物

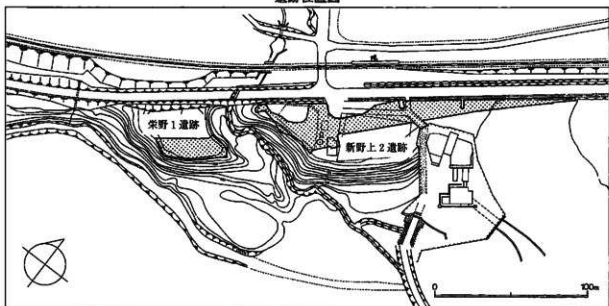
柴野1遺跡ではフレイク集中(Fc)が1ヵ所検出されている。遺物の総点数は56,052点で、土器が199点、石器が56,052点と石器の量が圧倒的に多い。土器は縄文時代前半期である宇津内II b式の小型の鉢がほぼ完形で出土し、その他の破片も概ねその時期に比定される。石器はほとんど全てが黒曜石で凹基の石鏃・石槍・スクレイパー・作業面が平坦で打面が周囲を巡る石核・打面と作業面を入れ替えるチョッパー状の交互剥離が行われる石核などが出土している。

新野上2遺跡では土壌15基、フレイク集中(Fc)4ヵ所が検出されている。土壌は性格・時期不明なものが多いが、縄文時代前半期の墓が1基(P-3)確認された。P-3は調査区の西端部、佐藤川に面した段丘の縁に位置し、墳底から5cm程度が残存していた。平基や凹基の石鏃が52点出土し、ほかにスクレイパーが混じる。遺物の総数は219,670点で、土器が1,033点、石器が219,670点と柴野1遺跡同様石器の量が圧倒的に多い。土器は縄文時代前半期の宇津内II a式を主体として宇津内II b式が続き、縄文時代中期の北筒式が少量混じる。石器は柴野1遺跡と同様であるが、他に平坦打面の石核・細長い形状の石槍・石斧などが出土し、特に前二者は縄文時代中期のものと考えられる。

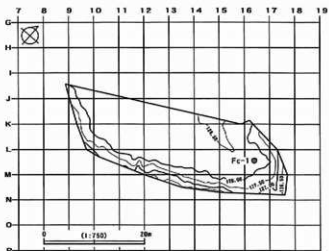
両遺跡ともに土器と石器の絶対量とその量比、黒曜石の転搬を素材とした多くの石核や加工途中の石器の存在から石器製作を主要な目的として営まれた遺跡と想定される。



遺跡位置図



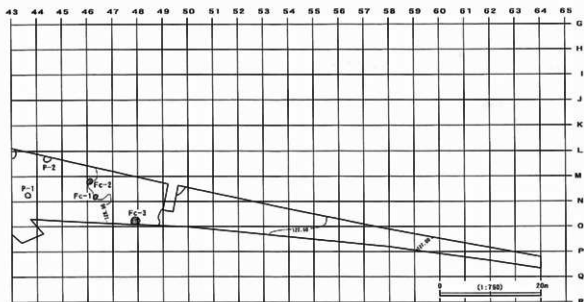
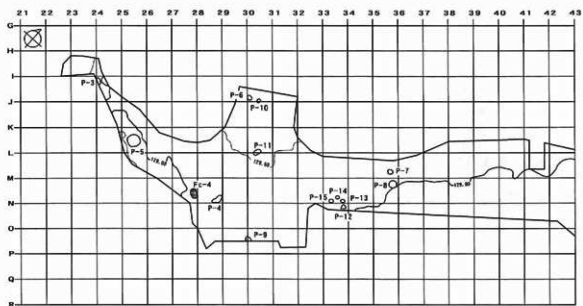
栄野1・新野上2 調査区域図



栄野 1 遺構位置図



栄野 1 出土土器 (1/3)



新野上 2 遺構位置図



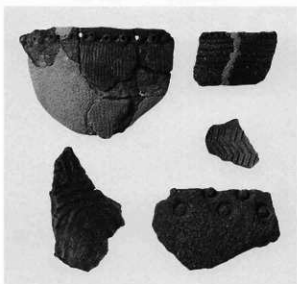
新野上2 調査状況



新野上2 P-3 検出状況



新野上2 P-3 遺物出土状況



新野上2 出土土器 (1/3)



新野上2 出土石器 (1/2)

3 現地研修会の記録

9月9日(木)、10日(金)に、森町森川3遺跡を主会場にして研修会を行った。今回は、研修テーマを「特殊構造をもつ住居跡」とし、当埋蔵文化財センターが調査中の遺跡のみならず、森町教育委員会、南茅部町教育委員会が調査中の遺跡なども見学した。さらに森町の鷺ノ木5遺跡、南茅部町内の遺跡についての講演も依頼した。研修前日に北海道を通過した台風18号による強風被害のため、いくつかのトラブルも生じたが、研修会は計画した内容に近い範囲で実施できた。

研修会での講師としての荻野幸男、阿部千春、遺跡の案内者としての藤田登、小林貢、輪島慎二、坪井睦美の諸氏には、記して感謝の念をあらわしておきます。

ここに研修会の概要を記しておく。

9日(木)、森町内の遺跡巡検。

埋蔵文化財センターが調査中の遺跡：石倉1遺跡、濁川左岸遺跡

森町教育委員会が調査中の遺跡：鷺ノ木5遺跡、森川5遺跡

森川3遺跡での現地研修。縄文時代前期(円筒下層d式の時期)の大型住居。

講演会：「森町 鷺ノ木5遺跡」講師 森町教育委員会 荻野幸男氏

「南茅部町 垣ノ島遺跡とハマナスノ遺跡」講師 南茅部町教育委員会 阿部千春氏

10日(金)、南茅部町内の遺跡巡検。

大船遺跡、大船遺跡埋蔵文化財展示館。垣ノ島遺跡。白尻小学校遺跡。

上磯町館野遺跡の見学。



森川3遺跡にて

4 設立25周年記念事業の記録

11月20日（土）、札幌市コンベンションセンター（白石区東札幌6条1丁目）で財団法人北海道埋蔵文化財センターの設立25周年記念の講演会・シンポジウムをおこなった。テーマは「アイヌ文化の源流を探る—擦文文化・オホーツク文化研究の最前線—」である。案内ポスターのキャッチ・コピーは「時に耳を澄ませ 古代の扉がひらかれる」である。この公開行事は、参加者が400名を越す盛況であった。あわせて記念誌「遺跡が語る北海道の歴史」も刊行した。

ここに講演会・シンポジウムの次第と当日配布の発表資料（74～107ページ）を再録しておく。講演会・シンポジウムの講師、報告者の皆様に心からお礼を申し上げます。

第1部（10：00～12：00）

テーマ公演「鉄と毛皮」

講師：鈴木 信「続縄文・擦文文化の鉄製品」

種市幸生「オホーツク文化の毛皮」

事例報告

報告者：石井淳平「恵庭市西島松5遺跡」

田中哲郎「千歳市ウサクマイN遺跡」

皆川洋一「奥尻町青苗砂丘遺跡」

米村 衛「網走市モヨロ貝塚」

第2部（13：00～15：45）

基調講演：菊池俊彦「交易からみた北方古代史—古代人が欲しかったものは？—」

トーク：菊池俊彦、大澤宏一

ディスカッション：鈴木 信、種市幸生、石井淳平、田中哲郎、皆川洋一、米村 衛、

菊池俊彦、大澤宏一（司会）越田賢一郎



シンポジウムの様子

「第一部 縄縄文化～擦文文化の鉄製品と鉄生産」

鈴木 信

1 北海道における鉄製品・鋼の必需性と交易

自製できない鉄素材・製品 北海道の「縄縄文化」の後半と「擦文文化」は生活用具が鉄器化した狩猟採集文化である。多量に自製しない鉄製品・鋼は外部との物資交換で獲得される。生活用具の鉄器化が進行し、鉄製利器が象徴的財から実用的財へ価値を変化させたことによって、北海道と東北部における物資交換方式に大きな変化が生じた。

増大し続ける必需性 2世紀前葉～4世紀中葉は鉄製利器を象徴的財とし、石器に利器機能を負わせる時期である。4世紀後葉～5世紀前葉は鉄製利器が象徴的財でもあり実用的財でもある時期である。この時期以降に搔器・削器を除いて石器が廃用される。石材ごとの交換関係（内陸・山奥との関係）を放棄し、鉄製利器の交換関係（河川を通じ海を越える）を強化する。5世紀中葉～8世紀も同様の傾向である。9世紀には定型的石器は消滅して鉄製利器は実用的財としての性格がより濃くなる。

表1 道央部の主な石器の消長

	狩猟具			加工具			
	石槍・石鋸	石鏃	ナイフ状石器	石錐	搔器・削器	楔形石器	石斧
～1世紀後葉	●	●	●	●	●	●	●
2世紀前葉～4世紀中葉		●	●	●	●	●	●
4世紀後葉～5世紀前葉					●	●	
5世紀中葉～7世紀後葉					●	●	
8世紀前葉～9世紀前葉					●	●	
9世紀中葉以降						●	

表2 鉄製品の組成変遷

	狩猟具		加工具					土工・農具		その他		鉄片・器種不明	
	鉄鏃	マレック	刀子	やりがんな	鎌・針	板状鉄斧	袋状鉄斧	鉄鏃	鉄先	大刀・横刀	搔子		紡錘車
～前6世紀後葉													●
前5世紀前葉～前1世紀前葉	●		●										●
前1世紀中葉～1世紀後葉			●										●
2世紀前葉～後葉			●			●							
3世紀前葉～4世紀後葉			●	●		●							●
4世紀後葉～5世紀前葉			●	●		●	●						●
5世紀中葉～後葉			●	●		●	●						●
6世紀前葉～後葉	●		●	●	●		●	●		●	●		●
7世紀前葉～後葉	●		●	●	●		●	●		●	●		●
8世紀前葉～9世紀前葉	●		●	●	●		●	●		●	●		●
9世紀中葉以降	●	●	●	●	●		●	●		●	●	●	●

*網掛けは存在が予想されることを示す。

2 北海道・東北部地域における鉄製品・鋼の生産

製品を作るが、素材は移入する。

縄文文化の鉄生産（図1） 9世紀代～10世紀半ばには鉄製マレックの鉤先・鋸頭があるので製品製作・加工は行われている。小鍛冶遺構（鍛錬＝鋼から素材や製品作り・再生・修繕を行う）が上川盆地を含む石狩低地帯以西に、精錬遺構（＝鉄鉄を精製して鋼を作る。この場合の精錬とは、型型炉が検出されず、鉄鉄片の存在と化学的的成分分析から導かれた結果である。なお、鉄鉄片は小規模鋼生産の原料として再利用されたと考えられる）が余市町大川・札幌市サクシュコトニ川・旭川市錦町5・千歳市オサツ2・千歳市末広遺跡などで検出される。小鍛冶遺構と精錬遺構はともに北海道の西半分に分布する。

10世紀後半以降は、小鍛冶遺構が全域で検出される。精錬遺構は旭川市旭町1遺跡（札幌前遺跡・青苗遺跡は精錬の可能性あり）で確認されるが、鋼生産は低調である。

縄文文化の鉄生産は東北部に較べるとかなり低調である。小鍛冶遺構は微増し続けるが精錬遺構は増えない。基本的には鉄製品・鋼の生産を拡大させず、交易によって外部から入手した。

大陸系の鉄生産技術

オホーツク文化の鉄生産（図1） 7世紀代には香深井A遺跡に鉄滓？があり、9世紀代以降には砂鉄系鉄鉄の精錬・小鍛冶がある（天野 1985）。土器を転用した断熱壁、曲り手刀子・刃部が壘状の板状鉄斧が出土するので、樺太・大陸の技術・製品がもたらされた可能性がある。

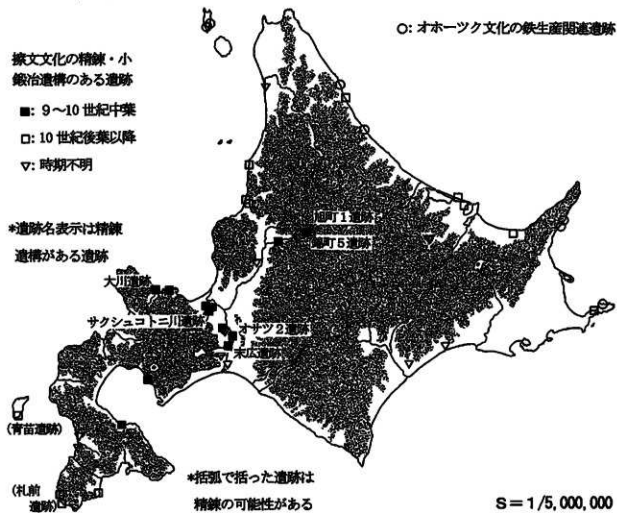


図1 北海道の精錬・小鍛冶遺構のある遺跡

北海道向け
の製品と鋼

蝦夷支配領域における鉄生産(図4・6~9) 8世紀前半(図7)には、一貫した鉄生産が東北地方中南部で成立する。東北地方北部(辺郡・蝦夷支配領域)に精錬遺構がないので郡制地域からの技術流出はない。ただし、青森県を除く蝦夷支配領域において蝦夷は鉄器製造を行っている(「延暦6(787)年正月21日官符」『類聚三代格 卷13』)。

9世紀代~10世紀前葉(図8)には蝦夷支配領域の全域で小鍛冶遺構が検出される。精錬遺構は急増して三陸中部・米代川下流域・秋田城周辺に集中がみられる。これらの地域では9世紀に精錬から始まる鉄生産が成立する。米代川下流域は、三陸中部に較べて製鉄遺跡の数が多いため日本海側の東北地方北部に供給する以外に、北海道に向けても鋼・製品を移出していたと考えてよい。三陸中部は太平洋側東北地方北部に供給していた。

10世紀後葉以降(図9)にも辺郡・蝦夷支配領域で小鍛冶遺構が検出される。精錬遺構は米代川流域と津軽平野に集中がみられる。米代川流域に加えて津軽平野にも集中し、北海道への鋼・製品供給は前代より活発になる。東北地方では製錬(=原料から含鉄金属を分離して鉄鉄を作る)遺構が検出されないの他地域で製錬された鉄鉄を移入し、鋼を精製して製品が作られていたと考えられる。東北地方の鉄生産は他地域の鉄鉄を使った精錬へと変化する。三陸中部・米代川下流域では、鉄鉄の入手先は辺郡である可能性が高く、次に他地域が考えられる。津軽平野の鉄鉄入手先は不詳であるが、三陸中部・米代川下流域と同様に辺郡や他地域が考えられる。

3 交易方式と経路の変遷—東北北部における北海道系土器・墓制から

7世紀中葉~8世紀にかけての渡嶋蝦狄は鉄製品・鋼・鉄素材の何れも知っている。その一方で考古学的資料においては、鉄加工と鉄生産の技術がないことが確認できる。9世紀には小鍛冶遺構が、10世紀中葉以降精錬遺構が認められるが少数である。基本的にかれらは鉄製品・鋼の生産を拡大することは行わず、鉄製品・鋼・鉄素材を地方官衙における朝貢的交易、陸奥蝦夷・出羽蝦狄・辺郡百姓との私交易を通じて入手した。

経路状を示す土器分布

鉄製品・鋼・鉄素材の集積する市、鉄製品・鋼・鉄素材を生産する鍛冶のある集落にやってきた痕跡が北海道系土器・墓制の分布であり、その分布は経路状を示している。

定住型交換

2世紀前葉以前は3世紀前葉~4世紀中葉のような経路状分布は(下北・上北・津軽・新潟東半部)見られない。3世紀前葉~4世紀中葉は、鉄製品の集積する地点を結んだ経路において恒常的な定住型交換を登場させた。しかし、鉄製品の集積が不安定であったため経路が長くなったと考えられる(図2)。

北海道の埋葬方法が東北にある。

4世紀後葉~5世紀後葉は経路状分布の短縮がみられることから、鉄製品の安定・恒常的確保が可能となった(図3・4)。6世紀前葉~7世紀中葉は、北海道と東北北部の墓制の融合(袋状土坑が付帯する土坑墓)がみられ混交の度合いが増す。前代までのように定住型交換の維持に腐心しない関係ができつつあった(図5)。

海路を通じて倭王権と交易する。

7世紀後葉は、北海道の墓制が見られない。一層の融合が進んで北海道縄文人は在地化した。土器分布は短縮したままの経路状を示す一方で、倭王権と海路を通じて貢納的交易を知ったことが文献からうかがえる(図6)。

朝貢して交易する。

8世紀代に土器分布が経路状でないのは新たな交通網に替わる事を示す(図7)。渡嶋蝦狄・肅慎は、陸奥蝦夷・出羽蝦狄とは交易を継続する一方で、律令政権と地方官衙を介した朝貢的交易を持ち、辺郡百姓と私交易を始めた。これにより前代までのような同族意識が前提となる交換が変質した。9世紀以降、長距離の経路を想定させる土器分布は消

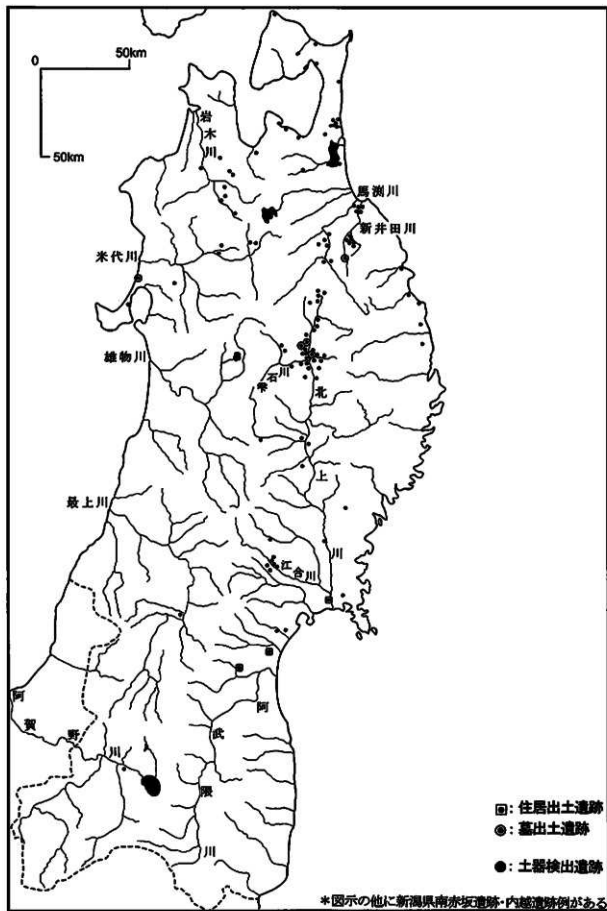


図2 4世紀中葉の北海道系土器の分布

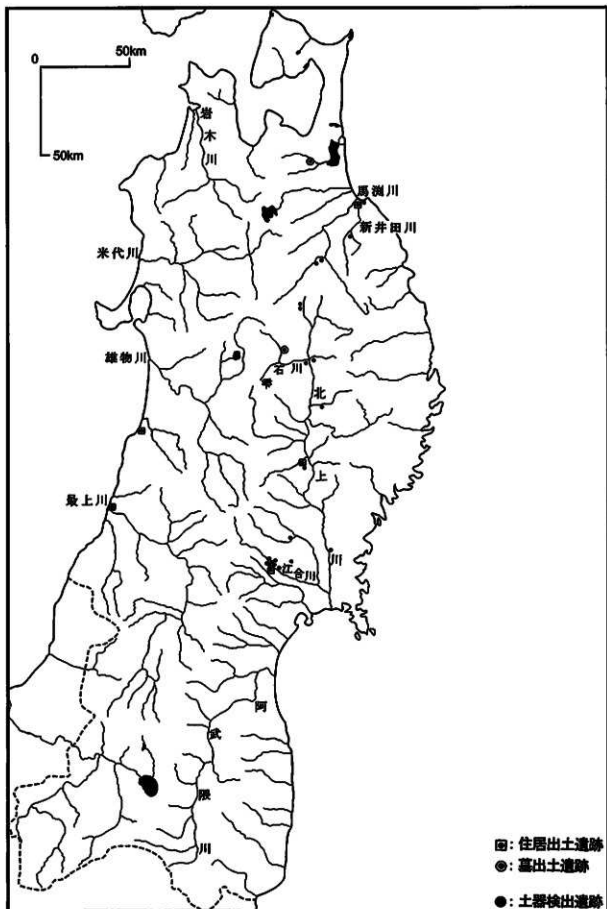


図3 4世紀後半～5世紀後半の北海道系土器の分布

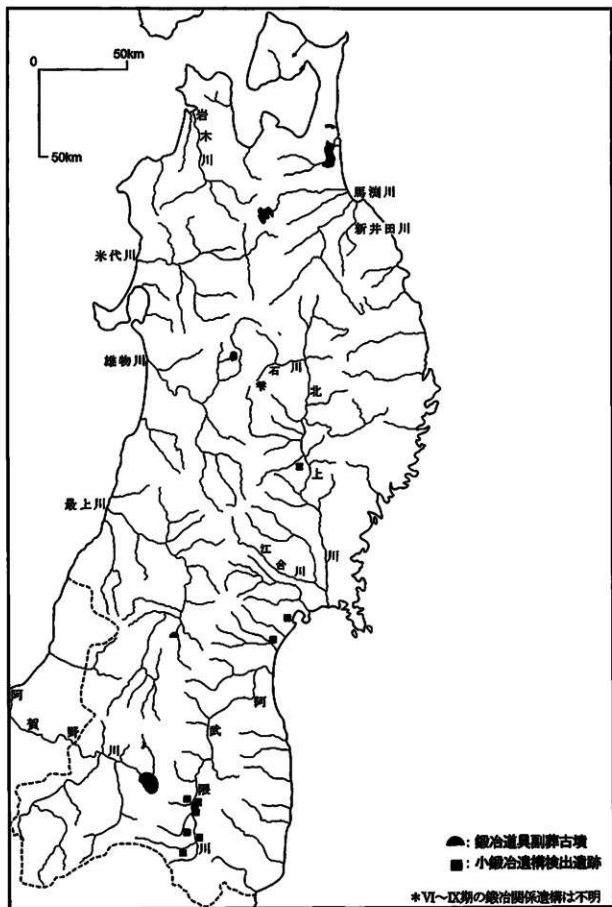


図4 5世紀前葉～5世紀後葉の鍛冶関連遺跡

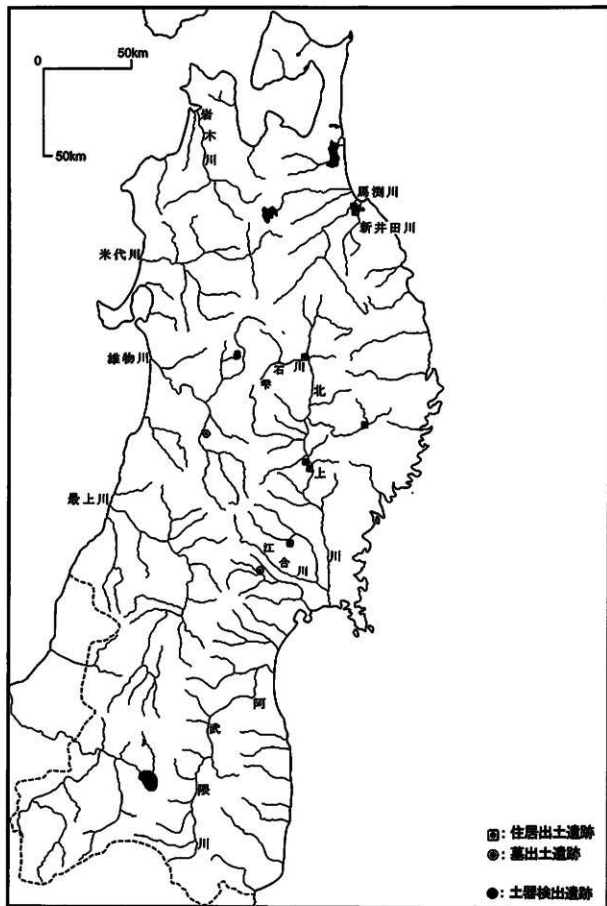


図5 6世紀前半～7世紀前半の北海道系土器の分布

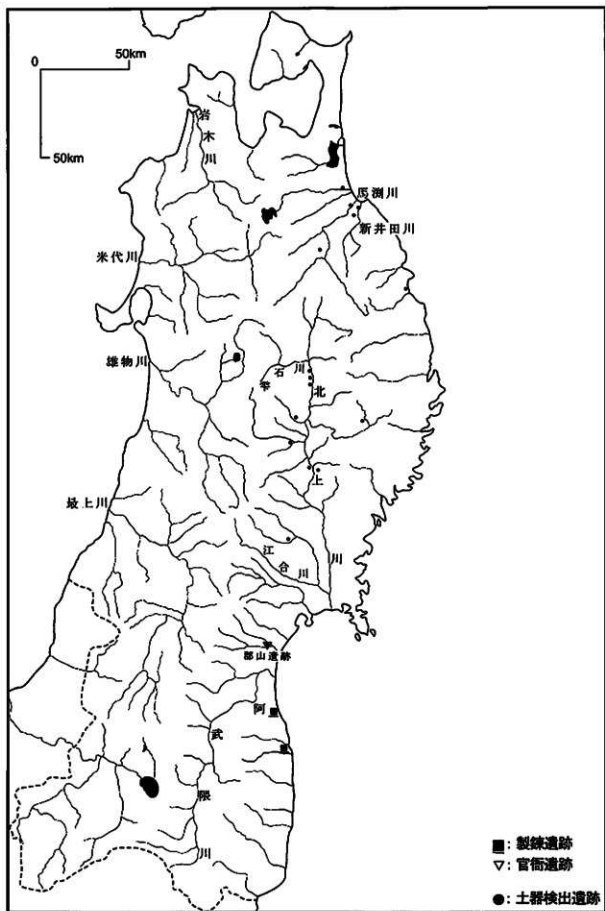


図6 7世紀中葉～後葉の北海道系土器と製鉄遺跡の分布

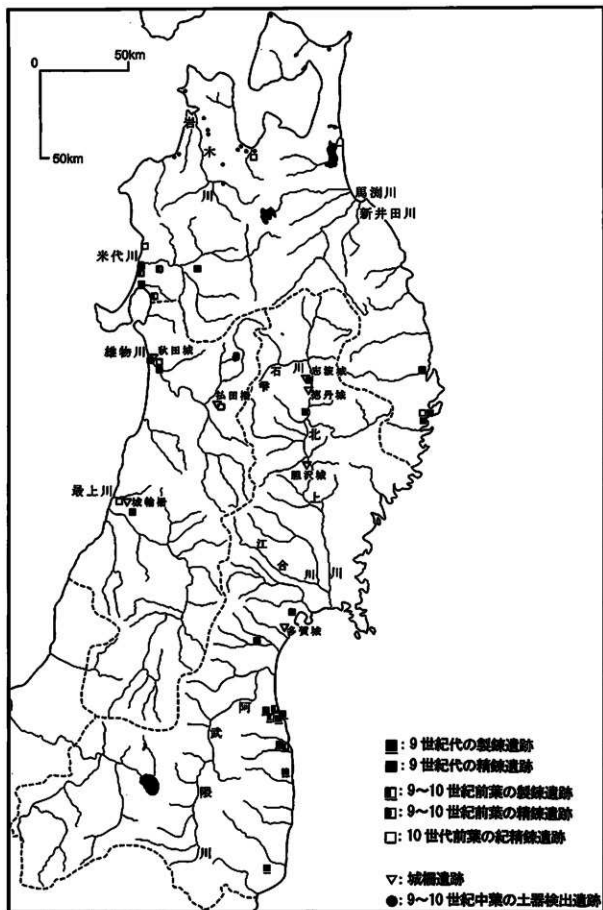


図8 9世紀～10世紀前葉の北海道系土器と製鉄遺跡の分布

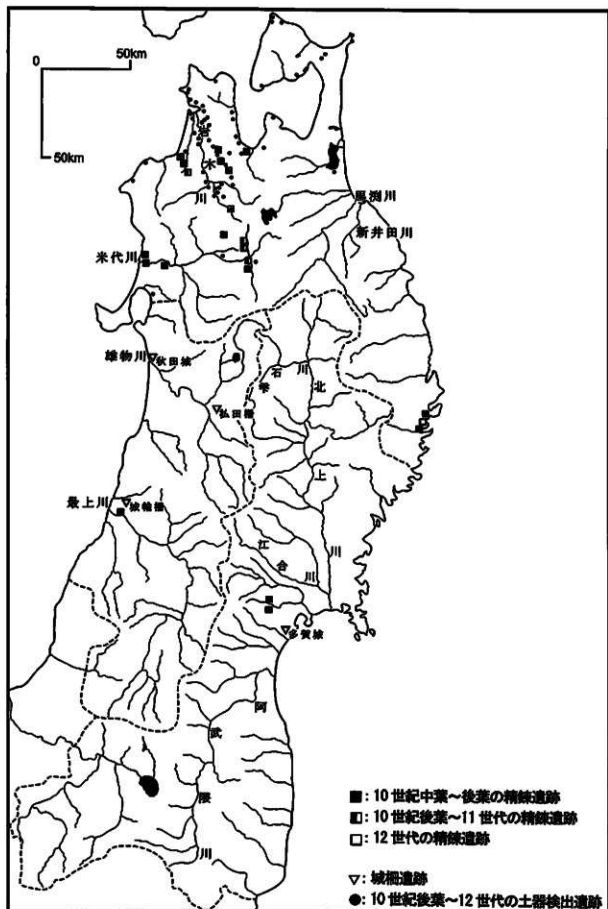


図9 10世紀中葉～12世紀前葉の北海道系土器と製鉄遺跡の分布

	<p>減する。これは、海路による交通が主となったことを示す(図8)。</p>
滞留型交易	<p>9世紀中葉以降は北海道と米代川以北の土器に独自の技法がみられ、土器属性要素の組合はない。客体的な出土量であることから短い期間滞留して交易していた(図8・9)。</p>
	<p>4 交易システム</p> <p>7世紀後葉～9世紀前葉における定住型交換から滞留型交易への過渡期には前段階にもまして生活用具の鉄器化が顕著となる。この背景にあるのが、律令政権の交易に対する考え方(饗給・朝貢の交易は最重要政務)であり、渡嶋蝦狄にとっての考え方(減權・官衙に行けば必ず交易できる)である。</p>
交易のため に関係を保 つ撰文人	<p>渡嶋蝦狄にとって、中央官衙は非接触的存在であり律令政務は無縁な体制である。体制自体を受容するか否かは交易の結果に直接反映されない。従来と異なるのは「知り合いでない交易相手」の登場である。要するに、交易の都合上容認するが、背後にある仕組み(権力)までは受容(被支配)する必要はない。</p>
	<p>一方、律令政権側も渡嶋蝦狄が心底から「化を慕って」いないことを認識している(『類聚国史』延暦11(792)年1月条、『三代実録』貞観17(875)年11月条、『三代実録』元慶2(878)年9月条)。「化」とはあくまで政務上の原理、つまり律令機関の渡嶋蝦狄に対する認識であって、渡嶋蝦狄にとっての律令機関の存在意義は交易であり、その原理は「利」である。この「利」とは資本主義にいう生産過程で生み出される剰余価値の転化した形態＝利潤を意味しない。「ウチ」の同族意識に基づく互酬的関係の維持のために、「ソト」を利用して有利な立場を得ることをいう。互いの認識を交錯(誤解的)了解させることによってしか両者の関係は維持できない。また、「知り合いでない交易相手」との関係が進んだことによって、「対面する知り合い」である陸奥蝦夷・出羽蝦狄・辺郡百姓は、渡嶋蝦狄にとって「直に接触するが異質な集団間の関係」に変化した。</p>
ウチとソト	<p>5 交易の品目</p>
東北北部か ら北海道へ	<p><u>移入品目</u> 7世紀後葉には絹布・武器・鉄素材(『日本書紀』斉明6(660)年3月条)、持・粗織りの絹布・鉄斧(『日本書紀』持統10(696)年3月条)がある。8世紀後葉以降は米穀・麴(麴をアイヌ語で「カムタチ」という。「カムタチ」は少なくとも10世紀中葉～12世紀末に和語から借用された。統縄文期にイネの炭化種子の出土例がないことから、縄文文化期以降に借用したと考えられる。また、穀類の高濃度アルコール醸造には欠かせないので米穀と同時に求められたはずである)がある。</p> <p>上記の品目は遺跡からも出土する。鉄製品については(表2)、狩猟・加工具は鉄鎌・刀子・鉄斧が早く、やりがんな・鉄鎌の出現はやや遅れる。象徴的財として大刀・横刀・鑊子がある。縄文文化期に入ると、土農工具である鉄鎌・鉄斧、紡織具として鉄製紡錘車、象徴的財として麻手刀が加わる。布類・衣類については、織物の出土例は4遺跡に過ぎない(松田 猛 1993)。そのうち絹布と推定される遺跡は3遺跡ある。絹布の出土頻度が高いともいえる。また、副葬品の鉄製品を梱包した痕跡として遺存している場合が多い。西島松5遺跡の鉄製品には織りの粗い布と非常に細かい布痕があり、絹布(撚りが掛けられていない細かい布目)が多数付着していた。米穀は縄文文化期の炭化種子が検出された遺跡は34ヶ所あり、そのうちイネが出土したのは7ヶ所。検出量は大川遺跡をのぞくと100粒以下である。出土地点・出土量が少なく、米(穀から初を取り去った状態)の状態でするので、栽培は想定されない。以上よりイネは交易品と考える(吉崎昌一 1994、</p>
布匠産	
移入品とし てのコメ	

北海道から 東北北部へ	<p>山田悟郎 1998)。</p> <p>移出品目 7世紀中葉には熊毛皮(「日本書紀」斉明4(658)年条)があり、「延喜式」に拠れば海獣毛皮(種市氏報告)がある。ほかには陸獣毛皮・昆布・馬が可能性として挙げられる。</p> <p>もうひとつの対価 干鮭が濠洲文化期においてすでに渡海交易の対価であったという仮説がある。</p>
濠洲文化期 に干鮭は対 価であった か	<p>地方律令組織においては鮭は贄・税である。また、鮭を多産する地域に住む出羽蝦夷・陸奥蝦夷にとっても魅力ある渡海交易品といえない。よって渡高蝦夷が干鮭を渡海交易品とした可能性は低い。「延喜式」(927年撰進)によれば干鮭・鮭を交易雑物とする国はない。越後・越中・信濃・加賀・若狭・丹後・丹波・但馬は贄・中男作物として鮭を買す。中央律令政権にとって鮭は贄・税であり交易品ではない。</p> <p>交易品としての北海道産鮭の初出は「庭訓往来」の「四月状返」に「夷鮭」があることから14世紀中葉頃には干鮭の需要は拡大している。鎌倉末期頃以降に東日本の従来の需要に加えて近畿地方の需要に対応するため北海道から直接の供給を必要としたのであろう。</p>
	<p>6 交易対価の生産</p> <p>交易の原資は生業によって生み出される。原資となる資源は季節と地域によって偏在する。かつ、共同体ごとに食料資源の多寡があり、年間にも多寡がある。これら資源の多寡を埋める方法として移住がある。定住の場合は獲得力の増大・保存技術の革新が考えられる。しかし、移住の増大は住コストの増大・他の共同体との関係(石材・鉄製品の需給も含む)が不安定になる。獲得力の増大は労働力の増大と獲得方法の改善によって成されるが、人口の増大・資源の枯渇を引き起こす。このようなことから、共同体間の食料資源保有量を調節する機能(共同体内部の食料資源保有量の調整と運動して財の配分を維持する)として城内交易が必要であり、それを可能にするには定住が必要である。</p>
城内交易	<p>河川鮭鱒漁は季節的(周期的)・活動域狭(鮭湖上河川)・多量・採集的で、雑穀栽培も鮭鱒漁と同じ効果がある。しかし両者はほぼ同じ季節に労働投下のピークがあり両立は不可能である。雑穀栽培が粗放的であるのは鮭鱒漁と毛皮獲得猟の連繋における補助であるからである。雑穀栽培を優位としない理由には、耕作地の維持管理という拘束性のある労働・食物嗜好・コメの移入があったこと等が考えられるが主因の特定に至らない。</p>
鮭鱒漁に支 えられる毛 皮猟	<p>毛皮獲得猟は季節的(周期的)・活動域がやや広く、定住と相反する性質を持つが、季節的・性分業により定住は維持可能となる。</p>
個人分散型 の毛皮猟 団体集約型 の鮭鱒漁	<p>生業維持のための労働は二種類に大別される。個人分散型(個人的技術の差で成果が変動する。成果は個人に還元)は狩猟(弓・仕掛けなど)と漁労(鮎・釣りなど)に顕著であり、団体集約型(個人的技術差よりも技術の共有の規模で成果が変動する。成果は集団に帰属し集団内の個人に分配・再分配)採集と栽培に顕著である。個人分散型は射撃性が高く、団体集約型は射撃性が低い。また、獲得方法からみると労働のかたちは性分業でもある。毛皮獲得猟は個人的財獲得のための男子・個人分散型労働である。</p>
肉は分配し て、毛皮は 分配しない。	<p>毛皮獲得のための狩猟は主として個人的な猟であり毛皮の共同体内への配分はない。鹿猟は主に共同体による猟、鮭鱒漁は共同体(血族・姻族を含む)による漁であり配分がある。また、非毛皮獲得猟のメカジキ漁は、個人的(家族・血族を含む)猟であっても肉は共同体に配分される。毛皮獲得猟であるクマ猟やクマ送りの例においても、その肉は配分しない。</p>

される。これらより配分の可否は、獲得物が肉=食料≠域内交易物資であるか毛皮=渡海交易物資であるかによる。配分のある干鮭・鹿肉=食料は共同体的財の性格を帯びる域内交易物資であり、毛皮は個人的財の性格を帯びる渡海交易物資といえる。

食糧備蓄・交換の安定化は個人的財獲得の基盤となり、鉄製品交換という新しい生業を容易にさせた。その反面、活動域の優先的用途の調整が必要となり、やがて「イオル」が形成されることになる。

<おもな用語の解説>

鋼：炭素量2%未満の鉄合金、加熱鍛打によって製品・素材が作れる原料。

鉄鉄：炭素量2%以上の鉄合金、岩鉄・砂鉄から取り出された不純物の多い鉄で鋼原料か鑄物原料になる。

鉄滓：製錬・精錬・鍛打等で生じた非鉄金属・非金属を50%未満含む滓。製錬滓・精錬滓・鍛打滓などがある。

鑄子：銅・鉄などで作られた毛抜き。

蕨手刀：古代の東日本に多く出土する刃長66cm以下の直刀で、柄頭が早廉に似ることから名付けられた。

東倭：中国古典では東北境外を領域とする民族、日本の史書では北海道に住んだ民族の呼称。渡島蝦夷と異なるひとびと。

倭王権：律令制導入以前の中央政治権力大和政権・大和朝廷の別称。

化：徳(めぐみ)をもって教え導くこと。この場合は、律令制度を受け入れさせて内国化に誘導すること。

饗給：酒食と贈物を与えて懐柔させる服属儀礼。

辺郡：辺境の郡。

中男作物：畿外諸国における健康な17~20才の男子を対象とした租税で、物納。

延喜式：律令に対する施行細則を集大成した古代法典、927年に完成した。

庭調往来：14世紀中葉、社会日常の重用語彙を習得させるために作られた手紙模範文集。

<参考文献>

天野哲也「オホーツク社会のメタル・インダストリーに関する基礎的考察」『北方文化研究 17』(1985)

赤沼英男「出土鉄器の金属的解析からみた東北北部および北海道の鉄生産」『鉄を通して北の文化を考える』岩手県立博物館編(1990)

「いわゆる半地下式整型炉の性格の再検討」『たたら研究 35』(1995)

赤沼英男・福田豊彦「鉄の生産と流通からみた北方世界」『国立歴史民俗博物館研究報告 72』(1997)

今泉隆雄「蝦夷の朝貢と饗給」『東北古代史の研究』吉川弘文館(1986)

佐々木利和「アイヌ文化の歴史と生業」『アジア遊学 17』(2000)

佐々木稔・赤沼英男「鉄器と原料鉄の生産技術の進歩」『鉄と鋼の生産の歴史』雄山閣(2002)

鈴木 信「続縄文～縄文文化期の渡海交易の品目について」『北海道考古 第39輯』(2003)

「古代北日本の交易システム」『アイヌ文化の成立-宇田川洋先生華甲記念論文集』(2004)

関口 明「北海道式古墳と渡島蝦夷」『古代文化 37-7』(1985)

「渡島蝦夷と毛皮交易」『日本古代中世史論考』吉川弘文館(1987)

中村英重「渡島蝦夷の朝貢と交易」『古代の東北』高科書店(1989)

平川 新「北日本の交易と流通 序説」『北日本中世史の研究』吉川弘文館(1990)

山田悟郎「日本列島北端で展開された雑穀農耕の実態」『北海道開拓記念館研究紀要 26』(1998)

吉崎昌一「大川遺跡のコメ」『1993年度大川町遺跡発掘調査概報 V』(1994)

松田 猛「縄文文化の新しい織物資料」『古代文化45-4』(1993)

オホーツク文化の毛皮

北海道教育庁文化課 種市幸生

I、毛皮は現存するのか

オホーツク文化の毛皮は、痕跡として発見される例はきわめて稀です。したがって、毛皮が存在したかどうかは、遺跡から出土する動物遺存体から推論するほかないのです。すなわち、トド、アザラシ、オットセイ、ラッコなどの海獣、クマ、シカ、キツネ、タヌキ、カワウソ、テンなどの陸獣の遺存体の出土と文献に記述された毛皮とをつきあわせることを通じて毛皮の存在を推論するのです。

毛皮の発見例：北千島のホロムシリ島及川遺跡のオホーツク文化期(?)の火災に遭って焼失した第10号竪穴住居からラッコの毛皮を検出。これがいまのところ唯一の例です。

II、オホーツク文化とは

その前に、オホーツク文化とはどのような文化なのかについてお話しします。

いつ：6世紀から12世紀にかけて栄えた文化

どこで：主にサハリン南部から北海道のオホーツク海沿岸・クリール諸島に分布

どんな生活：クジラ猟、海獣猟、沿岸漁労を主な生業とした沿岸適応文化で、それらの生業を補うかたちで陸獣猟、イヌ・ブタの家畜飼育、農耕を営み、精神生活としてクマとクジラなどの動物儀礼を行っていた無文字社会です。

生活用具は、自分たちで、つくった土器、石器、骨角器、木器を中心に使い、その他に鉄器がありますが、鉄器は自らの力では生産できず交易で手にいれているのです。

衣服は、毛皮によってつくられたと思います。

住居は、平面プランが六角形の竪穴式住居です。ただ、冬の家と夏の家では、構造が異なるかもしれません。住居の規模が大きいことから複数家族が住んでいたと言われていいます。生業の反映で人数が多いと思われます。

墓は、土葬で、稀に火葬があるようです。土葬は、土に穴を掘りそこに遺体を埋めるのです。

どんな人達か：サハリン南部・道北地方には、ナナイ・ウルチ系集団、根室半島・クリール諸島には、アリユート系集団?が住んでいたと思われます。

このように、オホーツク文化は異なる集団によって構成されていることも考えられますので、今後は遺物の組合せなどにも着目していく必要があります。

III、海獣毛皮の出来るまで

1) オホーツク文化における海獣の捕獲＝海獣猟

海獣をどのように捕獲するのか：鉤と船

鉤とはなにか：捕鯨船の捕鯨砲に詰め込む鉄製鉤のルーツ

鉤の特徴：その材質は鹿角・海獣骨・鯨骨製で、鉤頭に結び付けられた綱が海獣を回収するときの助け綱になるのです。

鉤頭にはいろいろな形態があり、その形態に地域差が認められます。

当時の船：舟形土製品から推論すると、板楯船・皮船などがあつたようです。

海獣猟の地域性：この銜頭と舟形土製品の組み合わせから考えると海獣狩猟にも地域性がありそうです。

稚内地方：トド・オットセイ・アザラシ猟

網走地方：トド・アザラシ・オットセイ・（ラッコ）猟

根室地方：ラッコ・トド・アザラシ・オットセイ猟

根室地方のラッコ猟：弁天鳥遺跡でラッコの歯、逆刺式銜頭、舟形土製品が出土遺物の組み合わせから判断するとラッコ猟が行われていた可能性が高いのです。

ラッコの捕獲方法～アリュートのラッコ猟を参考に～

沖合のラッコ猟：カヤックと呼ばれる皮張りの軽ボートで投槍器を使って軽用の銜がラッコに投げられたようです。その最大射程距離は約35メートル。ラッコは音に敏感で水中にいても水面にでていても、遠く離れたところからのわずかな音でも聞きつけるのでそのような猟法を考え出したと思われる。

浜でのラッコ猟：荒天の時、岩礁に上がったラッコを棍棒で撲殺して捕る方法

オホーツク文化のラッコ猟は7世紀から9世紀にかけて根室地方を中心に栄えた可能性があります。

問題は、この時期になぜラッコ猟が栄えたのかということにあります。ラッコの肉はあまりおいしくなく、毛皮が有名です。ラッコ猟が栄えた背景には唐の建国を契機とした北東アジアにおける毛皮交易の隆盛ということが引き金になっているのではないかと推測しています。

なお、北海道では縄文晩期末～統縄文にかけて太平洋沿岸の遺跡でラッコの遺体が出土します。それらの遺跡ではラッコ猟用の道具＝逆刺式銜頭は見えていませんので狩猟方法が異なるかもしれません。この時期は鉄製品が稀にしか出土例がないことなどを考えあわせると毛皮が頻繁に流通したとは思われません。需要と供給のバランスがあつたと思います。ラッコ猟は合間を縫って行われていたのでしょう。道具のセットを基準にして考えると、本格的にラッコ猟に乗り出したのはオホーツク人が最初と聞いていいと思います。その背景には、7世紀になると交易先に鉄製品を恒常的に供給させるシステムが整つたことにあるのではないのでしょうか。

2) 毛皮の製造過程

海獣の解体：ナイフ類で肉類を処理し腐りやすい成分を取り除き、腐りにくい繊維組織を残すようにするので。

縫めし工程：繊維間の隙間を埋めるなどして使用に耐えるだけの強度と柔軟性を持たせる作業を行います。

毛皮製品の完成：自家製品と交易品の選別

IV、毛皮の流通

1) 海獣毛皮…どここの産物か～地物かそれとも夷の産物か～

【日本書紀】：海宮遊幸の条に、海驢とあり。海驢は葦鹿皮で敷物として利用（齊明天皇四年＝658年、「生鹿二。黒皮七十枚」とあり）

【日本後紀】：弘仁元年＝810年九月二十八日条に「独射犴葦鹿黑皮」

【延喜式】：独犴皮という文字が出てくる、この独犴皮が何を指しているのか

2) 渤海からの信物…熊獣毛皮

『続日本紀』：天平十一年(739)十二月十日条に渤海からの信物が「大虫川熊皮各七張。豹皮六張。…」とあり

『三代実録』：貞観十四年(872)五月十八日条にも渤海からの信物として「大虫皮七張。豹皮六張。熊皮七張…」

3) 流鬼の唐への朝貢…どういふ産物を持っていったのか

『新唐書』：貞観十四年(640)流鬼の王は、息子の可也余莫に「貂の皮」を持たせ唐に朝貢させた。

『資治通鑑』：貢物 『通典』…朝貢 『唐会要』…朝貢

上記の文献は貂皮についてはふれていない。それは、なぜなのか？

『新唐書』の「貂の皮」は当時の毛皮交流の象徴として記載されているのではないかと思うのです。したがって、貂以外の毛皮すなわちラッコの毛皮も持っていった可能性もあるのです。この問題は、流鬼をどこに求めるかにかかわることなのでこれ以上ふれません。

4) 毛皮の見返りは何か～鉄と毛皮の交換～

自分たちの社会にはない金属製品の確保

オホーツク文化の金属製品は8世紀に入ると急激に増える。その象徴として厭手刀が出土してくるのです。

5) 7世紀から9世紀にかけての毛皮交流

*毛皮ロードの開拓

① 7世紀中頃：黒水靺鞨による異海にむけたテンロードの開拓

流鬼の唐への朝貢

② 8世紀：渤海の日本にむけたテンロードの開拓

貴族社会で毛皮ブーム

③ これをきっかけとして朝廷は蝦夷地にテンロードを開拓？

数年に一度の渤海の使節によるテン皮の供給では限界。その解決策としてあらたなルートを開拓

この時期、道東のオホーツク文化に厭手刀などの鉄製品が数多く出土してくるのはその見返りにテン皮、アザラシ皮、オットセイ皮などを持参したことがその背景にあるのではないかと。

8世紀になるとオホーツク海沿岸の根室、網走地方でラッコ猟が盛んになるのもその裏側にはテンロード開拓をきっかけとしてラッコの毛皮が珍重されたと思われます。ただし、ラッコの毛皮が日本で文献史料に登場してくるのは1423年の『後鑑』の記事なので、確証はありません。

9世紀：毛皮交流の活発化

*7世紀～9世紀の毛皮交流の実態

仲介者を介しての朝貢

黒水靺鞨を介して唐へ 使節の身分…流鬼の君長の息子

唐は流鬼の使節に称号とみやげものを下賜

仲介者・黒水靺鞨と流鬼の関係…対等の交易関係

交易の担い手は誰か お互いに交換するものは何か

據文人を介して秋田城へ

樺文人とオホーツク人との関係は？

オホーツク文化の毛皮は、北東アジアにおける毛皮交易の流れのなかに組み込まれていたのではないか

V、オホーツク社会への毛皮交易の浸透

オホーツク文化の社会に鉄製品が必要不可欠のものとしてビルト・インのことが、毛皮の自家製品と交易品のバランスを崩壊させる要因となる

交易品としての毛皮の量産…毛皮交易の仲介者が階層として形成される？

オホーツク文化の変質

恵庭市西島松5遺跡の発掘調査

～7世紀から8世紀代の墓地の発掘～

厚沢部町教育委員会 学芸員 石井 淳 平

はじめに

西島松5遺跡は、恵庭市を南から北に向かって流れる柏木川と、その支流であるキトウシユメンナイに挟まれた台地上に立地しています。柏木川の河川改修に伴い、平成12年から発掘調査が開始されました。平成12年の調査では、縄文時代末から擦文時代にかけての墓が多数見つかり、これらの墓からは擦文時代初頭から前葉の土器（北大Ⅲ式～擦文時代前期）のほか、刀や斧などの鉄製品が出土しました。

二種類の墓

1 「土墳墓（どこうぼ）」＝84基

- ①楕円形の形状
- ②墓の底の壁には直径10～15cm、奥行き20～30cmの小さな穴が開けられ、小形の土器が埋納される
- ③遺体の頭の付近と想像される場所には握り拳大の石が置かれる
- ④墓の底の四隅に小さな柱の痕跡がみられる

「ウサクマイ葬法」

（千歳市ウサクマイ遺跡で発見された墓の特徴によって名付けられた、この時代に特徴的な墓の作り方）

7世紀代を中心とする年代

2 「周溝のある墓」＝6基

- ①遺体を埋葬した周囲に直径5～6mの溝を円形に巡らす
- ②遺体は木柩（もっかく）と考えられる構造物に納められる
- ③体をまっすぐにした伸展葬（しんでんそう）で埋葬される

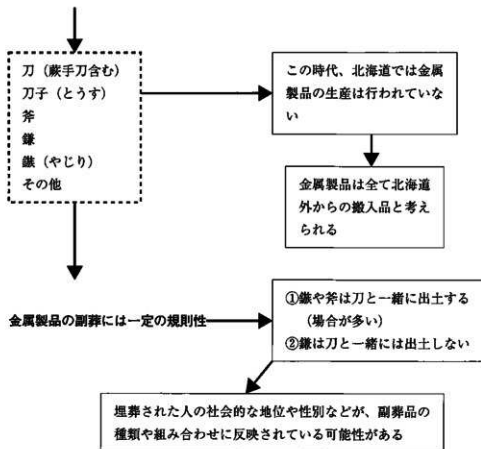
千歳市ユカボシC15遺跡の「周溝のある墓」や、江別市や恵庭市の「北海道式古墳」との類似

8世紀代を中心とする年代

東北地方北部の末期古墳との関連

多量の金属製品

- ・「土墳墓」、「周溝のある墓」をあわせて216点出土



おわりに

西島松5遺跡の墓が営まれた7世紀から8世紀は、本州中央部で律令国家が成立し、日本列島史上の大きな変革期とされます。斉明四年～六年（658～660）の阿倍比羅夫の遠征や、多賀城を代表する城柵の建設に示されるように、列島中央部から東北地方や北海道方面に対して様々な働きかけがなされ、東北地方や北海道の地域社会に大きな影響を与えたと考えられます。そのような社会情勢の中で、北海道の人々がどのような社会を営み、それがどのように変質していったのか、ということを知る上で、西島松5遺跡でみつかった7世紀から8世紀の墓は貴重な情報を提供してくれます。

千歳市 ウサクマイN遺跡

田中哲郎

平成11年当センターで、千歳市ウサクマイN遺跡の調査を実施しました。遺跡は千歳市街地から西方（支笏湖側）へ約5kmのところ、千歳川とその支流内別川の合流部にあり、ちょうど国指定史跡ウサクマイ遺跡群の入り口部分にあたる所です。市街地から支笏湖へ抜ける道道を挟んで「名水ふるさと公園」があり、千歳市民の憩いの場所とともに、湧水を求め千歳市外からも多くの人々が訪れる場所でもあります。

調査範囲は1,000㎡足らずのごく小範囲でありましたが、縄文文化期の竪穴住居跡11軒のほか、土坑、焼土など多くの遺構が検出され、活発な生活活動が窺える内容でした。その中には縄文文化ではめずらしい、特徴的な遺物が出土し、マスコミ上にもぎわせた遺跡です。その一つは、北方からもたらされたソーメン文（ソーメン状の粘土添付文）を持つオホーツク式土器、

そして南方から「皇朝十二銭」の一つである2枚の「富壽神寶」です。ともに、白頭山-苦小牧火山灰（B-Tm：10世紀中頃降灰）下と判断できる出土状況で、その下限年代が特定できるものでした。

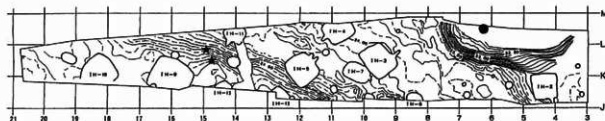


遺跡の位置



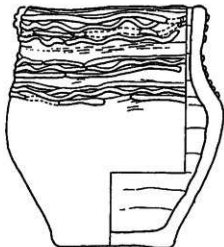
★「富壽神寶」

●オホーツク式土器



遺構配置図とオホーツク式土器・富壽神寶出土位置

オホーツク式土器は河道跡から、これも搬入品である須恵器片や現地の捺文式土器片とともに出土しています。口縁部の一部が欠損していますが、ほぼ完形で口径10cmほど、器高が13cm弱のカメ形土器です。器表面にはススが付着し、煮炊きに使用したことがわかります。この土器の上半部には横環する直線状、波状の粘土経の組合せで3段に文様が構成されるソーマン文は、「チューブアコレーション技法」によるもので、道東の中期オホーツク文化（8世紀後半から9世紀前半）に位置づけられそうです。



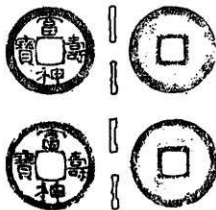
(縮尺ほぼ2分の1)

オホーツク式土器

また、一方の富壽神寶は、皇朝十二銭のうち西暦818～834年間に鑄造された5番目の銅銭です。銭自体の磨滅もあまりみられず、堅穴住居外に廃棄された捺文土器の分布と重なることから捺文期のもものと判断され、鑄銭から時間的経過がさほどなく遺跡に持ち込まれたものと考えられます。

富壽神寶は、大きく「大椽」(大ぶり)、「小椽」(小ぶり)の2種類があり、「たから」の字には「寶」と「寶」があります。この遺跡で見つかった2枚は、ともに「寶」の「小椽」です。また、富壽神寶を鑄造していた時期は、「隆平永寶」(富壽神寶の一つ前)から原料銅の産出不足により量目、含有銅の比率が減少しだし、富壽神寶にいたっては銭の粗悪化を朝廷自らが認めるようになる時期です。

平成15年には恵庭市茂漁8遺跡で、「隆平永寶」が堅穴内から新たに発見されました。今後の展開が注目されます。今後とも、ウサクマイN遺跡は、石狩低地帯の捺文時代の動向を探る上で、重要な鍵となる遺跡の一つです。



(縮尺ほぼ原寸)

富壽神寶

北海道南部で見つかったオホーツク文化の遺跡

－奥尻島青苗砂丘遺跡（おくしりとうあおなえさきゅういせき）－

平成13～14年、北海道南部の奥尻島にある青苗の浜辺で大変珍しい遺跡が発見されました。その遺跡の名前は青苗砂丘遺跡、約1400年前に「オホーツク文化」を持った人々がここで暮っていたのです。

「オホーツク文化」とは、5～10世紀頃、北海道に存在した古代文化の一つです。その名称にもあるように、今までこの文化の遺跡はオホーツク海を中心とした海岸地域でしか見つかっていませんでした。そのため、オホーツクから遠く離れた渡島半島に近い奥尻島での発見は、多くの人々を驚かせたのです。

遺跡の位置は奥尻島の最南端、青苗地区の海に面した砂丘上（標高約5～9m）です。そこからオホーツク文化の「住居跡」や「墓」、「貝塚」、「焼土」、ヒグマの骨を含む「骨塚」類似のもの、多数の土器、石器、玉、鉄製品、骨角器、自然遺物などが見つかりました。

「住居跡」は大小5軒が確認されています。全て堅穴式のもので、「貼床」を施した床や炉跡、柱穴、遺物などが見つかっています。

1号住居（H-1）は、貼床を持つ大形の堅穴住居で十和田式類似の刺突文の土器などが見つかっています。2号住居（H-2）は一回りほど小形の堅穴で、貼床は在りませんが炉跡や柱穴、刻文の施された土器や閉窩式の回転式離頭銛などの骨角器が見つかっています。更に2号住居内からは「骨塚」と呼ばれるものに良く似たものも見つかりました。「骨塚」はオホーツク文化の大きな特徴の一つです。動物や魚の骨を積み重ねた塚を住居の中に作るもので、他の遺跡からはヒグマの頭骨を数十個も積み重ねた骨塚が見つかった例があります。確かな正体は解っていませんが、何かを祀った祭壇のようなものと言われています。

3号住居（H-3）からも同じタイプのもが見つかっており、それにはヒグマの骨やカワウソ、タスキの頭骨なども使われていました。

「墓」は二つ見つかっています。墓-1からは「伸展葬」で葬られ年齢40才ぐらいの女性の遺骨が見つかっています。この墓には小形の刀子と鯨骨製の円盤装飾品が副葬されていました。墓-2からは二人の幼い子供の遺骨が見つかっています。こちらは頭の部分だけの調査でしたが、二人はお互いの顔を見合うような状態で出土しました。何かの事故で同時に亡くなったため一緒に葬ったのかもしれない。



写真1 2号住居（H-2）



写真2 墓-1 人骨出土状況

人類学的な分析の結果、これらの遺体からはオホーツク人の特徴を見出せなかったのですが、副葬品や埋葬の方法などにはオホーツク文化の影響が少なからず見受けられる墓と言えます。

砂丘の縁で見つかった「貝塚」には、土器や石器などと一緒に入々が捨てた貝殻や食べ残した動物や鳥、魚の骨などが沢山残されていました。遺跡に住んだ人々は奥尻島周辺の豊富な海の幸を盛んに捕っていたことがわかります。

多かったのは動物のアシカ、鳥のウミスズメ、魚のソイヤカジカ、そしてアワビやウニなどで、これら以外にも色々なものが含まれていて、その中でも「ヒグマの骨」は特に重要な発見の一つです。ヒグマは、今も昔も自然の状態で奥尻島に生息していないと考えられている動物です。貝塚や骨塚などから見つかったヒグマの骨を分析したところ、北海道南部に生息していたものであることが解りました。もしかしたら、アイヌの「イオマンテ」のような「クマ祭り」を行うため、わざわざ仔グマを連れてきたのかもしれない。

オホーツク式土器は、「十和田式」類似の刺突文や「江ノ浦B式」類似の刻文を持つタイプが多く、これら以外には貼付文や縄線文、沈線文を持つタイプも少量ながら出土しています。

石器では石鎌や石鋸、石錘など、骨角器では閉窩式の銚頭や釣り針など狩猟・漁猟に使う道具類が比較的多く見つかっています。貝塚で見つかった獲物はこれらの道具で捕まえていたのでしょうか。

このように青苗砂丘遺跡にはオホーツク文化の痕跡が色濃く残されていました。複数の住居跡や墓、貝塚などがあるため、彼らは比較的長い期間ここに滞在しており、その時期は遺物などから判断して6～8世紀頃と考えられます。

本州では古墳～平安時代の頃、彼らは住み慣れたオホーツクの海を離れ、遙々海を渡って遠く奥尻島まで来ていたわけです。いったい何のために彼らは、本州にほど近いこの地までやってきたのでしょうか。

食糧であるアシカやホッケの群を追かけて偶然に到着したのでしょうか？ ヒントは、オホーツク文化のものと共に出土した遺物の中にあるかもしれません。住居跡や墓などから見つかった土師器や須恵器などの土器類、碧玉製の玉、鉄の道具などは実は本州文化のものです。これらは恐らく交換、或いは交易などで手に入れたと考えられます。

実はオホーツク海沿岸の各遺跡からも同様の本州文化のものが多く出土しているのです。奥尻島の青苗砂丘遺跡は本州文化と接触、交流に必要なもの、珍しいものを更に北にある本拠地に運ぶための基地の一つだったのかもしれない。



写真3 オホーツク式土器

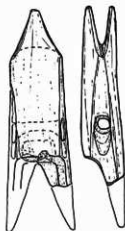


図1 閉窩式の銚頭

青苗砂丘遺跡の調査はごく一部が行われたにすぎず、遺跡の大部分はまだ厚い砂の下に埋まっています。住居跡やお墓がまだまだ沢山あるはずですが、そして、多くの秘密もそれらと一緒に埋もれているに違いありません。

(北海道埋蔵文化財センター 菅川洋一)

モヨロ貝塚

米村 衛

1. モヨロ貝塚について

網走市モヨロ（最寄）貝塚は、オホーツク海に面し、網走川河口の砂丘に位置するオホーツク文化を代表する遺跡である。大正初期の発見以来、その大陸系の特異な遺物や100体を越える出土人骨が大きな注目をあつめ、昭和11年には国の史跡に指定された。終戦直後の昭和22、23、26年には東大、北大等による総合的な調査によって、オホーツク文化の具体的な暮らしぶりが初めて明らかにされるなど、大きな成果がえられている。

網走市では平成12年度よりはほぼ半世紀ぶりにモヨロ貝塚の史跡整備を検討してきたが、その過程で再調査の必要性が指摘された。平成13～14年度に試掘調査、平成15～16年度には、東京大学等の協力のもと発掘調査が実施されることとなった。現在までのところ、住居址2軒、墓域約420㎡を中心に調査が続けられている。

2. 住居址の調査について

平成15年度には9号住居址1軒を調査し、平成16年度には隣接する8号住居址が調査地点として選ばれた。9号住居址は長軸15m、短軸12mほどの六角形の床面をもつ大形家屋であった。住居中央には扁平な礫による方形の炉があり、それを囲むようにコの字形に貼られた粘土の床がみとめられた。貼床は大きく3枚検出され、順次縮小させながら建て替えが進められていった様子が確認された。住居内には主に興壁とそれに対面する場所に骨塚が配され、前者ではヒグマの頭骨、後者ではアザラシ等の海獣の四肢骨が主体をなしていた。出土した土器はオホーツク文化の刻文期のもので、これまで調査例が稀少であった該期の骨塚の内容を探るうえで貴重な資料がもたらされた。

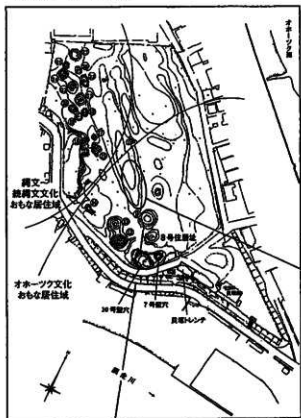
今年度発掘した8号住居址は、部分的に床面が確認された調査段階ではあるが、出土した土器等からオホーツク文化の貼付文期の所産と考えられている。住居覆土からは、層厚5～10cmほどの良好な魚骨層が間層をはさみ3～4枚重複して出土し注目された。サケ・マスを主体にオットセイ、アザラシ等の多彩な海獣骨がみられ、骨銛等の骨角器も多く検出されている。

3. 墓域の調査について

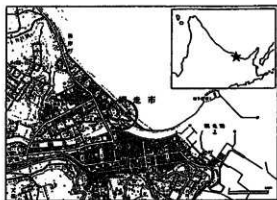
墓域の調査は平成15～16年度において、そのひろがりの把握をめざし、住居址群の西方地点で行われた。その結果、地表下0.6～0.8mあたりで、土器底部が露呈した独特の墓塚が数多く発見された。総数82基を数え、オホーツク文化の住居址群を取り囲むかたちで、大規模な墓域が隣接していることが明らかとなった。

墓塚はその上面に壺を置く例や礫を配する例など、幾つかのあり方がみとめられたが、そのうちの代表的な7基について土壌内の調査を実施した。墓塚は長軸1.5m、短軸0.8mほどの楕円形が主体で、石鏃や刀子などの副葬品とともに、仰臥屈葬の人骨の一部も検出された。また、保存状態は良好ではなかったが、木槨に納められた墓も発見されている。オホーツク文化の墓制の内容及び、住居址群と墓域との関係等を探るうえで貴重な資料と考えられる。

網走市 モヨロ貝塚

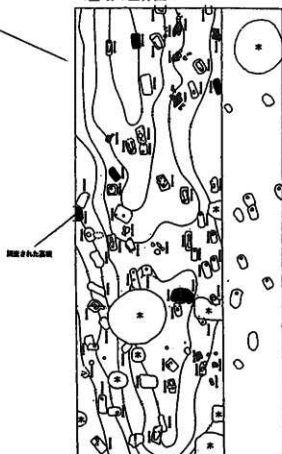


モヨロ貝塚全体図



モヨロ貝塚の位置

<墓域の全体図>

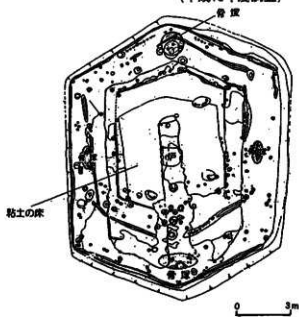


平成15年度調査区

平成16年度調査区

<9号住居址 平面図>

(平成15年度調査)



交易からみた北方古代史

- 古代人が欲しかったものは？ -

菊池俊彦

捺文文化の発生と鉄製品

7世紀後半ころから、北海道の縄文文化は本州からの文化的影響によって捺文文化へと移行する。縄文文化から捺文文化への移行を促した決定的な要因は鉄である。北海道への鉄製品の豊富な流入は新たな捺文文化の発生を導いた。では、何が捺文文化の発生の背後にあって、そのような文化の変容が起こったのだろうか？ 北海道に大きな文化的影響を及ぼすほどの、どんな時代状況の変化が本州側にあったのだろうか？

捺文文化の遺跡からは石器がほとんど見出されないことから、捺文文化の人たちはもはや石器に替わって鉄製品を多量に使用するようになった、とみてよいだろう。しかしながら捺文文化の遺跡から鉄の痕跡は発見されていないので、それらの鉄製品は本州から搬入されたものと考えしかるしかない。だが、鉄製品は決して簡単に入手できたわけではなかったろう。捺文文化の人たちは鉄製品を手に入れるために、それらの鉄製品と交換価値が等しい北海道のどんな産物を本州側の人たちに手渡していたのだろうか？ 等価値の産物を手渡さない限り、鉄製品をやすやすと手に入れることはできなかったろう。

オホーツク文化の鉄製品・装飾品

5世紀ころから、北海道のオホーツク海沿岸にはサハリンから南下して来たオホーツク文化の人たちが居住するようになる。オホーツク文化の人たちは石器の道具をたくさん使っているが、一方で遺跡からは多数の刀子（＝ナイフ）・斧・刀・鉞のような鉄製品も見出されている。オホーツク文化の場合にも、遺跡から製鉄の痕跡である鉄鉱石や竈は発見されていない。また青銅製や軟石製の装飾品が見出されている。それらの鉄製品の大部分と装飾品は大陸製品であり、オホーツク文化の人たちは大陸の人たちとの交流・交易を通して、そのような大陸製品を入手していたとみてよい。

だが、その場合でもオホーツク文化の人たちは大陸製の鉄製品や装飾品を、大陸の人たちとの、どのような交流・交易によって手にいれることができたのだろうか？ 大陸のアムール河流域・松花江流域には4世紀～13世紀に、中国の史料に韃靼とか、女真という呼び名で登場する人たちが遺した多くの遺跡が発見されている。それらの遺跡からは上記のオホーツク文化の鉄製品や装飾品と同一の製品が数多く見出されている。オホーツク文化の人たちはそれらの大陸製品を手に入れるため、大陸の人たちに見返りとして、何を手渡していたのだろうか？

東北部における本州勢力の拡大の影響

7世紀中ころ、大和の律令国家は日本海側では、今日の新潟県北部に、越の国の北辺を守護するために淨足櫓（647年）と磐舟櫓（648年）を設置した。また、そのころ、太平洋側では今日の福島県から宮城県南部にかけて、陸奥国を設置した。つまり、当時、大和の律令国家が支配の権力を及ぼしていたのは今日の新潟県の北部、宮城県の南部までにすぎなかった。

8世紀に入って、日本海側では前進基地として、今日の山形県庄内地方に出羽櫓（709年）が設置されると、これを中心に出羽国（712年）が設置された。ついで出羽櫓は今日の秋田県に移されて秋田城

(733年)が造営されると、ここを中心に出羽国の最北の拠点として9世紀初めに秋田郡(804年)が設置された。太平洋側では、宮城県に多賀城(724年)、桃生城(759年)が造営されて前進基地が北上し、9世紀初めには岩手県に胆沢城(802年)、志波城(803年)が造営されて、大和の律令国家の権力が秋田～岩手の線まで延びるにおよんだ。

このような7世紀中ごろから9世紀初めにかけての大和の律令国家の東北方面への勢力の拡大に伴って、律令国家の支配が東北地方に確立されると、律令国家はその土地から産物を取り立てて、官に納めさせた。貢納の見返りには懷柔策として、律令国家の中央から鉄製品や織物が下賜された。このような状況の余波が、東北北部から、今日の北海道の捺文文化の人たちにおよんで、捺文文化の人たちは鉄製品を入手できるようになった。

捺文文化の人たちが手渡した北海道の産物

東北地方が律令国家の直接の支配下に組み入れられることによって物質的に豊かになり、文化的に発展したのに対して、北海道はその圏外にあった。鉄製品を入手するために、北海道の捺文文化の人たちは東北北部の人たちと交易するのみならず、北海道の産物を携えて、自分たちから直接、律令国家の最前線基地の秋田城に交易に向いていた、と推測されている。では、その場合、交易品としての北海道の産物とは何だったろうか？

延暦21(802)年の記録によれば

渡島蝦夷は出羽国に向いて、国司に買物を納めていたこと、それは雑皮〔さまざまな毛皮〕であること、ところが、出羽国から中央政府の官庫に納められるはずのそれらの雑皮のうち、それが官庫に入る前に、良質の毛皮を貴族たちが競って買い求めてしまうために、官庫に入るのは残った粗悪品だけであること、すでにこれまで、そのような購入を禁ずる布告を出しているにも関わらず、改善されないので、今後は勝手に蝦夷の産物を購入することを禁止する、もし違反する者には重い罰を下す。

という布告が出されている(『類聚三代格』巻19、延暦21年6月24日太政官符)。

この渡島蝦夷は北海道の住民を指していると見て良いから、すでに8世紀には北海道側の住民が出羽国の国府(秋田城)の国司に買物を納めに行っていたことが、この史料からうかがわれる。

これらの買物の雑皮、つまりさまざまな毛皮とは、ヒグマ、アザラシ、クロテンなどの毛皮を指していたであろう。熊(ヒグマ)の毛皮は7世紀のころ、斉明4(658)年の阿倍比羅夫の東北遠征の際に肅慎を討った戦利品に挙げられている。これは、北海道にのみ生息する熊の毛皮が、すでに当時、捺文文化の人たちから本州側に交易品として手渡されていたことを示している。

またクロテンの毛皮は延喜20(920)年の話として

渤海の使節は平安京の宮殿を訪れた際、宴席に貂〔クロテンを指す〕の毛皮の上衣を着て出席し、これを日本の貴族たちに誇ったところ、(醍醐天皇の皇子の)重明親王は黒貂の毛皮の上衣を8枚も重ね着して現われたので、使節は自分を大いに恥じた。

という(『大日本史』巻93、列伝20、『扶桑略記』第24、延喜20年5月12日の条)。

渤海国の使節は日本に虎、豹、熊、貂(クロテン)の毛皮をもたらしていた。平安京の貴族たちは競ってその毛皮を求めた。貴族たちはその地位によって虎、豹、貂の毛皮の着用が定められ、障泥(乗馬の際の泥よけ、あおりとも言う)に用いられた熊の毛皮も地位によって使用が定められていた(『延喜式』巻41、禪正告)。

10世紀には水豹(阿左羅之)の毛皮が太刀の鞘の裝飾に、12世紀には水豹の毛皮が障泥に用いられ

ている（藤田明良「都にやって来た海獣皮－古代中世の水豹と羆鹿」大塚和義編『北太平洋の先住民交易と工芸』思文閣出版、2003）。そのようなアザラシの毛皮は、すでにそれ以前から平安京にもたらされていたことだろう。アザラシの毛皮は、言うまでもなく北海道の産物であり、それが本州にもたらされていたのである。

虎や豹の毛皮は渤海の領域からの産物でまかなうしかないが、黒、貂（クロテン）、アザラシの毛皮は北海道から出羽国を経由して、都にもたらされていたことだろう。重明親王がまとった黒貂の毛皮は、渤海との交易を通してもたらされた毛皮ではなく、北海道の茶褐色の毛色のエゾクロテンの毛皮か、むしろサハリンの黒褐色のクロテンの毛皮が平安京にもたらされたものだろう。

また927年に編集された『延喜式』の巻23、民部下に陸奥国の交易雑物として、昆布（コンブを指す）六百斤・索昆布六百斤・細昆布一千斤が挙げられている。コンブの南限は三陸沿岸であるから、この昆布は陸奥の蝦夷が三陸沿岸で採った昆布の貢納品ということを表わしている。しかしながら、合計2,200斤、一斤は600グラム、したがって1,320キログラムという膨大な量の昆布であるから、これには北海道の昆布が含まれていたのではないだろうか？

『続日本紀』巻7、靈龜元（715）年10月29日の条には、陸奥の蝦夷の言葉として

先祖以来、〔我らは朝廷に〕昆布を買いでいます。常にこの地で採り、毎年〔貢納を〕欠かしたことがありません。

と記されている。これも陸奥の蝦夷とあるが、この昆布にも北海道産の昆布が含まれていたことだろう。

中国に運ばれた北海道の産物

中国の史料、『冊府元龜』巻971、外臣部16、朝貢4に

開元18（730）年5月、渤海靺鞨が使節を遣わして来朝し、海豹の毛皮5張…を献上した。…開元28（740）年10月、渤海靺鞨が使節を遣わして、貂の毛皮、昆布を献上した。

とある。渤海靺鞨とは、日本でいう渤海国を指す。ここに海豹とあるのは、アザラシである。渤海国の沿岸、つまり今日の北朝鮮からロシアの沿海地方南部の沿岸にアザラシは回避しない。またそこに昆布は自生していない。

では、渤海の遣唐使が玄宗皇帝に献上したアザラシの毛皮と昆布を、渤海国はどこから手に入れたのだろうか？ そこで考えられるのは日本からの入手である。しかもそれは北海道産のアザラシの毛皮と、唐の皇帝に献上するほど立派な昆布であれば、北海道産の昆布ということになる。つまり、8世紀の前半、北海道産のアザラシの毛皮と昆布は出羽国を経由して平城京に運ばれ、そこから渤海国に運ばれて、そこから唐の長安の都にもたらされていたことになる。

オホーツク文化の人たちが手渡した北海道の産物

唐の貞観14（640）年に、長安を去ること一万五千里の遠方にあるという流鬼の国から長安に朝貢の使節がやって来た。『通典』巻200、辺防16、北狄伝、流鬼の条によれば

靺鞨の中には海に乗り出してその〔流鬼〕国へ交易に行く者がいて、唐の国家の繁栄ぶりを〔流鬼に〕話したところ、その国の君長〔統治者を指す〕は息子の可也余志を唐に使節として遣わした。

この使節は貞観14年に、途中で何度も通訳を重ねて長安に朝貢にやって来た。

という。靺鞨とは、当時、中国東北部の松花江流域からアムール河流域に勢力を張っていたツングース系の民族である。流鬼の国はサハリンにあった、と私は考えている。7世紀にサハリンにあった文化はオホーツク文化であるから、したがって流鬼とは、オホーツク文化の人たちを指している。すなわち、

サハリンのオホーツク文化の人たちの中には、鞣靴〔ここでは黒毛鞣靴を指す〕に導かれて、アムール河をさかのぼり、松花江をさかのぼって、640年に唐の都長安を訪れた遣唐使がいたのである。

では流鬼の使節は朝貢に際して、唐の太宗皇帝にどんな貢物を献上したのだろうか？ 『新唐書』巻220、東夷伝、流鬼の条には

貞観14年、その〔流鬼の〕王は子の可也余志を遣わして、貂の毛皮を買いだ。〔この使節は〕途中で何度も通訳を重ねて朝貢にやってくる。

という。つまり、流鬼の使節は貢物として貂の毛皮を持って行ったのである。それは鞣靴とて同じであった。鞣靴に限らず、後漢、三国時代以降、歴代の中国東北部の諸民族は貂の毛皮を朝貢の際の貢物として、歴代の王朝の皇帝に献上している。貂の毛皮は歴代の王朝にもっとも喜ばれた貢品品であった。

流鬼の朝貢の記録はたった一回、この時だけである。しかし注目されるのは、鞣靴が海に乗り出して、流鬼の国、つまりサハリンに交易に来ている、という記述である。

オホーツク文化の遺跡から見出される刀子・斧・刀・鏃のような鉄製品、また青銅製の帯金具・鏢や鏢の装飾品、軟玉製の耳飾りやペンダントの装飾品のような大陸製品を、オホーツク文化の人たちは鞣靴との交易を通して、入手していたのである。実際、アムール河中・下流域の鞣靴文化（4～9世紀）や松花江中・下流域の同仁文化（5～10世紀）の鞣靴が遺した遺跡から、それらとまったく同じ遺物がたくさん見出されている。

そのような鞣靴とオホーツク文化の人たちとの交易の際に、オホーツク文化の人たちから鞣靴に手渡されたのが貂の毛皮であった。鞣靴の領域には貂が生息しているにも拘わらず、鞣靴はさらにサハリンにまで、貂の毛皮を買付けに行ったのである。貂の毛皮を長安に持って行けば、皇帝から見返りとして膨大な珍重品や絹織物や青銅製品・鉄製品を下賜されたからである。鞣靴にとって、貂の毛皮は自分たちの領域にいくらあっても、それ以上に欲しかったことだろう。

サハリンのクロテンの毛皮は、大陸のクロテンの毛皮と同様に、黒褐色の、あるいは特上品は黒色の良質の毛皮である。中国では漢代から、歴代の王朝の貴族と高官の冠の飾りと衣装の飾りに貂（クロテン）の尾と毛皮が使われ、それは貴族と高官の地位を標示するために用いられた。その後、明代以降になると、中国東北部から膨大な量の貂の毛皮が流入して、庶民さえも冬の防寒用に貂の毛皮を愛用するようになる。

そのような貂（クロテン）の毛皮のほかに、サハリンのオホーツク文化の人たちは鞣靴にラッコの毛皮も手渡していた可能性がある。オホーツク文化の遺跡から見出されるラッコを表わす牙製の彫像は、単なる遊びの彫像ではなく、ラッコが交易品として貴重な価値があったことを示しているのかも知れない。ただし、中国側の史料にラッコを明示する記事は見られない。

明代の15世紀後半（1461年）に完成した地理書に、鞣靴の後裔の女直（女真とも言う）の土地の産物として、海獺の毛皮が挙げられている（『大明一統志』巻89、外夷伝、女直の条）。つまり、海の狼の毛皮だということ。海狗の毛皮というものもある。つまり、海のイヌの毛皮だということ。海豹の毛皮も挙げられている。これはアザラシの毛皮だろう。

同様に明代の15世紀後半（1488年）に刊行された地方志に、女直の一派である北山野人の貢物として、海獺の毛皮、海豹の毛皮のほかに、海驪の毛皮が挙げられている（『遼東志』巻9、外夷貢賦）。海驪は海狸と同じで、カワウソを指す。海のカワウソの毛皮であれば、これはラッコを指しているかも知れない。

これらの明代の史料の文字がラッコを表わしているとすれば、それは明代になって初めて東方の海から女直にもたらされたのではなく、すでに唐代にもラッコの毛皮はオホーツク文化の人たちから鞣靴に

もたらされていたかも知れない。そのような状況は海豹、つまり、アザラシの毛皮についても同様であったことだろう。

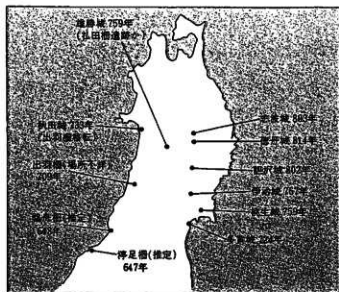
商品経済の中の交易品

オホーツク文化の遺跡から**蕨手刀**^{からびてとう}が見出されている。これは本州製品である。蕨手刀をオホーツク文化の人たちはどこから、どのようにして入手したのだろうか？

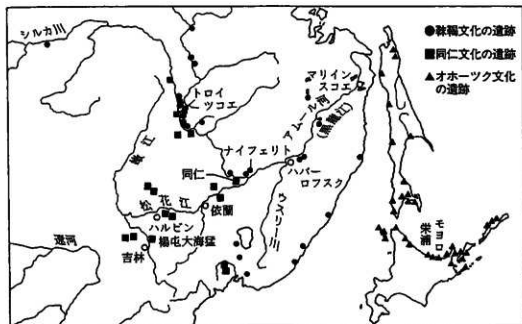
この点において奥尻島の青苗砂丘のオホーツク文化の遺跡は興味深い。オホーツク文化の人たちはオホーツク海沿岸を主な居住地域としながら、日本海沿岸を奥尻島に南下して、縄文文化の人たち、次いで擦文文化の人たちと交易していたのであろう。その際、オホーツク文化の人たちの側から手渡した交易品はサハリン産のクロテンの毛皮やオホーツク海産のアザラシの毛皮だったろう。それらは7世紀から9世紀にかけて、擦文文化の人たちの手によって出羽国に運ばれ、次いでそれは平城京や平安京にもたらされた。すなわち、奥尻島のオホーツク文化の遺跡は、オホーツク文化の人たちにとって交易のための前進基地であり、奥尻島はオホーツク文化の人たちと擦文文化の人たちの交易の場だったのではないだろうか？

蕨手刀は擦文文化の人たちにとって、またオホーツク文化の人たちにとっても、生活必需品ではない。クロテンの毛皮やアザラシの毛皮も擦文文化の人たちにとって、生活必需品ではない。このような品物が交易品として運ばれるということは、それらが商品としての価値があったからに他ならないであろう。時代の波は、北海道を本州の商品経済の中へと巻き込んで行く。しかも、北海道産のアザラシの毛皮や昆布は、平城京から海を越えて、渤海を経由して長安にさえ、運ばれたのである。それらは朝貢という官貿易を通して、渤海を経由して中国に運ばれた。それと同時に、渤海と日本の交易において商人が私貿易を通して活躍していたことを考えれば、古代のこのような交易はもはや商品経済の中で展開されていたと言わなければならない。

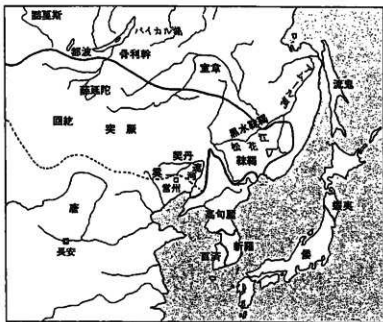
古代人は必ずしも生活必需品ではない商品求めて交易に向き、擦文文化の人たちは出羽国に出掛け、オホーツク文化の人たちは奥尻島に出掛け、鞆鞆はサハリンにやって来ていた。そして渤海は海を越えて日本にやって来ていた。擦文文化とオホーツク文化の鉄製品は、このような交易に伴って、それぞれ本州と大陸からもたらされたのである。



(左) 7世紀～8世紀における大和の律令国家の東北地方への進出〔菊池勇夫編『日本の時代史19：蝦夷島と北方世界』吉川弘文館、2003〕 (右) 多賀城修築記念碑〔宮城県多賀城跡調査研究所「研究紀要Ⅰ」-多賀城碑特集-、1974〕 天平宝字6(762)年建立のこの碑の2行目に「多賀城は蝦夷の国の境界を去ること120里」とある。当時の1里は約650mだから、律令国家は8世紀後半に、まだ多賀城の北78kmまでしか、支配下に組み入れていない。

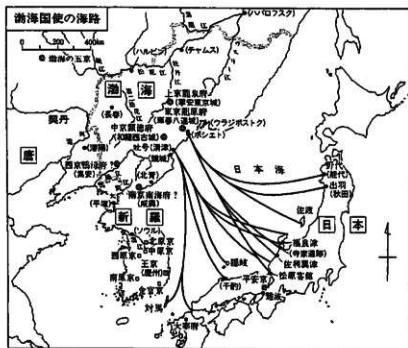


オホーツク文化と綽縄文化・同仁文化の遺跡の分布
〔菊池俊彦『北東アジア古代文化の研究』北大図書刊行会、1995〕



渤海国（698～926年）成立前の北東アジアの情勢

〔菊池俊彦「環オホーツク海古代文化の研究」北大図書刊行会、2004〕



渤海と日本の交流・交易

〔小嶋芳孝「日本海を越えてきた渤海使節」『日本の古代3：海をこえての交流』中央公論社、1986〕
 渤海国は727年から922年まで34回、日本に使節を派遣した。日本は728年から811年まで13回、渤海国に
 使節を派遣している。

5 協力活動及び研修

(1) 協力活動

ア 発掘現場見学

- * 根室市穂香川右岸遺跡見学 (根室市民38名) 6月20日
- * 恵庭市西島松5遺跡見学
(大阪府立弥生文化博物館「第2回北海道史跡と考古の旅」ツアー45名) 7月5日
- * 根室市穂香川右岸遺跡見学 (根室市立北斗小学校6年生89名) 7月6日
- * 上磯町館野遺跡見学 (北海道むかしむかし研究会4名) 7月7日
- * 森町石倉1遺跡現場説明・濁川左岸遺跡体験発掘
(七飯町歴史館ジュニア探検クラブ会員小学校5・6年生26名)
(随行員 職員及び七飯町歴史館友の会会員8名) 7月29日
- * 遠軽町栄野1遺跡・新野上2遺跡見学 (遠軽町家庭教育学級親子20名) 8月3日
- * 上磯町館野遺跡見学 (全国森林レクリエーション協会函館支部会員15名) 8月6日
- * 恵庭市西島松5遺跡見学 (発掘者談話会17名) 8月6日
- * 千歳市オルイカ2遺跡見学 (発掘者談話会17名) 8月7日
- * 根室市穂香川右岸遺跡見学・発掘体験 (根室市立花咲港小学校5・6年生9名) 8月25日
- * 根室市穂香川右岸遺跡見学 (根室市民22名) 9月4日
- * 根室市穂香川右岸遺跡発掘体験 (中標津町立中標津東小学校6年生92名) 9月15日
- * 恵庭市西島松5遺跡見学 (恵庭市立恵み野旭小学校3年生80名) 9月16日
- * 江別市対雁2遺跡見学 (江別市立上江別小学校6年生165名) 10月20日

イ 委員会・講演会

- * 北の縄文文化推進事業「縄文ボランティア・ワークショップ」
(助言者) 越田 (賢) 1月30日
- * 北の縄文文化フォーラム (函館市)
(講演者) 畑「北の縄文文化回廊に向けて」 1月31日
- * 北海道文化財保護協会活性化委員会 (札幌市)
(委員) 越田 (賢) 2月5日
- * 史跡 標津遺跡群 天然記念物 標津湿原整備委員会 (標津町)
(委員) 畑 2月5日
- * 第144回はまなすプロバスクラブ例会 (札幌市)
(講演者) 越田 (賢) 2月17日
- * 北海道文化財保護協会活性化委員会 (札幌市)
(委員) 越田 (賢) 2月25日
- * 史跡 標津遺跡群 天然記念物 標津湿原整備委員会 (標津町)
(委員) 畑 3月1日
- * イオル再生等アイヌ文化伝承方策基礎調査委員会 (札幌市)
(委員) 畑 3月18日

- * 第2回 垣ノ島B遺跡出土漆製品の分析・保存処理にかかる共同研究会議（奈良市）
 〈派遣職員〉 田口 3月18日～3月19日
 - * 史跡 標津遺跡群 天然記念物 標津湿原整備委員会（標津町）
 〈委員〉 畑 3月27日
 - * 平成16年度北海道文化財・埋蔵文化財担当者会議（札幌市）
 〈派遣職員〉 越田（賢） 4月27日～4月28日
 - * イオル再生等アイヌ文化伝承方策基礎調査委員会（札幌市）
 〈委員〉 千葉 6月15日
 - * 平成16年度第1回恵庭市カリンバ3遺跡整備検討委員会（恵庭市）
 〈派遣職員〉 千葉 6月22日
 - * 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構普及啓発講演事業セミナー（東京都）
 〈講師〉 田口 8月3日
 - * 「北海道の文化」編集委員会（札幌市）
 〈委員〉 越田（賢） 8月5日
 - * 恵庭市カリンバ3遺跡懸賞論文・小説・随筆募集事業審査会（恵庭市）
 〈審査員〉 西田 8月10日
 - * 史跡 最寄貝塚保存整備委員会（網走市）
 〈委員〉 千葉 9月17日
 - 史跡 標津遺跡群 天然記念物 標津湿原整備委員会（標津町）
 〈委員〉 千葉 9月24日
 - * 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構普及啓発講演事業セミナー（札幌市）
 〈講師〉 田口 10月2日
 - * 第3回 垣ノ島B遺跡出土漆製品の分析・保存処理にかかる共同研究会議（奈良市）
 〈派遣職員〉 田口 10月5日
 - * 環日本海交流史研究集会「古代日本海域の港と交流」（金沢市）
 〈講師〉 鈴木（信） 10月28日～10月30日
 - * 史跡 標津遺跡群 天然記念物 標津湿原整備委員会（標津町）
 〈委員〉 千葉 11月13日
 - * 第25回 南北海道考古学情報交換会 in 知内（知内町）
 〈発表者〉 熊谷・富永・大泰司・芝田 12月4日～12月5日
 - * 第18回 東北日本の旧石器文化を語る会（多賀城市）
 〈発表者〉 広田 12月25日～12月26日
- ウ 調査指導・共同研究
- * 岩内町東山I遺跡の埋蔵文化財土器・石器分類指導（岩内町）
 〈派遣職員〉 熊谷 1月19日～1月20日
 - * 泊村における埋蔵文化財調査の専門的事項についての指導（泊村）
 〈派遣職員〉 田口 1月20日～1月21日

- * 科学研究費補助金 「中世日本列島北部-サハリンにおける民族の形成過程の解明-市場経済圏拡大の観点から」資料調査 (南津軽郡浪岡町)
〈派遣職員〉越田 (賢) 2月9日～2月11日
- * 科学研究費補助金 「中世考古学の総合的研究-学融合を目指した新領域創生」
北東アジア研究会で研究打ち合わせ (札幌市)
〈派遣職員〉越田 (賢) 2月25日～2月27日
- * 科学研究費補助金 「中世日本列島北部-サハリンにおける民族の形成過程の解明-市場経済圏拡大の観点から」資料調査 (東京都)
〈派遣職員〉越田 (賢) 3月11日～3月13日
- * 土器計測データの検討及び報告書の分担決定会議
〈派遣職員〉中田 3月13日～3月14日
- * 最寄貝塚遺物調査・整理・指導
〈調査指導〉畑 3月29日～3月30日
- * 野付半島遺跡群調査 (野付半島) (羽前町)
〈派遣職員〉田口 6月28日～7月2日
- * 鶴居村下幌呂15遺跡における降下火山灰の分析調査 (鶴居村)
〈派遣職員〉花岡 8月18日～8月20日
- * 石器づくりシンポジウム in しらたき 展示資料の解説・収納及びシンポジウムの運営協力
〈派遣職員〉鈴木 (宏) 9月11日～9月12日
- * 科学研究費補助金 「弥生農耕の起源と東アジア-炭素年代測定による高精度編年体系の構築-」
〈研究協力者〉西田 9月1日～3月31日
- * 新潟県立歴史博物館調査研究事業総合研究「日本古代『辺境』の様相」(長岡市)
〈共同研究員〉中田 10月1日～3月31日
- * 科学研究費補助金「縄文土器の彩色技法に関する復元的研究」にともなう調査
(茨城県・栃木県・東京都)
〈調査協力者〉田口 11月23日～11月28日
- * 保存処理技術の指導にともなう講師 (富良野市)
〈調査指導〉田口 11月29日～11月30日

(2)

ア 研修・研究会参加

- * 奈良文化財研究所埋蔵文化財発掘技術者専門研修 (奈良県)
平成15年度「報告書作成課程」芝田 1月14日～1月23日
- * 奈良文化財研究所埋蔵文化財発掘技術者特別研修 (奈良県)
平成15年度「動物考古学課程」福井 3月2日～3月5日
平成16年度「遺物観察・構造調査課程」福井 11月17日～11月19日
- * 平成16年度アイヌ民俗文化財専門職員等研修会 (札幌市)
田口・藤本 10月20日～10月22日

イ 内部研修

*現地研修会（森町）

9月9日

*平成16年度現地調査報告会（センター研修室）

11月30日

6 平成16年度刊行予定報告書

- 第208集 「森町 濁川左岸遺跡(2)」
北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第209集 「恵庭市 西島松 5 遺跡(3)」
柏木川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第210集 「白滝遺跡群V」
一般国道450号白滝丸瀬布工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第211集 「恵庭市 柏木川 4 遺跡・柏木川13遺跡(2)」
柏木川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第212集 「根室市 穂香川右岸遺跡」
一般国道44号根室市根室道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第213集 「遠軽町 栄野 1 遺跡・新野上 2 遺跡」
社名濁瀬戸瀬（停）線（B 7 - 10）局改工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第214集 「北檜山町 生洲 2 遺跡」
太櫓川広域基幹改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第215集 「江別市 対雁 2 遺跡(6)」
石狩川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第216集 「森町 上台 2 遺跡」
北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第217集 「森町 上台 1 遺跡」
北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第218集 「森町 森川 4 遺跡」
北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第219集 「森町 三次郎川左岸遺跡・石倉 5 遺跡(2)・石倉 4 遺跡」
北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書

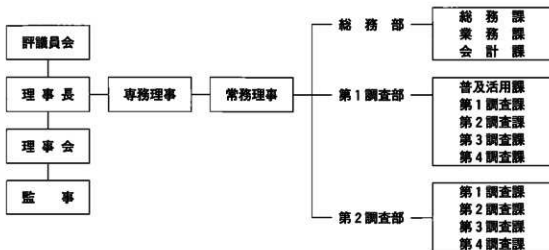
7 組織・機構

役員（平成16年6月16日現在）

理事長	森重 権一	財団法人北海道埋蔵文化財センター
専務理事	宮崎 勝	財団法人北海道埋蔵文化財センター
常務理事	佐藤 俊和	財団法人北海道埋蔵文化財センター
理事	石林 清	北海道地域文化保存振興協会理事長
理事	菊池 俊彦	北海道大学教授
理事	北川 芳男	日本地質学会名誉会員
理事	谷本 一之	北海道立北方民族博物館長
理事	田端 宏	道都大学教授
理事	西田 豊	北海道札幌南高等学校長
理事	蜂谷 光雄	由仁町教育委員会教育長
監事	佐藤 一夫	前苫小牧市勇武津資料館長
監事	村山 邦彦	北広島市教育委員会委員長

評議員（平成16年6月16日現在）

評議員	大山 雄二	北海道教育庁生涯学習部生涯学習推進局長
評議員	加藤 邦夫	時計台館長
評議員	坂本 邦夫	札幌市立西岡北中学校長
評議員	白崎三千年	北広島市教育委員会教育長
評議員	昌子 守彦	酪農学園大学教授
評議員	鶴丸 俊明	札幌学院大学助教授
評議員	永井 秀夫	北海道大学名誉教授
評議員	西田 憲史	北海道教育庁企画総務部教育政策課長
評議員	古俣 芳晴	北海道教育庁生涯学習部文化課長
評議員	山田 健	財団法人北海道開拓の村学芸課長



8 職 員 (平成16年4月1日現在)

総務部

総務部長	佐藤英一	業務課長	菅野 聡
総務課長	松本 繁	主 査	磯田千秋
主 査	葛西宏昭	主 任	小杉 充
主 任	小笠原学	参 与	中村輝夫
主 任	中村貴志	会 計 課 長	吉田貴和子
参 与	金谷英男	主 任	今本宏信
		参 与	菊池隆雄

第1調査部

第1調査部長	○千葉英一
普及活用課長	○越田賢一郎
主 査	藤本昌子
主 任	○田中哲郎
主 任	藤井 浩
主 任	倉橋直孝
第1調査課長	田口 尚
主 査	花岡正光
主 査	立川トマス
第2調査課長	佐藤和夫
主 任	土肥研晶
主 任	立田 理
主 任	吉田裕史洋
第3調査課長	○高橋和樹
主 査	越田雅司
主 任	鈴木宏行
主 任	愛場和人
主 任	直江康雄
第4調査課長	三浦正人
主 査	皆川洋一
主 任	菊池慈人
主 任	佐藤 剛
主 任	阿部明義
主 任	広田良成

第2調査部

第2調査部長	西田 茂
第1調査課長	遠藤香澄
主 査	鈴木 信
主 任	笠原 興
主 任	芝田直人
主 任	酒井秀治
第2調査課長	佐川俊一
主 任	○中田裕香
主 任	中山昭大
主 任	富永勝也
主 任	福井淳一
主 任	山中文雄
第3調査課長	熊谷仁志
主 査	谷鳥由貴
主 任	袖岡淳子
主 任	末光正卓
主 任	坂本尚史
主 任	大森司統
第4調査課長	○工藤研治
主 査	鎌田 望
主 査	村田 大
主 任	新家水奈
主 任	影浦 覚
主 任	柳瀬由佳

○：北海道教育庁の派遣職員

調 査 年 報 17

平成16年度

平成17年1月31日発行

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

〒069-0832 江別市西野幌685-1

TEL 011-386-3231・FAX 011-386-3238

URL <http://www.domaibun.or.jp/>

E-mail mail@domaibun.or.jp

印 刷 社会福祉法人 北海道リハビリー

〒061-1195 北広島市西の里507番地1

TEL 011-375-2116☎・FAX 011-375-2115

